
シークレットゲーム After Story

トペルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム After Story

【著者名】

トペルカ

【Zコード】

N6314M

【あらすじ】

シークレットゲームから約1年・・・半年振りに皆と出会う事になつた総一と咲実。

そこである人物が提案したのが・・・「ボウリング大会!」だった。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

登場人物紹介

御劍総一 18歳

本作の主人公。大学1年生。

見た目はどちらかというとイケメン。成績は中の上、運動神経は普通だが、

咄嗟の判断は的確であり頭の回転は人並み以上には速い。
性格は陽気。

現在は一人暮らし。

本人は普通だと言い張るが、実はボウリングは得意。
ボウリングスキルAランク（咲実の応援時AAAランク）

姫萩咲実 18歳

本作主人公の彼女。主人公と同じく大学1年生。

総一と同じ大学に通う。

控え目な性格で成績優秀のお嬢様。体力に自信はないが総一がい
ると頑張れる。

実はかなり嫉妬深い。

ボウリングの実力は意外とある。

ボウリングスキルBランク（総一応援時Aランク）

桜姫優希 17歳

本作主人公の幼馴染で元恋人。

まっすぐな性格で正義感が強く、ズルや卑怯を嫌う。

1年ほど前交通事故のため他界。

見た目は姫萩咲実と瓜二つ。

色条優希 10歳

小学生。

顔は年相応で幼いのだが、時折大人が惹き付けられるような
儂げで愁いを帯びた表情を見せる。

主人公の事を「おにいちゃん」と慕う。
ボウリングは年相応の実力より少し上。
ボウリングスキルロランク

陸島文香 20代半ば

O-L。有名企業の受付嬢をしている。

女性にしては度胸があり、他人に関してよく気が利くため、
総一たちの姉御的存在となっている。

ボウリングの実力はメンバートップクラス。
ボウリングスキルA A Aランク

綺堂渚 20代半ば

終始のんびりとした思考と言動をしている。

しかし周りからは「無意識に場を和ませるムードメーカー」的存
在となっている。

ボウリングの実力だけではなく、普通ではありえない音を出すこ
とも出来る。

ボウリングスキルA Aランク（ただしミスが多い）

葉月克巳 40代

中年の地方公務員。

身体能力や頭脳面では特別目立つた長所はないが、

精神的には人並み以上に安定しており、
年長者らしく落ち着きのある男性。

ボウリングの実力は並程度。

ボウリングスキルCランク

葉月かりん（はづき カリン） 15歳

「ゲーム」の後、葉月克己に養子としてもらわれる。

快活でボーイッシュなスポーツ少女。何事においても常に前向きで、

考えるよりも先に手が出るタイプ。

小柄ながら運動神経は良い。

ボウリングの実力はそこそこある。

ボウリングスキルAランク

葉月かれん（はづき かれん） 10代（優希と年齢が近い）

「ゲーム」の後、葉月克己に養子としてもうわれる。

かれんの妹。

性格は明るく難病だったことを思わせない元気さがある。

ボウリングは苦手。

ボウリングスキルDランク

やはた
矢幡麗佳 21歳

女子大生。専攻は数学と論理学。

容姿端麗・頭腦明晰、「ゲーム」参加前は現実に全く期待をしていなかつたが、

総一達と出会い性格も丸くなり、今では友達もいる。

ボウリングの実力は未知数だが大学の友達の中ではトップクラス

の実力がある。

ボウリングスキル????ランク

みやざわ とちい

宮沢智子 21歳

オリジナルキャラ。

女子大生。麗佳と同じ大学に通う麗佳の親友。
見た目は可愛いがかなりの天然（麗佳曰く渚さん並だといふ）
運動神経は皆無、成績は中の下。

ボウリング非参加

もりした みづゆ
森下美冬 21歳

オリジナルキャラ。

女子大生。智子と同じく麗佳の親友。
年齢は皆と同じだが、どちらかというとお姉さんの存在。
男友達の和真とは高校時代から付き合っている。
怒ると非常に怖い。

ボウリング非参加

うえの けんじ
植野健吾 21歳

オリジナルキャラ。

大学生。麗佳の男友達。

スポーツ万能、成績下の下、スポーツ馬鹿。

性格はとにかく熱い男。

密かに（本人はそう思っている）智子に想いを寄せている。

ボウリング非参加

荒木和真
あらき かずま
21歳

オリジナルキャラ。

大学生。麗佳の男友達。

身体能力は平均より上、成績優秀。

ボウリング 非参加

スミス（すみす） 年齢不明

古語の日本語をしゃべる。

ボウリング非参加

麗佳編
新登場人物

漆山権造
うるしゃまんじんぞう
62歳

オリジナ・・・・ル? キヤラ。

居酒屋「隠れ家」の店長。

愛称はオヤジ（文喬だけはおじさんと呼ぶ）
生名は用ら、古姓アキ前バモニ。

常連客も多い。

青海衣更
あおみいさら

15歳

恋と選挙とチョコレートより特別出演。

私立高藤学園に通う1年生。

性格は明るくとにかく笑顔が可愛い。

居酒屋「隠れ家」でアルバイトをしている。

その笑顔を見るために来る客も多い。

ボウリング非参加

手塚 義光 20代

元会社員（本人情報）。

言動や服装は何処からどう見ても不良。

長身で帽子を被っているのが特徴。

現在は高山と一緒に傭兵をしている。

総一の事（総一のような人間）を異様に嫌っている。

ボウリングスキル????ランク

高山 浩太 30代

現役傭兵。

冷静沈着な性格であらゆる事態にも動じない精神力と実戦経験者ならではの慎重かつ論理的な判断力の持ち主。

とことん無表情・無感情。

とにかく幸が薄い。

ボウリングスキル????ランク

登場人物紹介（後書き）

11/11日追加

麗佳編登場人物追加

- ・漆山権造

- ・青海衣更

11/16日追加

麗佳編登場人物追加

- ・手塚義光

- ・高山浩太

11/17日追加

ボウリングの実力を現す「ボウリングスキルランク」を追加

ランク：S A A A A A B C D ランク

11/21日追加

オリジナルキャラ一部設定変更

- ・荒木和真

- ・森下美冬

上記2名の設定を一部変更

始まりの朝（旧タイトル：序章）（前書き）

旧タイトル「序章」をリメイクしました。
リメイクに伴い一部キャラ設定が変更されていますので、ご了承ください。

始まりの朝（旧タイトル・序章）

「総一さん早く来て下さいー！」

「あ、ああ・・・」

俺の名前は御剣総一^{みつるぎそういち}、18歳 大学1年生だ。

今日の予定は自分の家で寝て過ごすはずだったのだが・・・。

- - - 2時間程前 - - -

「こちさん・・・」

（ん？今誰かに呼ばれたような・・・いや、ここには住んでるのは

俺一人だから気のせいか）

「ー もんー！」

（さつきよりも大きく聴こえる。なんだ？幻聴か？ どうとう頭が
駄目になつたか？なんか自分で思つて虚しくなつてきたぞ・・・）

「総一さんー！」

（今度ははつきり聴こえてくる。なんだよ・・・夢なのこやけにリ
アルじやねえか・・・）

「これだけ叫んでも起きないなんて・・・もつあれしかないですね」

(ん? あれってなんだ?)

「総一さん、早く起きないとしちゃいますよ・・・?」

(好きにしてくれ・・・俺は眠いんだ)

・・・チコッ。

(ん? なんだ? 今頬が少し濡れたような・・・もしかして現実・・・?)

よつやく俺はそれが夢ではないと気づいて重い瞼を開けた。

「んう?」 眠そうな顔で総一。

「総一さん、目、覚めましたか?」

「あ、ああ・・・」

俺が目を開けた先に居たのは恋人の 姫萩咲実ひめはぎ さくみだった。

「なあ咲実、今何かやつたか? なんか頬が少し濡れた感じがしたんだが」

「気のせいじゃないですか?」 二三二三しながら咲実。
(気のせいで、絶対にかしただろ?)

「まあいいや・・・ん?」

(何か引っかかる)

「あつ!」

「ひやう! な、なんですか?」 驚く咲実。

「なんで咲実がここにいるんだ……？」

「なんでって、もしかして約束、忘れたんですか？」ムスッとした顔で咲実。

（やばい、まったく記憶に無い……）

「何、言っているんだ。俺が忘れるわけないだろ？」

堂々と嘘をつく總一。

「本当に覚えてましたか？」

笑顔で咲実。

（「いやええ。田が笑つてない……）

「メンナサイ、忘れました」

「もう……」呆れた様子で咲実。

「今日嘘をこと余つて約束したじゃないですか」

「あっ」

はつとした様子で總一。

（思ひ出しちた……）

「思い出しましたか？」

「あ、ああ」

「じゃあ早く支度してください。朝食、もうすべ出来ますから」

「おお、やつこえればわざから美味しそうな匂いがする」と思つたら

(「これは焼き魚か？ ん？なんか焦げ臭いよつな・・・まさか）

「なあ咲実、焦げ臭くないか？」

「そういえばそうですね・・・あつー。」

慌てて台所に戻る咲実。

「やつぱりか・・・」

苦笑しながら着替え始める総一。

「よしー。」

着替えを終え、部屋を出ようとする。

「つと、危ない危ない」慌てて戻る総一。

「おはよー。優希」

立て掛けたある写真に向かつて言つ総一。

（優希、これでいいんだよな・・・？）

「総一さん、出来ましたよ~」

リビングから咲実の声が聴こえてきた。

「あー。」

俺は返事をした。

リビングに行くとそこには朝の和食の定番、

白飯・味噌汁・田玉焼き・サラダ・焦げた焼き魚があった。

「・・・はは」苦笑する総一。

「す、すいません。魚、焦がしちゃいました・・・
申し訳なさい」と咲実。

「いいよ、俺のせいでもあるわけだし
そつまつて魚をほぐす縦一。

「あ、あの無理して食べなくとも・・・」心配そうに咲実。

「あむ」

「ふむ、ちょっと苦こなさ中の方は普通にまごよ」

半信半疑で食べる咲実。

「あむっ」

「本当ですか？」

「あ、本當ですね。中は大丈夫です」

「ヒリで今日何処に行くんだっけ?」

「思い出したんじゃないですか?」

呆れる咲実。

「あー約束してたのは思い出したんだが、内容までは・・・
すまなせうに縦一。

「今日久々に畠さんと会つたですよ。その後どうあるかは・・・私
も知らないんですけど」

「おおー！」

(完全に思い出したわ)

「おおーって、もう……」呆れながらも楽しそうに笑う咲実。

「ん? なんで笑つてるんだ?」

「なんでもないで

「楽しそうに咲実。

「そつかなんでもないか、はは」

絶一毛金にれて第二

楽しく会話しながら食事を終える一人。

「あ、洗い物は俺がやるよ」

「え、でも……」「

「それくらい出来るってというか今まで料理も自分でしてたんだから。それに最近ずっとだろ?なんかさ・・・申し訳ないっていうか・

1

「別に私が好きでせいでる」などすから気にしなくてもいいんですよ?」

• ۱۰ •

(もし)「んな所文藝さんに見られたら……」

文香「総一君！何、咲実ちゃんに通い妻させてるのよ。」

(とか言つておけりだよな……)

「わかつた……交代でやる。今日は俺が洗つから」

「わかりました。でも総一さん、もつと私に甘えてもいいんですよ？」

「いや、十分咲実には甘えさせてもらつてるよ」

「ええと、そういうのもつと頼つて欲しいといつが……」「（く、そんなこと言わると甘えたくなるじゃないか……！作戦か！）」これは誘つてるのか！」

「大丈夫、勉強は頼りにしてるわ」

「もう……」

「はい、洗い物終了」

「時間、大丈夫か？」

「はい、まだ余裕ありますよ。部屋の時計を見る咲実」

「そうか」

（ん？何か重大なことを忘れてるような……）

「あつ！？」

「ひやつ！？な、なんですか？」驚く咲実。

「その時計確か20分遅れてる……」

「え・・・？」

自分の腕時計と部屋の時計を見比べる咲実。

「ああ！？」

「や、総一さんち、遅刻です！」

「やばい・・・。遅刻なんてしたら文香を殺されるとかね・・・！」

「い、急ぎましょっ！」

「ああー！」

- - - 駅前 - - -

「あ、來たきた。一人ともおつそーいこのままじや遅刻しちゃうよー！」

「わ、悪い。優希

「謝る総一。

少女の名前は色条優希(しきじょう ゆうき)小学生だ。なんでこんな子と知り合いかといふと・・・ちなみに口つづりじゃないからな？そこだけは勘違いするなよ！

とあるきっかけで知り合つただけだ。本当にそれだけだからな？

「す、すいません優希ちゃん

同じく謝る咲実。

「お姉ちやんはこいよー。ビーセお兄ちやんが寝坊でもしたんでしょ？」

「な、何を言つているんだ。寝坊なんてするわけないだろ?」
(嘘は言つてない。俺は寝坊はしてない!)

「じゃあ約束を忘れてたとか?」
(な、なんて鋭いんだ・・・!?)

「ソシナワケナイヨ?」

「お兄ちゃん・・・忘れてたんだ・・・」
(な、なぜバレた!?)

「総一さん、バレバレです・・・」

「そうか、バレバレか・・・ふう・・・」

「ふう・・・。じゃないよお兄ちゃんーほり急ぐーもうすぐ電車く
るからー!」

「いや、咲実体力大丈夫か?」

「ちょっと疲れましたけど・・・まだ大丈夫です」

笑顔で咲実。

「わかった、急ぐぞ!」

「はい!」

「」の状況お兄ちゃんのせにいつちやんとわかつてるよね?」

「わかっている。今文香さんへの言い訳を考えている……」「走りながら言いつ緒一。

「そんなこと考えないで素直に謝ればいいんじゃ……？」
と咲実。

「素直に謝ったところで許してもらえないだろう……？」

「言ひ訳考えても一蹴されそうだけどねー」と優希。

「い、言ひつな。さつと責められるのは俺だけだからな……」

「『当たり前です（だよ）』」咲実と優希の声がかぶる。

そんなやつ取りでも俺は楽しかった。たぶんこの中で一番浮かれるのは間違いなく俺だらう。

（優希、俺やつとまともに生きられるようになつた気がする）

優希？ 「ふふ

（？今優希が笑つた、そんな感じが……）

「お兄ちゃん！ ベース落ちてるよー。」

「ああ、悪いー。」

前を行く一人に追いつくように走る俺。

「久々にみんなに会うんだー！ 今日は楽しむぜー。」

いひして総一達の慌しい1日が始まった。

始まりの朝（旧タイトル：序章）（後書き）

序章リメイクしました。

11 / 10

文章を読みやすく改行しました

半年振りの再会（前書き）

半年振りに会つと約束したことをすっかり忘れていた総一。
果たして総一は間に合つのか！

シークレットゲーム アナザーストーリー 第2話今ここから始まる。

半年振りの再会

季節は夏も終わり、少し涼しくなってきた時期、椎暮ツ戸公園しーくわつとこうえんで年頃の女の子と無邪気な顔で笑っている女の子一人が話している。

年頃の女の子の名前は、葉月 はづき カリン

無邪気な顔で笑っているのは、葉月 はづき カレン。
そしてその後ろにいる男性は、葉月 はづき 克巳かつみだ。

「ねえ、姉さん、今日皆と会えるんだよね？」
無邪気な顔でかれん。

「そうよ、かれん 半年振りに皆と会えるのよ
嬉しそうな顔でかりん。

「ははは、一人とも楽しみで仕方ないみたいだね」

「うん、だつて皆のおかげで私は助かったから・・・それに葉づ・・・
・お父さんが養子にしてくれて私、嬉しかった」

「急にそんな事言われると照れるな、ははは」

「あ～、かりんちゃん、かれんちゃん、はっけ～ん
いかにも天然な人の声が聞こえてきた。

「あ、渚さん！」嬉しそうな顔でかりん。

「葉月さん、かりんちゃん、かれんちゃん お久しぶりです～
」とろけそうな笑顔で渚。

「お久しぶりです、渚お姉ちゃん」

「お久しぶりです、渚さん」

「お久しぶりですね、渚さん」

「はい、お久しぶりです～渚さんお変わりな～よう～安心しましたあ～」

「他の人はあ～まだ来ていないんですねえ～キヨロキヨロする渚。」

「あ～れ～？」

渚が少し離れたところを見ている。

「どうかしましたか？渚さん」

「あそこそこの文香さんじゃないかなあ～？」

「え？あ、本当だー」

「お～い、文香さん～～～ん

大きな声で叫ぶかりん。

その声に気づいた文香は駆け足でやつてくる。

「お、暫時間通り集まつてゐるわね
一ヤリ、と笑う文香。」

「て、まだあの3人は来てないわね」

「まいにわ。それよりも昔元氣そつでなによりだわ」

「文香さんも元気そうで」

「かれんぢやんはもうだいぶよくなつたのかな?」

又香がソレ小酔子が顔で言ひ

「ほい！おかげで、もう普通の学校でも通い始めたわ」

「そう、それを聞いてお姉さん安心したわ」クスクスと笑う文香。

「文香君も元気みたいだな」後ろで見守っていた葉月が言う。

「おじ様も元気そうでなによりです」

一にしてもあの3人遅いわねえ！」

「もつ約束の時間過ぎてゐてこうのに・・・」

• • • 30分後

「遅い！遅い！おひそれ！」

「ふ、文香さん落ち着いて下さい」
なだめよつとするかれん。

「だつてあの三人半年前も遅刻したのよー。もつ常習犯よー。」

「まあ、大方御剣のせいだらうけど……」
呆れて言つかりん。

「遅いですねえ～」これはあ～お仕置きが必要かなあ～？」

「はは、総一君早くこないと大変な事になりそうだよ」
苦笑する葉月。

「・・・さん、急いで下さいー。遅刻ですよー。」

「お兄ちゃん早くー早くー！」

「い、言われなくともわかってるー。」

「お、噂をすれば・・・ね」
ワインクをしながら笑う文香。

「あの3人まったく変わってないみたいですね」

「はは、そうみたいだね」

「はあ・・・はあ・・・お・・・遅・・・遅れてすい・・・ません」
疲れきった表情で言つ総一。

「遅いー。30分遅刻よー。30分ー。」

「やつだよお～総一くん女の子を待たせるな」といつもつかなあ～？」

「えっと……その……ね……寝坊しました！」

ゲシッ。文香が総一を蹴る。

「まつたく……にしても貴方達も大変ねえ～、咲実さん嫌気がさしたら捨ててもいいのよ？」

「い、いえ大変ですけどその、楽しい……です」
顔を伏せて恥ずかしそうに言つ咲実。

「う～ん！青春つていいわねえお姉さんが恥ずかしいじゃない」
笑いながら言つ文香。

「うん、うん、お姉ちゃんお兄ちゃんにベタ惚れだもん」
嬉しそうに言つ優希。

「ゆ、優希ちやん！」

顔を真つ赤にして言つ咲実。

「ふふふ」

「か、かりんちやん……」

「あ、ごめんなさい咲実さん」
慌てて謝るかりん。

「姉さん、咲実お姉ちゃんが羨ましいんだよね？」

「え・・・？」

「！」、「らーかれん！余計な事言わなくていいのー。」
慌てるかりん。

「あ、あの咲実さん」これは・・・その・・・」

「ふふ、かりんちゃん可愛いからすぐ」に良い人見つかるよ
笑顔で言う咲実。

「か、可愛い・・・だなんて・・・」
顔を真っ赤にして言うかりん。

「姉さん、顔真っ赤」
無邪気に笑うかれん。

「もう！かれんなんて知らない！」

「わわー！」、「めんなさい。姉さん」

「もつ・・・」

少し疲れた様子でかりん。

「3人も向こうは大変な事になってるみたいだよ」
苦笑して言う葉月。

「總一くん？自分が何したかちゃんとわかつてたかなあ～？」
怒った声で、渚。

「な、渚さん怖いです……」
うろたえる総一。

「当たり前です！怒ってるんですからねー！」

「す……すみません！」

全力で謝る総一。

「とこひことで総一君には罰を下ります

「ば、罰……？」

田をパチパチさせり言ひつ總一。

「田的地まで畠の荷物持ちです

「ぜ、全員ですかー？」

驚く総一。

「遅刻したんですからそれくらいことへゼんです

「わ、わかりました……」

総一は脱力した。

「じゃ、総一君さしそくだけどこれ、お願ひね
嬉しそうに言ひ文番。

ドサッ。

「これ一体なにが入ってるんですか……？」

「何？知りたい？教えないけど」「

「お、重い・・・」

「あ、そつそつ全員で言つのは嘘だから安心して」「

「総一さん大丈夫ですか・・・？」

心配した顔で言う咲実。

「だ、大丈夫・・だ・・・」

「全然大丈夫なように見えないです・・・」

「総一君、私が少し持とつ」

「葉月さん・・・すみません少し、お願ひします・・・」

「さて・・・これで全員揃つたわね！」元気な声で、文香。

「じゃあ皆ボウリング場へ行くわよー。」「

「「「お――――。」「」」

半年振りの再会（後書き）

2話目作ってみました。
改めて自分の国語力のなさに泣けてくる自分・・・でもめげずに頑張る！

今回は全員との再会ですね。
肝心のボウリング大会は次からです。
更新ペースは遅いと思いますが、今後ともよろしくお願いします。

ボウリング大会、開幕（前書き）

ついに始まつた「陸島文香プレゼンツ ボウリング大会」
総一は咲実と旅行に行くために見事優勝することが出来るのだろう
か！？

ボウリング大会、開幕

「さて、目的地に着いたわけだけど、さっそくグループ分けをしましょうか」

主催者の文香が言つ。

「あ、総一君、おじ様荷物そこに置いてください」

ドサッ。

「つ、疲れた・・・」

疲れきった顔で総一。

「お疲れさまです。総一さん」

笑顔で労う咲実。

「あ、ああ」

照れ臭そうに総一。

「でグループなんだけど、私達は8人だから4・4で分けるんだけど・・・総一君はボウリングは得意?」

「人並み程度だと思いますよ」

総一は言つ。

「そつか、じゃあ咲実ちゃんは?」

「私は・・・苦手です・・・」

顔を伏せる咲実。

「私は普通かな～」
優希が言つ。

「あたしは得意ですよ
自慢げに、かりん。

「姉さんと違つて私は苦手です・・・」
咲実と同じように顔を伏せるかれん。

「おじ様はどうですか？」

「ボーリングか娘達が子供の頃はたまに行つていたが、ここ数年は
行つてないな・・・」

懐かしむように葉月。

「わたしはあ～実はあ～ボウリング得意なんですよ～
自信満々に言つ渚。

「わうわう文香さんはどうなんですか？」
と、総一。

「え？ 私？ ふふふ・・・それはどうかしら？」
含み笑いをする文香。

「わうね～、咲実ちゃんはやつぱ總一君と一緒にいいわよね？」

「え、えっと・・・その・・・はい・・・」
顔を真っ赤にして言つ咲実。

「じゃあやつになると……」

考える文香。

「私、総一君、咲実ちゃん、渚ちゃん」

「おじ様、かりんちゃん、かれんひやん、優希ひやん」

「で、といひかしら?」

「わっ・・・ですね実力で分けるとそんな感じですね」

「僕もそれでいいと思つよ」

同意する総一と葉月。

「じゃあ次は景品の発表ね」

「え? 景品?」

不思議そつに言つかりん。

「ボーリング大会なんだからあつて当然でしょ
さも当然のように文香。

「景品つて一体何なんですか?」

総一が聞く。

「総一君が運んでくれた物よ」

「わお披露田するわよ~」

バサッ。

「地デジ対応、3Dオーディオ（カラビト）やー。」

「「おお～」」

「ところが総一、よくこんな持てたね？」
と関心したようにかりん。

「こや～」れ重りが入ってるだけのハリボテだぞ？」

「え？」

セツコはよくみるかりん。

「あ、ほんとだ！？」

「ちゅうど、総一相なんでバラすのー。」

「いや、なんで、と言われても・・・」

「あー、ほこほこ、ついでかねー雰囲気を出すために用意しただけ
ですよー」

「開き直らなこでくださー・・・。」

「悪かったわね。でも本当に貰えるのは嘘じゃないわよ。」

「それが嘘なら」れ用意した意味ないでしょ・・・。
呆れる総一。

「まあもう一個景品があるから簡便してね」

そういうて券を取り出す文香。

「京都高級旅館2泊3日2名様 宿泊券！」

「な、なんだとー?」

驚く総一。

「どうしたの総一君そんなに驚いたやつて?」「ヤリと笑う文香。

「あ、咲実ちゃんと行きたいのね、でも残念これが貰えるのは優勝者だけよ」

「そ、咲実!俺、頑張るよー!」「じい勢いで言う総一。

「え、あ、はー!頑張ってくださいー!」「戸惑いながら、咲実。

「お兄ちゃんす」「こやる気だね~」「呆れた顔で、優希。

「まあ御剣らしいけどね」「苦笑しながら、かりん。

「これは・・・向こうのグループはすごい戦いになりそうだね」「同じく苦笑しながら、葉月。

「じゃあ・・・陸島文香プレゼント 第1回ボウリング大会開催するわよー!」

Aグループ：文香 総一 咲実 渚

Bグループ：葉月 かりん かれん 優希

- - - Aグループ - - -

「まずは私からね」
文香が言う

「文香さん頑張つてくださいねえ～」

文香、第1投。

スーーー。

「えい！」

ゴロゴロゴロゴロ。

文香のボールは大きく右にズレた。

「文香さんすゞいズレますよ」
笑いながら総一。

「ふふ、私を甘く見ないで欲しいわね」
ニヤリと笑う文香。

ツーー。

「な・・・なに!?」「驚く総一。

ガシャアアーン。

「す、すゞい・・・」

驚く咲実。

「わあ～文香さんいきなりストライクなんてす、」「ですねえ～嬉しそうに言う渚。

「まあこんなもんよ」

「そ、総一さん・・・」

心配そうに、咲実。

「大丈夫だ」

冷静に総一。

「あれ総一君すゞい冷静じゃない」

ニヤニヤしながら文香。

「まあ見ていてくださいよ」

ス―――。

「はあー。」

総一のボールは真ん中より少し右の方を転がる。

「いいコースじゃない」

ガシャアーン。

「総一さん、ストライクです！」
はしゃいで言う咲実。

「うしつー。」

ガツツポーズする総一。

「わあ～総一君もす～いねえ～」

「なかなかやるわね・・・」
楽しそうに、文香。

「次は、私ですね・・・」
緊張した面持ちで咲実。

「咲実、落ち着いて」

「咲実ちゃん肩の力抜いてえ～」

「は、はい！」

「い、いきまーす！」

スー。

「えいっー。」

咲実のボールは真ん中を転がる。

パタパタパタ。

「あ・・・」

残念そうな顔で、咲実。

「8本でスプリットか・・・
難しそうな顔で総一。」

「これは難しいわね・・・」

「これはちょっと私でも無理ですう〜」

咲実が投げたボールは7番ピンと10番ピンを残していた。

「うう・・・」

泣きそうな顔で咲実。

「これはどうしようもないからどちらか一本倒せばいいよ
咲実に微笑みかけながら総一。

「は、はい・・・」

力タツ。

「咲実、ナイスボール
と総一。」

「あ、ありがとうございます」「やそこまで
嬉しそうに言う咲実。

「咲実ちゃんは9本ですねえ〜」

「次は渚ちゃんね」

「はい、頑張ります！」

スー。

「えい」

ブン！

「ロ、ロ、ロ、ロ、ロ。」

ガシャーン。

「あう～1本残りました～」

「い、今すゞい速度で転がつて言つたわよね・・・」

「ええ・・・」

「渚さんすごいです・・・」

三人とも驚いていた。

「でもお～スペアは取りますよお～」

「えい」

「ロ、ロ、ロ、ロ、ロ。」

バーン！

「い、今バーンって音しました！？」

「渚さんのボールって何か特別仕様なんですか・・・？」

驚く総一と咲実。

「まるでゲームかアニメね・・・」
呆れる文香。

「やりましたあ～ブイ！」
✓サインをする渚。

「皆さんどうかしましたかあ～？」
不思議そうな顔で言う渚。

- - - Aグループ第1フレーム - - -
文香 ストライク
総一 ストライク
咲実 9本
渚 9／スペア

- - - その頃Bグループ

「 「 「 「 「 「 「

「え、えっと・・・向こうのグループのレベルが高すぎるよ・・・

と優希。

「私こっちでよかつたかも・・・」
安堵の表情を浮かべる、かりん。

「私も・・・」

それに続く、かれん。

「はは・・・そうだね・・・」

苦笑する葉月

- - - Bグループ第1フレーム - - -

葉月	8本
かりん	7／スペア
かれん	4本
優希	7本

つづく

ボウリング大会、開幕（後書き）

3話目にしてやっとボーリングの話入ることが出来ました・・・。
意外と書いてるつもりでもぜんぜん書いてないんですね。
次回麗佳さんがすごい薄い登場します。

ペースは遅いですが、これからもよろしくお願いします。

接戦の第2フレーム（前書き）

第1フレームで力を見せ付けた、文香・渚
それに負けじと本気で挑む総一。
はたして総一は優勝することが出来るのだろうか！
Bグループも忘れないでね！

接戦の第2フレーム

- - - Bグループ第2フレーム - - -

「さて・・・我々も負けでられないな・・・」

「お父さん意外と負けず嫌いだよね」とかれん。

「はは、そうかもしれないな」
笑いながら葉月。

「おじちゃん頑張つてー」
と優希。

ス――。

「ふつ」

〃ロ〃ロ〃ロ。

葉月の投げたボールはやや右にそれた。

ガツシャーン。

「ふむ、5本か・・・」

残念そうに葉月。

「大丈夫ですよ、スペア取れますって
笑顔でかりん。」

「ああ、そうだな」

スーーー。

「ふつ」

ゴロゴロゴロ。

葉用のボールはピンに吸い込まれていく。

ガツシャーン。

「どうやら、いまくいつたみたいだな・・・」

安心する葉用。

「ねじちゃんす」——スペアだよ——。「
はしゃぐ優希。

「ナイスです。お父さん」
とかりん

「お父さんす」——「
とかれん。

「ああ、ありがとう3人とも」

「次は私ね
とかりん。

スーーー。

「えい」

「ロ、ロ、ロ。」

かりんのボールは的確にピンを捕らえる。

ガツシャーン。

「姉さん、すごーい！ストライクだよー！」

「あはは、ありがとう。かれん」
嬉しそうにかりん。

「さすが、かりんちゃんだね」

と葉月

「さすが、かりんお姉ちゃん」

と優希

二人は笑顔で言った。

「う～次は私があ・・・」

不安そうにかれん。

「大丈夫だよかれん、あんたは運動神経いいほうなんだからコツを
掴めば行けるよ」

「うん・・・頑張つてみる」

「がんばれーかれんちゃーん」と優希。

ス
—
—
。

「えい！」

גָּדְלָה

かれんの投げたボールは真ん中より少し左に転がる。

ガッシャーン。

信じられないという顔でかれん。

「やつたよかれん！ストライクだよー。」
大はしゃぎするかりん。

「かれんおねーちせんす」——「

嬉しそうに葉用

「やつたー！」

「じゃあ今度は私ねー」

「えい！」

「ゴロゴロゴロ。」
ガシャーン。

「あ～～8本かあ～しかもスプリット・・・」れは一本狙つしかな
いね～」

「えい」

カコーン

「よかつたよ優希ちゃん」とかれん。

「ありがとかれんちゃん」と優希。

・ - - その頃Aグループ - - -

「へえ～あの、かれんちゃんがストライクかー中々やるじゃない」笑顔で文香。

「かれんちゃん・・・中々悔れないかもしれないですう～と渚。」

「向ひつの事が心配だつたけど楽しんでるみたいだねほつとした様子で総一。

「総一さん心配性ですね」笑顔で咲実。

「はあ～～～これで麗佳ちゃんがいればなあ・・・」

大きなため息をつく文香。

「しょうがないですよ急にお仕事が入っちゃたんですねから・・・
残念そうに言う咲実。

「やうねえ・・・つーーー麗佳ちゃんと勝負したかったのにいいい
いい」

悔しがる文香。

「やうですねえーわたしもおー勝負したかったですー」

残念そうに渚。

「変わりに僕が相手になりますよ」

自信満々に総一。

「へえー言つひじやない総一君じやあお姉さん本氣出しちゃおつかな
ふふふ

不気味に笑う文香。

「文香さん・・・怖いです・・・」

少し怖がる咲実。

「大丈夫さ」
咲実を抱き寄せる総一。

「・・・はー」
安心しきつた顔で咲実。

- - - その頃の麗佳 - - -

和真「麗佳、この資料頼む」

麗佳「この資料ね、わかつたわ」

健吾「矢幡～、そつちが終わつたらこつちを手伝つてくれ、智子がパンクしそうだ」

麗佳「ん、わかつたわ」

美冬「麗佳ちゃん、なんか研究所のほうから電話が来てるよー」

麗佳一え？内線何番だ？

無外・3種たまご

麗佳 - あいかと

•

४१

叫ふ麗佳。

美冬「どうしたの麗佳ちゃん、そんなに叫んで」

驚く美冬。

智子「あつとあれだよお～例の、彼氏～

キッ！

智子「ひつー」

麗佳「だから彼氏じやなにいつて叫びてるでしょ
怒った顔で麗佳。

麗佳「それにもう彼女いるわよ、彼

智子「あ～そうなんだあ～

麗佳「はあ・・・なんで楽しみにしていた田にこんなことこ
落ち込む麗佳。

智子「えっと・・・その・・・ごんまいーー！」

無邪気な笑顔で叫ぶ智子。

麗佳「まあサクッと終わらせましょ・・・

美冬「そうね

智子「うふ、がんばるわ～

- - - Aグループ第2フレーム - - -

ガツシャーン。

「文香さんまたストライクです・・・
不安そうな咲実。」

「大丈夫だよ咲実」

ガツシャーン。

「やるじゃない総一君」

嬉しそうに文香。

「そりゃあ負けてられませんから
笑顔で返す総一。」

「わ、わたしも頑張らなきや・・・」

緊張する咲実。

「咲実肩の力抜いて~
声をかける総一。」

「は、はい！」

ガシヤーン。

咲実のボールは左のピン3本を残した。

「大丈夫行ける行けるスペア狙つて行こう」

「はい！」

元気に答える咲実。

「えーと・・・位置は「」で「」つい。」

「ロ「ロ「ロ。

ガシャーン

「あ・・・やりました！総一さんスペアです！」
嬉しそうに咲実。

「よくやつた咲実！」
同じように喜ぶ総一。

「咲実ちゃん以外とやりますねえ～」
関心する渚。

「元々コントロールはいいみたいねただ、力が・・・ちょっとね
冷静に分析する文香。」

「次はあ～わたしですねえ～いきますよお～」

「ええ～い！」

ビュンッ。

シャアアアアアアアアアアアアアアア。

ドーーーン！。

「 「 」 ？」 「

驚く文香、総一、咲実。

「えへへ～ストライクですう～
嬉しそうに渚。

「これでピンが壊れないなんて」このピンどれだけ丈夫なのよ・・・

呆れた様子で文香。

「渚さん本当に人間なんでしょうか・・・?
軽い放心状態で渚。

「あ、ああ・・・人間だよ・・・たぶん・・・
驚きを隠せない総一。

「あれえ～皆さんどうかしましたかあ～?
不思議そうに渚。

「もう渚さんにシッ！」むのはやめましたか？
と文香。

総一と咲実は頷いた。

- - - Aグループ第2フレーム - - -
文香 ストライク
総一 ストライク
咲実 スペア
渚 ストライク

	A グループ			B グループ			B グループ 第2フレーム		
	文香	アグリーン	カリん	渚	咲実	かれん	葉月	スペア	ストライク
1フレ	x	1フレ	-	20点	/	9点	9	-	-
2フレ	x	2フレ	-	-	/	-	-	-	-
				総一	x	x	優希	9本	-

× : ストライク
 / : スペア
 数字 : 倒した数
 ? 点 : 現在の合計点数

優
希
かりん
葉月

7 7 4 4 2 0 / 8 8
点 点 点 点 点 点 点 点

1 6 9 × × /
点 点 点 点 点 点

接戦の第2フレーム（後書き）

まずはお詫びを・・・

4話投稿遅れてすいません！

ちょっと時間がなくて書けませんでした>>

楽しみにしていた方申し訳ない・・・

そして麗佳の事なんですが・・・すっかり忘れてました！

麗佳好きな方「めんなさい！」

謝つてばかりのあとがきですが・・・これからもお願いします。
しばらく今回みたいに投稿が遅くなると思いますが、これからもよろしくお願いします。

9/22追記：1ヶ月以上あいてしまいましたが現在鋭意執筆中です。楽しみにしていた方、本当に申し訳ない。これからもよろしくお願いします。

波乱の第3・4フレーム（前書き）

まだまだ序盤だといつものにお互い譲らない戦いを見せる文香と総一。変化は唐突に訪れた・・・。

波乱の第3・4フレーム

- - - A グループ 第3 フレーム - - -

- - - H u m i k a s i d e - - -

「ふふ、簡単ね。」

余裕の表情でストライクを取る文香。

(とはいえこのままとこいつのもまずいわね・・・)

「ふふ」

不気味に笑う文香。

- - - S o u i c h i s i d e - - -

「文香さん不気味です・・・」

怖がる咲実。

(あの笑い方はなにか企んでいるな、なんでもこいー)

その後総一は咲実に言わなかつたのを後悔する事になる。

「ねえねえ咲実ちゃん」

笑顔で文香。

「なんですか?」

「あのねコソコソ」

咲実に耳打ちする文香。

(何話しているだ? まあ後で咲実に聞けばいいか、ここでストライク逃すわけにはいかないからな・・・よし、いくぞ)

総一が投げようとした瞬間。

「総一さん! 渚さんとデートしたって本当ですか!!」

大声で叫ぶ咲実。

「なつ! ?」

驚く総一。

ガタン。

ボールがガーターに落ちた音。

「・・・し、しまつたあああ
うなだれる総一。

「ふふ、大成功」

ニヤリと笑う文香。

「総一さん! 聞いてますか! 先週の土曜日渚さんとデートしたって
本当ですか! 」

ものすごい勢いで迫る咲実。

「え、えっとそれは・・」

(ま、まよい確かに先週渚さんと一緒に出かけたけどあれは咲実の誕生日プレゼントを選ぶために渚さんと…でもこれも言つわけには…)

「御剣さん？ちやんと答えてくださいね？」

笑顔で言つ咲実。

(田、田が笑つてない…というか呼び方が…バレンの範囲で話すか)

「えつと確かに先週渚さんと出かけたが、それは『トーー、じゃなくてただの買い物でだな…』
恐る恐る総一。

「じゃあなんで私も誘わなかつたんですか？」
怒つた顔で咲実。

(ますい、墓穴掘ったかも)

「あー…」

(渚さん助けてください…)

総一は渚に視線を送つた。

「あのね咲実ちゃん、実はあー私が総一君を誘つたのよー」と渚。

「どうして総一さんだけ誘つたんですか？」

「それはあー私の彼氏さんにプレゼントを贈りつゝ想つてえー私、

男の子が何喜ぶか全然わからなくてえ、選ぶのを総一君に手伝ってもらつたといつわけですよ～」笑顔で渚。

「えつ？え？渚さんの彼氏……？」

戸惑う咲実。

「「ええ～！」」

驚く咲実、Bグループの皆わん。となぜか渚さんとの事を言った文香さん。

(ああ、文香さん本当の事だと思つたんだ……)
納得する総一。

「え、ちょ～え？渚さんそれ本当ですか……？」

戸惑いながらかりん。

「え、え～とお～」

予想外の反応に戸惑う渚。

「どうなのよ、渚さん～」

す～」「～食い付く文香。

「じめんね～嘘なんだ～」
あつせり白状する渚。

(あ、あつせり……て、ちょっと待て！それはまずい！)

「御剣さん、本当の事話してくれますよね……？」

笑顔で咲実。

振り返るとセリヒは笑顔だけど黒いオーラを出している咲実がいた。

(終わった・・・)

「ああ・・・話すよ・・・」

諦めた総一。

「再来週、8月26日お前の誕生日だろ。何プレゼントすればいいか悩んで渚さんに相談したら渚さんが・・・」

- - - 2週間前 - - -

- - - N a g o i s a S i d e - - -

桜の舞う二ヶ道路をあなたと歩いて行きたい。
携帯を取る渚。

「あ、り、総一君?電話なんて珍しい、何かあったのかしら?」
電話に出る渚。

「あ、もしもし渚さんですか?」
と総一。

「違いまあ~す、私はあ~恋のキューピッドさんです!」
少しふざける渚。

「・・・」「
固まる総一。

「あ、ごめん」めん噦だよ～、総一君電話してくるなんて珍しい
じゃない、どうかしましたか～？はつ・もしかして咲実ちゃんと
ケンカしちゃったとか！？」

「い、いえ違いますよ！」

慌てて否定する総一。

「だよねえ～総一君がそんな事するわけないよねえ～」

笑顔で渚。

「で、どうしたの～？」

「実はですね、8月26日咲実の誕生日なんですが何をプレゼント
していいかわからなくて・・・」
自信なさ気に総一。

「そつかあ～それでお姉さんに電話してきたと
納得した渚。

「去年は何あげたの？」

「えっとその・・・去年は本人がいたので本人が欲しいと言った物
を・・・」

「総一君は咲実ちゃんの好きなものとか知らないの？」

「知っているには知っているんですが・・・その、なんていいます
か・・・」

困惑気味の総一。

「総一君は何か特別な物を咲実ちゃんにあげたいのかな？」

「わ…ですね」

「じゃあ再来週の日曜日、総一君会ってきますか？」

「再来週ですか？はい、空いてますナビ…」

「じゃあ、あの公園で待ち合せしましょっ

「え？」

「惑つ総一。

「だからあ～お姉さんが咲実ちゃんのプレゼント探し手帳ついてるつて言つてゐのよ～」

「ほ、本当ですかー。あらがといひやれこますー。」
嬉しそうに総一。

「た・だ・し」

真剣な声で渚。

「お皿」飯は奢つてもりおうかじりあ～

笑顔で渚。

「ええ、それくらいでいいや」

「じゃあ再来週の日曜日あの公園で一時集合ね」

「はい！」

元気に総一。

時は現在に戻り。

- - - S o u i c h i S i d e - - -

「ど、いう訳なんが・・・」

恐る恐る総一。

「はあ～」

ため息をつく咲実。

「総一さん気持ちは嬉しいですが、やっぱり女心がわかつてないで
す」

拗ねた顔の咲実。

「『』、『』めん何か特別な物を用意しよつと思つて・・・ホント『』め
ん！」

焦る総一。

「で、特別な物は見つかったんですか？」

「う・・・それは・・・」

(見つけたけど内緒にしておきたい・・・)

「はあ・・・見つからなかつたんですね・・・でも、嬉しいです、
私のために探してくれて」

「実は私欲しいお洋服があるんです」

ねだるよう咲実。

「それを買つてもうえませんか？」

「ああー、こいつでも買つてやるー。」

「ありがとうございます、一さん

姫しおは咲実

一九三九年五月八日

イチヤ一ぐのは二ノ木
けの時はじてよれ
またたく・・・

「『元凶の文書をもがくわよ』でござる」

同時に言う総一と咲実。

「あ、終わった?」いつもフレーム田終わつたから急いでくれる?」
とかりん。

「え！」

スコアを見る総一。

「あれ？かりんガーター取つたのか？」

不思議そうに總

「あ、うん、諸さんの嘘でね・・・」

残念そうにかりん。

「あーその、」めん
謝る総一。

「なんで総一が謝るのよ」

「渚さんが俺をフォローするためについた嘘だからさ・・・」

「いいよそんな事。それより早くボール投げたら?」

「ああ、やうだな」

「よし」

「総一さん頑張つてください!」

ス――。

ガシアーン。

「なんとかスペアか
安心する総一。」

「ほら、咲実の番」
と総一。

「は、はいー」

「こります・・・」

ス――――。

カシャーン。

「うう・・・4本です・・・」

残念そうに咲実。

「大丈夫十分スペアは狙えるから」と総一。

「・・・えいー!」

「ロロロロロロ。

ガシャーン。

「ああ・・・1本残つてしましました・・・」

「9本倒しただけでも十分だよ、咲実」微笑む総一。

「やつとお姉さん番ですねえ~」

「さて今度はどんな技を見せてくれるのかしら・・・」
神妙な面持ちの文香。

(あ、文香さんの中では技と位置付けされたんだ)

「こっくよ~」

「と~りや~」

ギュイイイン。

ガシーアーン！

「「転がる音とピンに当たった時の音があつてねえー?」
同時にツツコム総一と文香。

「ふつふ~んストライクですう~」
嬉しそうに渚。

「あれえ~?二人共どうかしましたかあ~?」
不思議そうに渚。

「あーえつとなんでもないです・・・」
と総一。

「ある意味才能ね・・・」
呆れる文香。

「??.?」

第3フレーム終了

文香：ストライク
総一：スペア
咲実：9本
渚：ストライク

- - - 第4フレーム - - -

「誰かさんのせいで待ち伏せられたわね」と文香。

「誰のせいですか・・・」呆れる総一。

「あー」「めん」「めんちゅう」と「冗談が過ぎたわ」笑いながら文香。

「もうあーゆう[冗談は勘弁してください]ね」疲れた顔で総一。

「りょーかい。行くわよ~」

この時、総一がニヤリと笑ったのに文香は気が付かなかつた。

「あ、文香さん足下に、キブリが!」

「総一君私がそんな嘘に・・・」

カサカサカサ。黒いあいつが動く音。

「・・・・・・・」

(あ、固まつた)

「きやあああああああ~」
大声を出す文香。

ガタン。ボールがガーターに落ちる音。

(あ、ガーターに落ちた)

「ちよ、ちよ、ちよと總一君なんとかしなさー。」
怒鳴る文香。

「え、俺がですかー?..」

「あ、あの私従業員わん呼んできまか」と咲実。

(あ、そういえば咲実ゴキブリそつこいえば苦手だっけ・・・逃げた
な・・・)

従業員到着。

- - - - 「ゴキブリ退治中 - - -

「あ、従業員さんーそつちー。」

「「あやああー！」

叫ぶ かりんとかれん。

「え、ちよとなんで向こう逃げたのになんでもまた向かへるのよ
おー」泣きそうな顔で文香。

「いへへへやああああ・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・。

チーーーン・・・・・。

「ゴキブリ退治終了」

「文香さん大丈夫ですか？」
心配そうな総一。

（たすがこちよつとやりすぎたかな・・・）

「総一君？ ピクしてもつと早く教えてくれなかつたのかな？」
こめかみをピクピクさせながら笑顔で言つ文香。

（あー目が笑つてない・・・なんか『ジャガ』というか数分前にあつた事だ・・・）

「いや、ちゃんと教えたじゃないですか」

「総一君私が投げる前に気付いていたでしょ」

「・・・」

黙る総一。

「黙つているつて事は肯定と受け取つていいわよね」
溢れんばかりの笑顔で文香。

「後で覚えておきなさいよ」
ドスのきいた声で文香。

（「ええ。後で埋め合わせしよう、うそ）

心に誓う総一。

その後2投目を投げたが、よほどやつしきの事がきつかったのか5本しか倒せなかつた。

第4フレームの結果は

- - - Aグループ - - -

文香：5本

総一：ストライク

咲実：7本

渚：スペア

- - - Bグループ - - -

葉月：スペア

かりん：スペア（ゴキブリ騒ぎのせいでまたもや1投目ガーター）

かれん：5本

優希：スペア

となつた。

- - - 第4フレーム終了 - - -

追加表記

? ? " ? : 1 投目 2 投目 = 合計 前のフレームがストライ

ク○ルスペアの場合に表記

G : ガーター

Aグループ	文香
1フレ	×
2フレ	×
3フレ	×
4フレ	
G	5

優 希	かれ ん	かりん	葉 月	B グル ープ	渚	咲 実	総 一	
7 点	7 点	4 点	4 点	20 点 / 8 点	1 フレ	20 点 / 9 点	20 点 ×	30 点
16 点	9 点	19 点 ×	40 点 ×	28 点 / 2 フレ	50 点 ×	23 点 / 40 点 ×	40 点 ×	50 点
36 点 /	24 点 3 = 5	50 点 G /		3 フレ		32 点 4 5 = 9	60 点 G /	65 点
/	29 点			4 フレ		39 点	7	70 点 ×
		5	G /					

波乱の第3・4フレーム（後書き）

ところへ」とで最新話です。

今回はBグループ少な田です。

というかほとんど出てきていません。

Bグループの戦いは平和ですので・・・。

次話ではBグループがメインになる予定です。

もう1ヶ月以上空いてしまって申し訳ない・・・。

そのせいか見直ししてみたらずいぶん書き方が変わつてますね・・・。

更新はものすごくスローペースですが、

まだまだ話は続きますので今後もよろしくお願いします。

9/22追記

ボウリングの得点計算に誤りがあったので報告します。

本来の得点計算はストライクの場合その後の2回投げた得点の合計が1フレームの点数になるのですが、筆者の勘違いで1フレームで

2投まとめて1投と考えていました。

後日修正すると共にもう少し勉強をしたいと思つております。

読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしました。

9/23追記

得点のほうを修正しました。

もし間違いがあれば感想の方にお願いします。

集中砲火の第5フレーム（前書き）

接戦の総一と文香、しかし一人がお互いの事で争つてこらるうちに他のメンバーが追いついてしまった！

それを心配した優希は総一の手助けをしようとするが・・・。

集中砲火の第5フレーム

- - - 第5フレーム - - -
- - - Bグループ - - -

- - - k a r i n S i d e - - -

(まずいよ、このままだと負けちゃう・・・私達を引き取ってくれたお父さんとお母さんのために旅行券欲しいのに・・・)

「・・・ちやん」

(総一達が連續ミスしてくれれば・・・)

「姉さん! !」

「わあ!え、え?何?」

「次、姉さんの番だよ」

「あ、ホントだ」

(全然氣付かなかつた・・・)

「姉さん、どうかしたの?」

「な、なにが?」

動搖するかりん。

(顔に出てたかな・・・)

「なんか難しい顔してたから・・・」

心配そうにかれん。

(やつぱ顔に出てたか・・・)の子たまに鋭いのよね。いや、私がわかりやすいだけかな)

「ん、大丈夫よ、ちょっとと考え事してただけだから」
微笑むかりん。

「でも姉さん、すぐ溜め込む癖あるから」

(本当に)の子人間観察うまいわね)

「ホントに大したことじやないからそんな心配しないの」
微笑むかりん。

「わかった、姉さんがそう言つなら・・・」
納得がいかなそうに頷いた。

(納得はしないみたいだけど、とりあえずよしとするかな)

「よし!」

(考えても仕方がない・・・とにかくストライク!)

- - - Karen Side - - -

「姉さん・・・」

不安そうなかれん。

「前に無理して倒れたけど大丈夫か なあ」

「大丈夫だよ」

微笑みながら葉月。

「お父さん・・・」

「確かにかりんはちょっと無茶する」とが多いけどちゃんと分かっていろから」

「うん」

ガシアーン。

「あ、姉さんす”～いずっとスペアとストライクだよー。」

「あ、うん、ありがとうかれん」

(あれ、姉さん、あんまり嬉しそうじゃない?)

「姉さん!ストライクだよ?もつと喜んだら?」

「うーん、でも総一達の方が得点高いから」

(ああ、せつかだから姉さん元気ないんだ)

「姉さん、応援してるから頑張つて」

(私が姉さんを応援するんだからー)

「姉さん、応援してるから頑張つて」
妹はそう言った。

(妹にやつされたら頑張らないとね)

「さて、向こうのスコアは・・・」

文香 ストライク
総一 ストライク
咲実 1投目8本

(さつそくやる気が削がれるスコアね・・・渚さんもやつだけど一
番の問題は文香さんかな)

「ねえ、姉さん」

「うん? なに? かれん」

「見て見て」

嬉しそうにかれん。

かれんがスコア画面を指差す。

かれん ストライク

「あ、かれんストライク取ったんだす」「いやないーー」「自分のよ
うに喜ぶかりん。」

(これは私も負けていられないな)

- - - y u - k i Side - - -

(あ～お姉ちゃんのために頑張ってみたけどさがこのスコア
じゃ・・・もうお兄ちゃんに頑張つてもらわなこと・・・よし)

- - - S o u n d i Side - - -

「ねえねえお兄ちゃん」

笑顔で優希。

「どうした優希？」

「あのね、わざわざお姉ちゃんがね、1位なつたり今晚、お兄ちゃん
が好きにじていいって言つてたよ」

「な、なに！」

驚く総一。

「えー？ ちよ、ちょっと待つて優希ちゃん何言つてるんですか！？」

ガタン。ガーターに落ちる音。

(あ、落ちた。て、そんなことより咲実が・・・?)

「そ、咲実本当・・・か？」

「ち、違います！ 優希ちゃんが勝手に言つただけです！」

「え、ちゅうと咲実ちゃん本気？咲実ちゃんがそんな大胆だったなんて……」

信じられないといつ表情の文香。

「へえ～咲実ちゃんがそんな大胆だったなんてお姉さんビックリですぅ」「いつも感じで渚。

「ちよ、ちよっと待つてください！だから違いますって！私そんな事言つてません！ゆ、優希ちゃんなんて事言つんですか！？」

顔を真っ赤にして咲実。

「だつてーその方がお兄ちゃんやる氣を出しそつたし～」

「総一君の事だからやる氣を出すと思つたし～」
面白そうに文香。

「そ、総一・・・あんた、やつぱりケダモノだったんだ・・・」
敵意たっぷりの田中がくりん。

「？？？」

分かつてないかれん。

「は、はは

苦笑を浮かべる葉月。

「待て、なんでやこで俺に矛先が向くんだー！」

「後かりん、『やつぱ』でなんだ『やつぱ』でー。」

(まさか普段そういう風に見られているのか……?)

「え……?」驚くかりん。

「な、なんだそのいまさらみたいな目は……?」

「お兄ちゃん……」

哀れんだ田で優希。

「み、見るな!俺をそんな目で見ないでくれ!」

「とまあ[冗談はこれくらいにして」と文香。

「明らかに眞本氣だつたでしょ……」
うなだれる総一。

「さ、咲実大丈夫か……?」

「はい……なんとか……」

疲れた顔で咲実。

「え、えっと総一さん。その、あの……」

「大丈夫優希の[冗談だつて分かっているから」

「は、はい」

安心したように咲実。

「お、お姉ちゃん!」めんね……」

申し訳なさそうに優希。

「 もう怒つてないかい。でもああこいつ[冗談はもうやめて欲しいかな]

「 うそ・・・」

「 で、総一君その辺本音はどうなのよ..」
「ヤーヤーンがり文香。

(え、きたこの質問・・・へタに答えるとまたこな。かといって否定しても攻められるだけ・・・よし)

「 えーと、その・・・ん、咲実がよければ・・・」

瞬間「ボン！」と音が聞こえたのは 気のせこだらいで。

「 そ、そそそ総一ちゃん！？な、ななななに言つてゐんですか！？」
顔をトマトのように真つ赤にして言つ咲実。

「 総一・・・」

呆れた顔でかりん。

「 総一君らしいわね・・・」

呆れた顔で文香。

「 総一君、女の子にそんな事言わないの」
少し怒つた顔で渚。

(やばい言葉間違えたか！？)

「えつと、ほらー。それだけ大事だつて」とですよ

「まあ～」「

ため息をつく聲。

「なぜ」前にため息をつく…?.

「だつて、ねえ～」

同意を求める文香。

「うそ、やうだよねえ」

「まあそれが御剣の良いことひだよな、といつか意味わからんないし
笑いながらかりん。

「馬鹿にされてるのか?」

「違うよお兄ちゃん。お兄ちゃん らじこつて事だよ
笑いながら優希。

「納得いかないがそういう事にしておいつ・・・

「わ、總一さん、あの・・・」

「あ、ああ悪かった。ちよっと帽子乗りました」
謝る総一。

- - - 数分後 - - -

その後特に問題もなく第5フレームは終了した。

新規表記：ストライク以外の1投目・2投目の表記。

第5フレームの結果は

- - - Aグループ - - -

文香：ストライク

総一：ストライク

咲実：8本 G

渚：7本スペア

- - - Bグループ - - -

葉月：8本スペア

かりん：ストライク

かれん：ストライク

優希：5本 3本

となつた。

Aグループ

1フレ

文香

×

30点

2フレ

×

50点

3フレ

×

65点

4フレ

G 5

70点

5フレ

×

総一

×

20点

G /

×

40点

×

30点

×

60点

×

50点

×

70点

×

65点

咲実
2 = 7
9点
8 G

23点
7 /

32点
4

39点
5 = 9

47点
5

集中砲火の第5フレーム（後書き）

第6話完成しましたー。

今回は結構無理やり感があつて申し訳ない・・・。

書いてる時に「あ、これ入れるといいかも」「この風にすれば
！」

などあれこれ考えてしまつて組み込んでしまったんです・・・。

自分の文章力の無さにめげずに頑張つて書いてこいつと思します。

得点の方ですが本当に申し訳ない。

訂正したほうにも抜け・・・というか単に次話を書くときに自分が困るだけのミスですが・・・があつたので今回のように訂正しました。

上記の事を踏まえ、今まで手計算でしたがスコア計算が出来る物を見つけたのでそれでやることにしました。（そんなのがあるなんて・・・）

得点の方はこれで計算ミスといつことがなくなつたと思います。

ついに5フレームまできました、後半分付き合つていただければ幸いです。

嵐の前の静けさ 第6・7フレーム（前書き）

ボウリングも終盤、そんなとき文香の元にある電話がきた。
その正体はなんと??????だった！

物語も終盤、ボウリング大会「話」に始まる・・・

風の前の翻訳文 第6・7フレーム

- - - f u m i k a s i d e - - -

ブーーーン。
ブーーーン。

(あら?誰かしら?) 携帯を取る文香。

矢幡麗佳

(麗佳ちゃんから電話・・・もしかして・・・)

「総一君!」めんたい。ちょっと仕事先から電話掛かってきたから私の番飛ばして進めといて」

「あ、はい。わかりました」

(これでよし)

その場から離れる文香。

ピッ。

「せりせり~麗佳ちゃん元気にしてる~?」

「おかげで。。。今や向かっていなんですがまだやつてますか?」

「意外と早く終わったのね」

「ええ、実は……」

- - - - reika Side - - -

「ふう・・・中々終わらないわね・・・」

疲れた様子で麗佳。

「じめんね・・・麗佳ちゃん私のせいです・・・」

申し訳なさそうに智子。

「別に智子が悪いわけじゃないわ。ちやんと私がフォローするべきだった。それだけの事よ」

「つわあああああん麗佳ちゃんあいつがとおおおおおお泣きながら智子」。

「相変わらず、す」「こ涙泣きなんてひどい」

呆れる麗佳。

「麗佳ちゃん涙泣きなんてひどい」

顔を膨らませる智子。

「それは事実だからしょつかないんじゃない?」
と美冬。

「わづね」

「ふ~ふ~一人ともひど~い」

「ひどいって・・・普段の行いでしょ・・・まつたく
呆れる美冬。」

「ははは、でもまあそれひつぐめて智子じゅねえの?」

「お前は相変わらず智子一筋だなあ~」

呆れる和真。

「なんだよー悪いかよー。」

怒った顔で健吾。

「別に悪いことは言つてない、といひでもう告白したのか?」

「なつ!~?」

顔を真っ赤にする健吾。

「え? なになに? 健吾君誰かに告白するの?」

興味津々の智子。

「その様子じゃまだしてないみたいだな」

「ねえねえー健吾君、誰に告白するのー..
やたらと突つかかる智子。」

「い、いやそれは・・・」

戸惑う健吾。

「ていうか顔、赤いよ？風邪？」
無邪気に聞く智子。

「いや、智子の顔が近いから赤くなってるんだろ・・・」
小声で和真。

「さすが、というか一種の才能ね・・・」
苦笑する麗佳。

「なんでその原因が自分だと気づかないの・・・」
呆れる美冬。

「まあ、天然だからじゃない？」
と和真

「ちょっと〜3人共〜私、天然じゃないよ？」

麗佳・和真・美冬「・・・」

「なんで3人して黙るのよ〜、ふ〜ふ〜」

「と、智子は確かに天然かもしれないけどそこが智子らしいという
か、ええと・・・」

フオローを入れる健吾。

「うわあああああ、健吾君まで天然って言つたああああ
泣き喚く智子。

「あ、ちがつ！えつと、その智子のそういう所が可愛いというか・・・」

モジモジする健吾。

「健吾」

「なんだ？」

「モジモジするのやめろ、気持ち悪い」

「…？」とめえ・・・」

怒った顔で健吾。

「はいはい、一人ともそこまで
仲裁に入る美冬。

「ほら、智子も泣かないのよしよし」
頭を撫でる美冬。

「ぐすん、美冬ちゃん・・・」

泣き止む智子。

「とにかく健吾君、美冬の前でもこいつもどおつ振舞つてみたいじゃ
かしら？」

と麗佳。

「そうだな、お前、美冬の前だといつもの威勢がなくなるからな~」
と和真。

「つむせえなーそんなん緊張するに決まつてんだろー」

「え? なんで健吾君私の前だと緊張するの?」

わかつてない様子の智子。

「 「はあ・・・・・・」 」

「え? なんで畠ため息つぐのー? 」

驚く智子。

「健吾、俺が悪かった・・・これは強敵だ・・・
と和真。

「わかつてたけど・・・健吾君! めんなむー」
と麗佳。

「えつと、頑張れ!」

と美冬。

「ああ・・・・応援、ありがとよ・・・」

「で、そろそろ進めてもいいかしら? 」

「あー! ジャンゴ! タケモーん・・・」
呆れる美冬。

「あー! 」

「お前なあー誰のためこいつ集まつてると黙つてるんだ
同じく呆れる和真。

「お、俺はどれだけかかってもいいぞー!
口早に健吾。」

「じゃあ俺と美冬と麗佳は帰るから2人でやつとた」

「え？ まじで？ 一人つきつ？」

少し興奮する健吾。

「おー、セーの変態黙れ」

「誰が変態だー。」

怒る健吾。

「二人とも・・・？」

笑顔で美冬。

「「すいません・・・」」

一緒に謝る和真と健吾。

「ちよ、ちよっと待つてよ～ 和真君ひどい～」
泣きそうな顔で智子

「お前がそれを貰える立場か・・・？」

「うーーそれは・・・
しゃべとなる智子。

「ほ、ほら私はちゃんと最後まで手伝つから、ね？ 元氣出して
フォローする美冬。

「うわあああああああん、私の味方は美冬ちゃんだけだよおおおお
おおおお」

泣き叫ぶ智子。

「一人はともかく麗佳ちゃんもつこんじやない?」

「え?ダメよけやんと最後まで手伝わなや?」

「でも日本当地ったら中々会えない友達と会えたんだよね?」

「それせ・・・やうだナビ、でも・・・」

「後の事は私がやつておへから麗佳ちゃんが行つたまつが
いこと思ひとこり」

「それじや悪いわ、3人に押し付けるなんて・・・」

「いこや~麗佳ちゃんこいつとこどよ~私のために無理しなくていい
よ~」

「俺もいこと思ひやが。とにかく元々智子が悪いわけぢやないで手伝
わなくともこいもんだろ?」

「んー俺も和真と同意見なのは嫌だが、和真の言つとおりだと思つ

「ぜ

「みんな・・・ありがと」

「ふふ、じゃあ急いで行つてらっしゃ
笑顔で美冬。

「おみあげ期待してるね~」

「お前、自分の状況わかつてそんな要求してるのは……？」
呆れる和真。

「その、なんだ楽しんでこよー。」

「ええ、おみやげは考えておくわ。とにかく近場だからあれなん
だけどね」
嬉しそうに麗佳。

「じゃ、行つてきまーす」

「こつこつしゃーい」「

「じゃあ智子、一人減つた分頑張りなさーよ」

「ふええええ、美冬ちゃんが鬼になつたああああああああ

「と、智子ー俺に遠慮なくいってくれー！」

「お前どうかいつてこうと智子と同レベルだらうが・・・・・

遠くから声が聽こえる。

「ふふ、私もいい友達を持ったものね・・・あの頃とは大違い・・・
皆待つてなさいよ・・・あーはははは

「へ、こいつがあります・・・」

「なるほど、麗佳ちゃん大分うまくいっているみたいね」
関心する文香。

「ええ、ところであつたはどうですか?」

「んー今第6フレームだけ私の番は飛ばしてもらつてるとから7フレーム目に入つてるかもしないわね」

「もうですか・・・となるとギリギリですね・・・

「まあ、じつはまだちでなんとかするから大丈夫よ

「すいません・・・」
すまなれやつに麗佳。

「気にしないでいいわよ、私も麗佳ちゃんに会いたいしね」

「あつがとうござります。では、のちほど・・・」

「ええ、待つてるわ」

ピッ

「あー、向ひのまぢくなつてこぬかしら

「文香さん遅いですね・・・」
心配そうに咲実。

「仕事の電話つて言つてたし何かあつたのかな・・・」

「急にお仕事が入つてないか心配ですぅ～」

「文香さんに進めていいといわれてとりあえずフーフレーム田まで終わつたけど・・・やすがにこれ以上進めるのは・・・」「うん、と悩む総一。

「そうですね・・・」

「皆、お待たせ～」

「あ、文香さん」

「仕事のほうどうでしたが?」

「え？ああ、別に大丈夫よ。うまく情報が伝わつてなかつただけみたい」

「そうですか・・・じゃこのまま続けるんですね」

「あら、総一そんなに私と勝負したかったのかしら？」
そういうながらスコアを見る文香。

咲実 5本3本 6本1本
渚 Gミス ストライク

「ふふ、皆いい感じに疲れてきたかしら？」
不敵に笑う文香。

「まだまだこれからですよ」
余裕の表情で総一。

「えっと、まだ大丈夫です」

涼しい顔で咲実。

「わたしはあ～ちょっと腕が疲れましたあ～」
疲れた表情で渚。

「ふむふむ、じゃ私は4連投ね」

「いくわよ～」
「えい！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン。

「5本・・・か」
安堵する総一。

「まだよー」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーーン。

「へー、はーしたあああああ
悔しがる文香。

文香6フレーム目 5本4本。

(あれ? 文香が今わざとはーした・・・いや、そんなまさか・
・)

「あの、文香さん」

「何? 総一郎」

「あ、いや・・・
(今わざとはずしましたよね。なんて言えないよな・・・)
「その、ミスするなんて珍しいな・・・」

「人間だものそりゃあ//スベリこはするわよ」

「アハ・・・ですよね」

- - - fumi k a S i d e - - -

(「ーん、総一君氣づいたみたいね・・・総一君たまーに勘が鋭い
のよね・・・『めんなさい』ね総一君、これも盛り上げるためだから、
渚さんを氣にして」)

- - - S o u n d i n g S i d e - - -

「・・・さこね」

「?、文香さん何かいましたか?」

「え、別に何も言つてないわよ」

「やうですか」

(なにか聞いた気がしたけど気のせいかな)

「じゃ次はフフレーム田ね」

「とつやあー」

♪ロロロロ♪ロ。

ガシャーノ。

一投田…?本

「む…?」れば無理ね…。
苦い顔をする文香。

「慎重に…?」

「ロロロロロ。

カコン。

文香フーフーム田　？本1本。

「まあ、こんなところかしら」

「あ、そつち終わりましたか？」
とかりん。

「ええ、悪かったわね、待たせてしまつて」

「いえ、じゃ次のフレーム始めても大丈夫ですね」

「よし！残り2フレームか」

「總一君、やけに氣合入つてるじゃない」

「ええ、京都の高級旅館が俺を待つているんで」

「ふふ、そうつまくいくかしら？」
不敵に笑う文香。

「總一さん頑張つてくださいね！」

「おつ！まかせとけ！」

- - - A グループ -
文香 : 5本4本
総一 : 8本スペア
咲実 : 5本3本
渚 : Gミス

葉月：3本5本
カリん：？本1本
かれん：2本5本
優希：3本
3本

第7フレームの結果

文香：一本
総一：一本
咲実：一本
渚：三本
本

葉月：5本スペア
かりん：7本スペア
かれん：8本1本
優希：5本3本

> i12521
— 1748 <

嵐の前の静けさ 第6・7フレーム（後書き）

7話書き終わりましたー。時間がかかるて申し訳ない・・・。今日は相変わらずBグループ少な目です・・・Bグループに好きなキャラがいたらごめんなさい^_^

さて、今回新キャラが登場しました。実は4人とも一度出てるんですね。そのときはモブキャラとして性格がまったく決まってなかつたんですが、今回まともに登場することになりました。改めて見返すと性格全然ちがえ・・・そこは「キーリングの精神でお願いね」

by 優希

そして、今回からスコアシートが挿絵になります！ わ～パチパチ
ぱふぱふ～
え～っと、正直言つとさすがに手書き表じゃきつくなつてきたので挿絵に変えました。
もし携帯で見てている方がいたら申し訳ない^_^

結構急いだんでもしかしたら誤字があるかもしれません（一応確認はしましたが・・・）あつたら報告お願いします。

物語も終わりに近づいてます。はたしてあの人は間に合つのか！
これからもよろしくお願ひします！

10月25日追記

修正：咲実のスコアにミスがありました。

6フレームの合計点53

7フレームの合計点60

ですが、正しくは
6フレームの合計点55
7フレームの合計点62
でした。

申し訳ございません。

これに気づいたのはスコア表をいじっていたからです。スコア表を
いじっていた ということは・・・?
皆さんお楽しみに

番外編（第8フレーム）（前書き）

ボウリング大会第8フレーム、どうやら今回はいつもと違つよつです。

この作品は昔考えた物であり、それに少し手を加えただけとなつてゐるのだから無茶ぶりが多いです。
それでもいい方は、ご覧ください。

番外編（第8フレーム）

- - - 番外編 - - -

文香「ねえ、なんか今回いつもと違わない?」

「そうですね。なんかタイトルにも『番外編』と書いてありますね」

文智一咲実ちゃんにか隣してなしかしら?」

咲実「えーとですね・・・今日は特別編という事で私達が自由に物語を作るそうです」

文香「え？ 何それ？ 意味わかんない。」
「……」
「なんかこと知ってるわけ？」

咲実「私に聞かれても・・・そうゆう設定だから・・・じゃないで
すか?」

渚「それはあ～筆者があ～咲実ちゃんの事好きだからじゃないです
かあ～？」

咲実「え？えっと嬉しいんですけど、あの、その……」

「咲実は誰にも渡すもんか！」

文香「ちよつと總一君落ち着きなさいよ」

総一「す、すこません」

文香「まあいいは……といふで咲実ちゃん。ボウリングの方は勝手に進めていいのかしら?」

咲実「はい、いいそ�です。ただし進めた分のスコアは本編に反映するねうです」

かりん「ねえこれってもしかしなくても手抜きじゅ……?」

優希「たぶんもうネタがないんだよ」

かれん「ゆ、優希ちゃんあんまりひみつめの事は言わなこほりが……」

文香「まあいいんじゃない?」

総一「あの、ひとついいですか?」

葉月「どうしたんだい? 総一君」

総一「番外編なのにヒロイドのスコアを反映つていひれ本編ですよね」

一同「……」

文香「ま、まあ楽しければここのよー」

咲実「そ、そりですよー。総一 もこ」

渚「といつことでえ～」

かりん・かれん「番外編」

咲実・優希「始まります」

文香「ちょ、ちょっと私のセリフはー?」

- - - 第8フレーム - - -

文香「さて、いきますか

文香「えい！」

文香 ストライク

文香「え、ちょっとなんで効果音がないのよー？」

咲実「それはしょうがないですよ。番外編で物語は私達が作るんですけどから・・・」

文香「ちよつと総一君！あなたが音作りなさい！」

総一「ちよ、そんな無茶いわいでくださいー！」

文香「無茶じやないわよー頑張りなさい！」

総一「わかりましたよ・・・次行きますね」

総一「ガロガロガロ～」

総一「ガシャーーン」

総一ストライク

一同「…………」

総一「そこで黙らないでください！」

文香「だつて……ねえ？」

渚「そうだよねえ」

総一「もうやりませんからね！」

咲実「総一さん、ごんまいです」

総一「ああ……」

咲実「じゃあ、行きますね」

咲実 5本

咲実「もう一回！」

咲実 スペア

総一「咲実だいぶうまくなつてきたな」

咲実「えへへ」

文香「はいはい、イチャつるのは2人きりの時にしてね」

総一「イ、イチャイチャしてませんよ…ただ頭撫でただけじゃないですか！」

かりん「それがイチャついてるんだよ総一、自覚ないかもしないけど」

総一「ぐつ・・・」

渚「もお～2人ともそんなにいじめたら咲実さんが可哀想でしょ～」

文香「そうね、『めんなさいね咲実ちゃん』

かりん「『めんね咲実さん』

咲実「い、いえ」

総一「俺には謝罪はないのか・・・？」

渚「次は私ですね～」

総一「す、スルーされた・・・」

渚「ええい
ヒュン！」

総一・文香「はやつ…?」「

ト―――ン。

文香「なんで渚さんだけ効果音があるのよー?」

総一「そしてあんな音の割りに倒したのは4本・・・」

渚「あうへひょへとズレてしまこましたあ~」

咲実「な、渚さん・・・」

渚「なあ~『い~?咲実ちゃん』

咲実「れ、レーンが焦げてます・・・」

総一「なこ~!~?」

文香「なんですかってー?」

シュー。

総一「ほ、本当に焦げてる・・・」

渚「あいう~、ううしちゃう~!~」

総一「どうしてううしちゃう~?~ううしますか?文香さん」

文香「ちよ、ちよつと私に振らなこでよー!~」

咲実「あ、誰か来ました」

従業員「すいませんがこれをやったのはオキヤクサマでショウカ?」

渚「はい～私です～どなたですか～？」

従業員「ワタシ従業員のスマスとイイマース」

一同「～～？」

文香「なんか唐突ね、さすが番外編つて所かしら～～とこいつがこんなイベント起きた時点で私達の物語になつてないわよね～」

咲実「お、落ち着いてください文香さん、きつとある程度の基盤が作られているんですよ」

文香「納得いかないけど～～まあいいわ～～」

スマス「ソレデ、アナタが焦がしたレーンを弁償しろとシャツチョサンが言つてたネ」

文香「なんだかすごいしゃべり方ね。といつかさつきの会話完全にスルーされてる～～」

葉月「きつとやつむつ設定なんだひづね～～」

渚「どうしましょ～～？文香さん」

文香「え！私？し、知らないわよ」

渚「あう～」

スマス「でも、シャツチョサンがエクストラゲームでそちらが勝て

ば許してくれソウデス」

文香「エクストラゲーム・・・嫌な響きね・・・」

一同「・・・・・・」

葉月「それで内容は何　だい？」

スミス「7番ピンヒー10番を残して且つ2投目でスペアを取るデース」

かりん「ちょ、ちょっとそんなの素人の私達じゃ無理だつて！」

渚「大丈夫だよ～かりんちゃん。頑張つてね総一君」

総一「・・・・は？」

渚「だからあ～エクストラゲーム頑張つて、て言つたのよ～」

総一「ちょ、ちょっと待つてください～なんで俺なんですか～！」

渚「だつて～総一君なら出来そうだし～」

総一「根拠がないじゃないですか・・・」

文香「諦めなさい総一君、きっと運命だつたのよ」

総一「文香さん絶対この状況楽しinでますよね」

文香「あら、分かつちやつた？」

総一「『分かつちやつた?』じゃないですよー。だいたい文香さんの方が上手いじゃないですか!」

文香「それはほら、主人公じゃない。それによく言つじやない『主人公の成功率1%は100%』だつて

総一「う・・・」

優希「お兄ちゃん、成功したらこの小説R-18タグ付くかもよ?」

総一「全力で成功させよ!」

かりん「御剣あんた・・・」

総一「はつー?つい本音が・・・!」

渚「総一くん? そろそろ自重したほうがいいんじゃない?」

総一「ハハ、ナギササンメガワラッテナイデスヨ?」

渚「総一くん? お姉さん、怒ってるから笑ってるわけないじゃない、うふふ」

総一「ごめんなさい、勘弁してください」

咲実「総一さん・・・」

総一「ち、違うんだ! いや、違わないけど・・・えっと、その・・・」

「

咲実「大丈夫です、ちゃんと分かつてますから。ただ、あまりそつゆつ話は・・・」

総一「そ、そうだな悪かった」

咲実「R—15タグすら付いてないんで控えた方がいいと思します」

総一「そこかよー?」

かりん「せ、咲実さん・・・」

文香「さすが番外編・・・いい感じにキャラ崩壊してるわね・・・」

スミス「テワ、ソウイチさん頑張つてクダサーイ」

総一「結局俺が投げるのか・・・」

文香「総一君頑張りなさいよ、渚さんのために」

総一「分かつてますよ」

総一「はあ!」

総一「?」

咲実「やりました!スプリットです!」

文香「なんかスプリットで喜ぶなんて変な感じね」

優希「でも次が問題だよ・・・」

かりん「やうだね・・・」

葉月「きっと総一君ならやつてくれるさ」

総一「はあ～ふう～・・・」総一「よしー！」

渚「総一君！お願い！」

文香「コースはいいわ！」

かりん・かれん「お願い！」

優希「そのまま！」

葉月「・・・」

総一咲実「いけえ～！」

・・・

スミス「オメデトウネ、見事エクストラゲームクリアネ

一同「・・・やつたああああ！」

文香「総一君すいじじゃない！」

かりん「総一あんたやつぱす〜」

優希「本当にやつせつた……」

葉月「ああ……本当に……」

渚「うわあああん総一くんありがとお~。」

総一「ちよ、な、渚わん」

咲実「む―――」

総一「や、咲実さん……？」

咲実「総一さん鼻の下伸びすぎです」

総一「あ、いやこれほどの……」

咲実「ジ―――」

総一「ごめんなさい……」

渚「「めんねえ~咲実ちゃん。つい嬉しくって」

咲実「いえ、総一さんが悪いだけですか?」

総一「や、咲実~」

咲実「ふん!」

文香「うわ~あからさまに怒ってるわね……」

かりん「御剣、後でちやんと謝つた方がいいよ」

総一「咲実悪かった！後で埋め合わせるからほんと」「あんー。」

咲実「総一さんは私を物で釣るんですね」

総一「あ、いや・・・」

咲実「・・・ふう~」

咲実「さ、咲実？」

咲実「私がこんな事で怒るわけないじゃないですか」

総一「え？」

咲実「多少はその・・・嫉妬しましたけど・・・」

咲実「でも、私を嫉妬させた埋め合わせはしてもうこまづかりね」

総一「ぐつ・・・わかつた」

咲実「ありがと」「ざこます。総一さん」

文香「総一君すっかり尻に敷かれてるわね・・・」

かりん「はは、確かに」

かれん「お、お姉ちゃん・・・」

文香「ふふ、2人共イチャイチャしてないでボウリング再開するわよ」

総一「だからなんでイチャイチャになるんですか！」

一同「…………」

総一「な、なんだこの雰囲気は…………」

かりん「これで無自覚だもんな〜」

渚「総一君らしいからいいじゃない」

文香「まあもう少し周りを見るよつこして欲しいかしぃ」

総一「く、みんなして…………」

咲実「総一さん？」

総一「ん？」

チュツ

咲実「私は総一さんのやつむつといふのも好きです」

総一「ひつひつ

かりん「御剣顔、真っ赤だよ」

総一「「ひ、ひねれこー..」

一同「「アハハハハ..」」

総一「くつやお～皿して馬鹿にして～～」

文香「ほらほらボウリング再開するわよー..」

総一「え、ちよ、スルーしないでくださいこー..」

一同「「はー..」」

総一「お前りああああああああああああ

- - - END - - -

麗佳「皆さん番外編ひいだしたか?」

文香「あれ?麗佳ちゃん、きてたの?」

麗佳「ええ」

文香「にしても今回ひどいわよね・・・番外編とか言ってかなり無

茶ぶりして・・・」

麗佳「まあ元々この『シーケレットゲーム アナザーストーリー』を考えた時に、思いついた内容ですからね、無茶ぶりは多めにみてあげましょ」

文香「あら、麗佳ちゃん随分優しいじゃない」

麗佳「そつゆう文香さんも満更ではない。という顔ですよ」

文香「あ、やっぱわかつちやつ? 結構楽しかったのよねえ」

麗佳「さて、次は本編になります。物語の終盤ですね」

文香「そうなのよ~総一君が思つたより粘り強くて・・・」

文香「少し前にフラグを立てた麗佳ちゃんは果たして聞に合ひつか

！」

麗佳「え? なんですかそれ? 私ちゃんと参加、出来ますよ~ね・・・?

文香「ん~でも、もう第9フレームに入っちゃつてねじ~ビリ^カ」

なあ~」

麗佳「そんな・・・絶対に聞に合わせてみせるわ・・・」

文香「と、そろそろ時間ね」

麗佳「なんの時間ですか・・・」

文香「う~ん? 秘密?」

麗佳「はあ・・・」

文香「ということで」

麗佳「シークレットゲーム アナザーストーリー」

文香「これからも・・・」

総一「ちよ~っとまつたああああああ

文香「ちよ~っとまつたああああああ

総一「皆もいますよ」

文香「え？」

咲実「二人とも抜け駆けなんてズルいです」「
かりん「そうですよ、最後くらい皆でやりましょうよ
かれん「皆でやつたほうが楽しいと思います」

渚「そうだねえ」

優希「抜け駆けはやるかな~い」

葉月「文香君諦めなまえ」

文香「お、おじ様まで・・・もう、しょうがないわね」

文香「麗佳ちゃん悪いけどもう一度お願ひするわ」

麗佳「ええ、わかつてますよ」

麗佳・文香・渚「それでは監さん」

かりん・かれん・葉月「これからも」

総一・咲実・優希「シークレットゲーム アナザーストーリーを

「「よろしくお願ひします！」」

第8フレーム結果

-	-	-	Aグループ	-	-
-	-	-	ストライク	-	-
文香	文香	文香	ストライク	ストライク	ストライク
総一	総一	総一	5本/スペア	5本/スペア	5本/スペア
咲実	渚	渚	4本/スペア	4本/スペア	4本/スペア
Bグループ	-	-	-	-	-

優希 かれん 葉月

8 本 3 本 3 本 本
ストライク

番外編（第8フレーム）（後書き）

あとがき・・・書く事がない・・・とりあえず現在の状況

8話 30%

リメイク1話20%（構想と大まかな内容）

シークレット解禁！

最終話？（まだ決まっていません）30%

です。

これからもよろしくお願いします

最後の戦い 第9・10フレーム（前書き）

思つたより文香との点数差を広めれない総一、8フレームで手加減をしたと思つたら次は本気で攻めてきた。

文香がなぜそのような事をしたのかわからないまま勝負は続いていく・・・

最後の戦い 第9・10フレーム

- - - S o u t h e r n S i d e - - -

（後2フレームか・・・今の所大丈夫そうだけじ問題は・・・）
投球しようとしてる文香とそれを見ている渚を見る総一。

「ん~?どうしたの総一君?私の顔見て」

ハテナを浮かべる渚。

「あー、いえ、なんでもないです、すいません」
謝る総一。

「?、どうして謝るの??.?」

不思議がる渚。

「あー、さてはお姉さんみて変な事考へたのかなあ~?」

「変な事つてなんですか・・・」

「総一君のエッチー女の方にそんな事言わせる気?」

「ちよ、ちよっと待つてください!俺、何も言つてないじゃないですか!-とこうかもう女の子つて年じやないですよね-?」

反論する総一。

「総一君ひど~い、心はこつでもひ女ですよーだ」

少しむくれた顔で渚。

「はい、はい」
適当に流す総一。

「じゃあ～なんでわたしを見てたの～？」

「いや、それは・・・」

黙り込む総一。

「・・・はつーまさか私の事が好きになっちゃったとか！」

「はあ～？」

驚く総一。

「・・・」

黙つて見守る咲実。

(後ろから無言の圧力が・・・)

「駄目よお～総一君には咲実ちゃんがいるじゃなあ～」

「な、渚さんそうゆう[冗談はやめてください」
(ホントしゃれにならないんで、といつか分かつてやってるんだ
わづな)

咲実を見る総一。

「どうかしましたか？総一さん」

笑顔で咲実。

「あ、いや・・・」

(あれ?怒つてない・・・)

「私が怒つてるとと思つたんですか?」

むくれた顔で咲実。

「えーっと・・・はい、わうです・・・」「めんなさい」
(やばいな・・・)

「あんまつやるとわつきみたいに嫉妬しちゃこまかせ、少しごり
いならいい・・・ですよ?」

上田遣いで咲実。

「え、咲実・・・
感動する總一。

「はあ~、あんた達ホントそのやり取り飽きないわね。」
何度田よ・・・

呆れる文香。

「ほどんご文香さんが原因だしそ・・・」

「まあそれについては冗談しないけど」
笑いながら文香。

(完全に楽しんでるな・・・)

「そんなことよりほり総一君あなたの番よ」

「え?」

文香・ストライク

(「ファウンテンショット」(第9フレームでストライクを取る事)か・・・
・8フレームでは手加減した様にみえたけど氣のせいだったのかな・
・・とりあえずなるべく引き離さないと)

「はあっー！」

「ロ、ロ、ロ、ロ、ロ、ロ。

ガシャー——ン！。

総一・ストライク

「ふう・・・」

「へえ、総一君ファウンテンショットなんてやるじやない」
褒める文香。

「それは文香さんもじやないです。それに、京都旅行がかかつて
るんで。」

「ふうーん」

意味深な顔で文香。

(あの顔、絶対何か企んでるんだろうなー)

「まあそつじやないと面白くないしね
ニカツと笑う文香。

(怪しげ・・・怪しそうだる・・・・)

「じゃあ行きますね」と咲実。

「えいー。」

「ロロロロロロ。」

ガシャー——ン!。

咲実：？

「む・・・」

顔をしかめる咲実。

(咲実つて意外と負けず嫌いなんだよなあ、よし)

「咲実」

「なんですか、総一さん？」

「今日はしようがないけど、次投げるときに自分の少し右によつて
ポケットを狙つてみて」

「ポケット・・・？」

わからない様子の咲実。

「ああ、えっとヘッドピン、てわからないか、一番ピンと三番ピン
の間の事だよ」

「1番ピンと3番ピンの間・・・はいーわかりました」
嬉しそうに咲実。

(咲実の奴、そんなに嬉しいのか)

「総一君顔がニヤけてるわよ」
笑顔でにゅつと出てくる文香。

「うわあー!?」

驚く総一。

「何よ、そんなに驚かなくてもいいじゃない」
怒った顔で文香。

「いや、そんな登場の仕方したら誰でも驚きますって!」

「そう?それより総一君、自分の心配より他人の心配するなんて余程自信があるみたいね」

「もううるんです。負ける気はありませんよ」

バチバチバチバチ。

咲実：1投目？本 2投目1本 計9本

- - - Karin Side - - -

「うわあー向こうなんか火花散らしてるよ・・・」

「どうやら真剣勝負になつてゐるみたいだね」

「私向こうのグループじゃなくてよかつた・・・」
安堵するかれん。

「わたしも・・・」
それに頷く優希。

「うわせじで樂しくやればことと御つよ」

「うへん、個人的には御剣に勝ちたかったんだけど・・・無理、だ
よね・・・」

悔しがるかりん。

「大丈夫だよ。姉さんが残り全部ストライク取つて、御剣さんがミ
スを出せばー」

「それってほんと無理なんじゃ・・・」
と優希。

「いや、案外できるかもしれないぞ?」

「でも・・・」

葉月：7本2本

かりん：7本 スペア

「姉さん、頑張つて!」
笑顔でかれん。

「かれん・・・うん!」
笑顔で返すかりん。

「じゃあ私行くねー」

「ゴロゴロゴロ。」

「ジン。」

かれん：3本（4・7・8ピン）

「うう～・・」

悔しがるかれん。

（かれんは元々体力ないからじょうがないわよね・・・それでいて負けず嫌い、その辺は咲実さんと似てるわね）

「姉さん～「ツツ教えてよ～」
するがる様にかれん。

「教えて、て言つても私そんなに「うまくないし・・・御剣が言つたようにやればいい」と思つよ?」

「それがいいのはわかるんだけど・・・」
歯切れが悪そうにかれん。

（どうしたんだ？さつきみてたからわかつてゐるわよね・・・？）

「あつー。」

「 もしかしてエリカが3番ピンかわからないとか？」

「あ、あっ・・・それは・・・」恥ずかしそうにかれん。

「3番ピンは手前から数えて右側のほう。えっと・正面にあるのが1番ピン、その左が2、右が3、て感じで左から右に数えるんだよ」

「やつかーさすが姉さんー。ありがとー」
嬉しそうにかれん。

「じゃあちょっと試してみるね・・・」
緊張した面持ちでかれん。

(今までよくスペア、ストライク取れたわね・・・)

「えいっー。」

♪ロ♪ロ♪ロ。

カシャアアアン。

かれん：スペア（一投目3本）

「やつたあああああ、姉さん、ありがとー。」
大はしゃぎするかれん。

「ううん、かれんの実力だよ」
微笑むかりん。

(あんなに喜んでやつて・・・よっぽど嬉しかったのね)

「じゃあ次わたしいつくよ～」

勢いよく投げる優希。

「ロロ、ロロ、ロロ。

ガタツ。

優希・ガーター

「・・・・・」

沈黙する優希。

「ゆ、優希ちゃん、後1投あるから頑張つてー。励ますからん。

「よおーし

「ええい！」

（優希ちゃん力みすぎだよ・・・）

「ロロ、ロロ、ロロ。

ガタツ。

優希・ミス

「あ・・・もつーお兄ちゃんどうもつーとー。」

怒る優希。

「 もうーお兄ちゃんがいるから…。」

怒る優希。

「えー俺のせー?ー」

驚く総一。

「まあ、[冗談だけど]

舌を出して笑う優希。

「 セウか・・・といつか優希お前力みすぎ。 それじゃあボールコントロール出来ないぞ」

「 だつてえーわたし力ないから重めのボールじゃないピンが倒せないし~」

「 ちゃんとコントロールできる重ねこじりよ・・・重くてもガーターダつたら意味ないだろ・・・」

呆れる総一。

「 とこつか今まで普通に出来てただろ?。」

「 せつかもーボール変えたから・・・」

「 今すぐ変えてきなセー・・・」

「 はあーー」

素直に頷く優希。

「まつたく・・・」

「いやあ～総一君大人氣ねえ
からかう様に文香。

「やめてくださいよ。それより次、文香さんですよね」

- - - 第9フレーム結果 - - -

文香：ストライク
総一：ストライク
咲実：？本1本＝9本
渚：ストライク

葉月：7本 2本＝9本

かりん：7本スペア
かれん：3本スペア

優希：ミス

「そうね。泣いても笑ってもこれが最後のフレームよ
真顔になる文香。

「そうですね
真顔になる文香。

「悪いけど本気で行かせてもらつわよ

「やあ！」

文香のボールがポケットに吸い込まれていく。

「アロ、アロ、アロ、アロ。」

ガシャー——ン。

文香・ストライク

「……」黙つて見守る総一。

「2投目行くわよ」

「アロ、アロ、アロ、アロ。」

ガシャー——ン。

文香・ストライク

「く……」

苦い顔をする総一。

「文香さんす」「……」

呆然とする咲実。

「最終フレームだとこりにあの冷静さ……
と葉月。」

「やつぱり文香さん、強い……」
緊張した面持ちでかりん

「やつぱりす」「こじですねえ~」

(まあい・・・初回にターキーを叩き出したからといって最終フレームでやられると厳しすぎる・・・)

「 3 投目 」

笑顔で文香。

「 ローローローローロ 」

(賴む ! ストライクだけは・・・)

ガシャー――ン !

文香・ストライク

「 あ・・・ 」

唚然とする総一。

文香・総合得点 「 197 」

「 さて、次は総一君の番よ。私に勝つためには・・・そうね、私に勝つ最低条件はスペアとストライク てところかしら 」

「 やつてみせますよ 」

自信たっぷりに総一。

「 自身だけはあるみたいね 」

「 総一さん・・・ 」

心配そうに咲実。

「大丈夫絶対出来るわ」
笑顔で総一。

(大丈夫、出来るさ、二二二まできたんだから……)

気持ちを落ち着かせる総一。

「行きます！」

「はあー。」

ガロガロガロガロ

ガシャー——ン！

9本のピンが倒れ、1本が揺れる。

(頼む！倒してくれ！)

「あ・・・」

呆然とする総一。

願い届かず・・・。

総一：1投目9本

「まだだ、次でスペアをとればー。」

「そうです！頑張つてください。総一さん！」
声援を送る咲実。

「はつー。」

「ロ、ロ、ロ、ロ、ロ

「ジン

総一：2投目スペア

「つし！」

ガツツポーズをする総一。

「総一さん、ナイスです！」
自分の事のように喜ぶ咲実。

「ぐ、やるわね総一君・・・」
苦い顔をする文香。

「御剣もすごい・・・」
感心するかりん。

「まるで大会を観てているみたいだ」と葉月。

「お兄ちゃんがんばれ～」
応援する優希。

「みんな、すごすぎるよ・・・」
とかれん。

「総一君も～やりますねえ～」
一人のほほんと渚。

(ここで勝負が決まる。8本以上倒せば文香さんに勝てる。文香さんには勝てば俺の優勝のはずだ・・・万が一渚さんがターキーを取つたとしても192点だ。問題ない、落ち着け・・・)

「はあ～、ふう～」
深呼吸をする総一。

「よし！」

『気合を入れる総一。

「総一くん。がんばれ～」

「御剣～ここまできたら文香さんに勝つのよ～」

「御剣さん頑張つてください～」

「総一君頑張れ」

「お兄ちゃん頑張つて～」

「総一さん頑張つてください～！」

「なんか私が悪役みたいね・・・」
苦笑いをする文香。

「ああ～。」

皆の声援を背に総一はボールを構える。

(狙つのはストライク！)

「はあ～！」

גּוֹדְגּוֹדְגּוֹדְגּוֹ

ボールはポケットに吸い込まれるように転がる。

(行止! もの拂拂 もの拂拂!)

一ノ二 息を吸二

いじて止まらぬ矢を矢筒へ戻す。」

ガシャーーン！

総得点 312

「よしあああああああああああああああああああああああ」
叫ぶ總一。

「総一さん！」

大はしゃぎで咲実。

「咲実！」

抱き合つて喜ぶ二人。

「お兄ちやん、勝つちやつた・・・」

「はは、面白こ勝負だつたね」

「御剣、あなたやつぱつすいこよ・・・・・・」

「御剣さん、か！」こです・・・・・・・・

「総一君すいじゅーこ」

「あ～あ、負けちやつたか～」

「文香さん・・・・・

「何？ 総一君」

「いえ・・・・・

「それよりBグループ、こっちみてたのはいいけどそつち終わったの？」

「「あつー。」「

「あつ、て・・・まあいいわ早く終わらせてよね。時間が迫つてゐ
んだから」

「時間？ 時間つてなんですか？」

「あーそのときになればわかるわよ
はぐりかす文香。

「す、すいません。すぐ終わらせます」
慌てるかりん。

「えっと、じゃあ私投げますね」

「咲実～がんばれ～」

「はいー。」

「1番ピンと3番ピンの間を狙つ・・・
ぶつぶつという咲実。

「えいー。」

狙い通り転がるボール。

ガシャー——ン！

咲実：1投目ストライク

「や、やりました！ 総一さん！」

嬉しそうに咲実。

「ああーよくやつたーさすが俺の嫁！
また抱き合つ一人。」

「ちょっと誰か～このバカツブル～いかしてよ～」
不満を垂らす文香。

「ひふりふですねえ～」

「次、いきます！」

「えい！」

ポケットに吸い込まれるボール。

ガシャー——ン！

咲実：2投目？本

「つう・・・」

泣きそうな顔で咲実。

(うわあ～)でスプリット・・・)

「さ、咲実1本確実に、倒そ？」

「はい・・・」

しゅんとある咲実。

「えい」

『ローロローロ』

【シン】

咲実：3投目1本

咲実合計点数：108

「ふう・・・」

疲れた様子の咲実。

「お疲れ、咲実」笑顔でスポーツドリンクを渡す総一。

「あ、ありがとうございます。」

「惜しかったね」

「はい・・・折角総一さんに教えてもらつたのに・・・」
悔しそうに咲実。

「でも最初ストライク取れたじゃん。それだけでもすばらしいよ」
笑顔で総一。

「はい」

つられて笑う咲実。

「にしても、かりんの奴やるよなー最後の最後でスペア・ストライク出してるよ」

「そうですね」

「でもやつぱり渚さんがす」「こですよ」

「ああ、やうだな。まさかのフォース（4連続ストライク）だもん
なあ～」

「優希ちゃんとかれんちゃん、頑張ってたみたいですが、途中で
疲れちゃったみたいですね」

「優希はともかく、かれんはまだ退院してそんな経つてないからな」

「それ、優希ちゃんが聞いたら怒りますよ?」

「はは、内緒で頼むよ、咲実」

「むう・・・」

「はは・・・」

「ふふ」

一人して笑う。

「皆へお待たせ。スコアシートもひらってきたわよ」

「じゃあ皆の点数を発表するわよ」

「と、まあ皆わかってると思うけど優勝は・・・と言いたいところ
だけど、実は、総一君が優勝じゃないのよね～」

「え？ なんですか？ 僕が一番ですよね？」

「うーん。たぶんもうそろそろくるんじゃないかしら？」
不気味に笑う文香。

「？？？」

ハテナを浮かべる総一、その時・・・

「待たせたわね！」
女性の声が響く。

「『え？』」一斉に振り返り一同。

そこには金髪ツインテールの女性が立っていた。

最後の戦い 第9・10フレーム（後書き）

はい、ついにー。よつやくー書き終わりましたー。いやー長かった。・
・自分がマイペースなせいで長くなってるだけなんですね(笑)
これで シークレットゲーム アナザーストーリー は終了となり
ます。

え？まだ続く終わり方になつてゐる？ええまだ続きますよ。ですがタイトルが変わります。そのタイトルとは・・・

シーケレットゲーム アナザーストーリー VS 麗佳織

です。

皆さんお待たかねの麗佳絵はなります
さつそく中身が気になりますよね？

ということで、次回予告を作つてみました！

- - - - 次回予告 - - -

文香「どうしたの？ 総一君、まさかもう終わり？」

「何、言ってるんですか。まだまだこれからですよ・・・・・」

咲実一 総一さん、もうやめてください！無茶です！」

「咲実、男にはやらないといけない時があるんだ！」

咲実 総一 さああああああああああああああん

かれん「え? 何? お姉ちゃん」

かりん「かれん、大丈夫?」

かれん「んう~? らにがあ~?」

渚「ん~やつぱり大勢のほうが楽しいですね~葉月さん」

葉月「はは、そうだね」

優希「咲実お姉ちゃん~」のままじやお兄ちゃんが~」

麗佳「御剣、わたしに勝つ」と出来るかしら~」

総一「やるからこは勝ちに行きますよ」

総一「咲実・・・」

咲実「んつ、はあ・・・」

咲実「ああ・・・」

総一「そ、そんなに気持ちいいのか・・・?」

咲実「は、はい・・・ああんつ」

総一「さ、咲実・・・」

シークレットゲーム アナザーストーリー √S麗佳編

11月下旬公開予定

ということです、はい。

一応11月下旬公開予定となっていますが、もしかしたら早まるかもしれません。その辺曖昧ですいません・・・。

では、そろそろこの辺で「シークレットゲーム アナザーストーリー」をこれからもよろしくお願ひします！

激闘の末、束の間の休息 前編（前書き）

ボウリング大会が終わった後金髪ツインテールの女性が現れた、なんとその正体は「矢幡麗佳」だった。

文香は総一と麗佳のタイマン勝負を提案するが・・・。

激闘の末、束の間の休息 前編

「待たせたわね！」
女性の声が響く。

「「えつ？」」「

一斉に振り返り一同。

そこには金髪ツインテールの女性が立っていた。

「麗佳・・・さん？」

驚く咲実。

「え？え？麗佳さん今日これないんじや・・・・・・？」

同じくかりん。

「ええ、やさしい友達に久々に会えるんだから行つていいい、て言わ
れてね」

「ホント、御剣のおかげよ」

「俺の・・・・・ですか？」

「さうよ。あなたが私を変えてくれたのよ。友達が出来るぐらいいこ
・・・・・ね」

田を細める麗佳。

「そんな事言われても・・・・・俺がやりたいと思つた事をやつ

ただですよ」

「謙遜しなくともいいわよ、事実なんだから、本当にありがとうございます」「戸惑いながらはあ……こきなつそつ言わると照れますね」「戸惑いながら総一。

「やうかしら？」「あんまり話へると彼女が怒るかしら？」

「ふえ！？」

急に振られて驚く咲実。

咲実の奴なんでそんなに驚いているんだ……？

「れ、麗佳さん、私そんな事じや怒りませんよ……？」

嘘だ！今日何度も怒つてただろ？…と思つが口に出して言える訳がない。まあ、嬉しくはあるんだがな……。

「あー3人とも私達がいる」と忘れないでよ~。苦笑しながら文香。

「あ……すいません」

「お久しごりです。渚、葉月さん、かりんさん、かれんちゃん、優希ちゃん」

「あら？私にはないのかしら？」

「文香さんとはこの間会つたじゃないですか」

「それもせうか」
笑いながら文香。

「と、そつだボウリングどうなりましたか？」

「ちゅうじ今やつを終わつたと」ヒリよ

「あ、じゃあ2ゲーム田ですか？」

「うーん、残念だけど総一君の優勝で終わりよ」

「そ、そんな・・・・・」

うなだれる麗佳。

「でも麗佳ちゃんが来てくれよかつたわ」

「え? どゆう事ですか?」

ハテナを浮かべる麗佳。

「せつかく店を予約したんだから

「お店の予約・・・・・ですか?」

「やうよ

「それだけ参加出来るだけでもマジね
そつ言いつつも残念そうに麗佳。

「あ? 麗佳ちゃんボウリング参加したかったの?」

「ええ、じつみえても得意なんですよ

「へえ~」

「ヤニヤある文香。

「な、なんですか・・・・?」

「そんな麗佳ちゃんに朗報上

「え?」

「皆明後日の予定空けてるわよね?」

「うや～んと空けてますよ～
と渚。

「はい。」

返事をするかりん、かれん。

「はい、空けてあります
と咲実。

「言われたとおり空けてますよ

と総一。

「ちよつといふ社が休みだから問題ない
と葉月。

「麗佳ちゃんも空けてあるわよね?」

「え、ええ・・・」

「ふふ、明後日総一君と麗佳ちゃんのタイマン勝負やるわよ。」

なつ！？

黨國

驚く総一とは別に冷静に麗佳。

「本気も本気、大マジよ。あ、総一君これで負けたら景品なしだか

笑顔で文香

「なん……だと!?」

「何驚いてるのよ。当たり前じゃない元々麗佳ちゃんも参加出来たんだから不公平でしょ?」

「……………ですね……………」

「ところで、何に付いてるのよ？ 麗佳ちゃん

「は、はい。ありがとうございます」

「良いわよ、気にしないで」

「御剣、悪いけど手を抜く気はないから」

得意げに麗佳。

「俺も負ける気はしませんよ」
負けじと総一。

バチバチバチバチ。

「はいはい、火花散らすのは明後日にしね
呆れながらも楽しそうに文番。

「えつと、文番さん、そのお店って何処なんですか?」
と咲実。

「んー、着いてからのお楽しみね」

「つ～せつこわれると氣になるよ～」
とかれん。

「ちよっとかれんー落ち着きなたこよ」

「でもお姉ちゃんも楽しみでしょ?」

「わつやあ・・・・・まあ」

「飲み会ですかあ～楽しみです」

嬉しそうに渚。

「いや、飲み会つひ・・・・・」

苦笑しながら総一。

「別にいいじゃなく、大人は飲むんだから 一矢」と笑う文香。

「はあ・・・・・」

今笑った・・・・・よな?何企んでるんだか・・・・・。

「総一さん、飲みすぎちゃ駄目・・・・・ですよ?」

心配そうに咲実。

「ああ、わかつてるとよ」

自分ではあまり飲まないつもりでも文香さん辺りに無理やり飲ませられそうだけどな!というか俺が酒飲むの前提かよ・・・・飲むけどさ。

「ほらあ~、二人共ボーとしてると置いてくわよ!」

気がつくと皆移動を始めていた。

「あ、すいません!」謝る総一。

「行こ、咲実」手を差し出す総一。

「はい!」その手を握る咲実。

一人して走り出す。

絶対京都旅行手に入れてやる・・・・・!

「急いで走ってきたと思ったら・・・・・一人して何、手を繋いでるのよ!」

「え、ええと駄目…………なんですか?」

「何！ 独身の私への嫌がらせなのー？」

「アーティストの精神」

一生懸命押さえるかりん。

「いや、離してあのバカップル（彼氏）を土に埋めてやる

ମୁଦ୍ରଣ

「御剣、あなたもう少し周りをみたら?」

麗佳

「す、すいません。」
反省する総一。

「とにかく落ち着いてください、文香さん」

「ふふ？ 総一君は何を言つてゐのかしら？ 私は至つて普通よ？」

だったら普通に笑つてください・・・・・目が笑つてないです・・・

不気味に笑う文香。

「んー、お兄ちゃんは監に』『これが俺の彼女だー』て見せびらかしていいんだよね?」
と優希。

ちゅつ？！それは火に油・・・・・！

「うふふ～」

背後から不気味な笑い声が聞こえてくる。

「な、渚・・・・・さん？」「恐る恐る総一。そこには笑顔を浮かべる般若が立っていた。

「えええええええ。怖すぎるー渚さん・・・・・。

「総一君？」

笑顔で渚。

「は、はひー！」

「女性をいじめるなんて何時からそんなに偉くなつたのかなあ～？」

「いや、いじめては・・・・・

キツー！睨む渚。

「めんなさい、すいません」

「まったく、もう・・・・・・

そんなこんなで田的場に到着。

「文香さん」

静かな声で総一。

「ん~? 何? 総一君
店を見る総一。

『居酒屋 隠れ家』

「(イ)居酒屋じゃないですか!」

「そうよ、何か問題あるの?」

「問題はないんですけど・・・
大人がいるしまったく問題はない。だが絶対何がある・・・!(
決め付け)

「いいじやない、大人がいるんだし」

「そう・・・ですね・・・
大丈夫だ、きっと・・・

「じゃ、入るわよー」

そういって暖簾をぐぐる文香。

「おじさん来たわよ~」

「お~、文香ちゃん待つてたよ~
おじさんと言われた人が返事をする。

「予約しておいた席ちゃんととつてある?」

「ねつよ、こしても文香ちゃんが大勢連れてくるなんて珍しいじゃ
ねえか」

「お、結構子供がいるじゃねーか、なんでえ文香ちゃんの兄妹か何
かか? それともこれか?」

そう言って小指を立てるおじさん。

「おじさん、その話はしない約束よね?」

笑顔で文香。

「む、おおめうこうえは・・・・めうだつたな」

「あの文香ちゃんの人は?」
と締一。

「ここの居酒屋の店長よ。私が仕事し始めたときからよくこいで飲ん
でるのよ」

「じゃあ文香ちゃんは常連客なんですね」と咲実。

「ねつよ」

「ど、文香ちゃんひとりあえずそんなどいで話してないで奥の席行
つてくれ」

「いみんなさいね。とつあえず奥席に行きまっよ」
そうこつて座敷に向かつ文香。

「さて、まずは飲み物ね」

「え？ 料理はいいんですか？」
とかりん。

「料理はもう頼んであるわよ」

「あ、そりなんですか」

「ちなみに何が出るかはお楽しみよ」

まさか、闇鍋・・・・とか出ないよな・・・・?いや、アミがある
し無難に焼肉だらうけどさ、あの文香さんだし。

「何が出来るか楽しみだね姉さん」
わくわくしながらかれん。

「アミがあるし焼肉じゃ・・・・?」

とかりん。

「で、皆なに飲む？とりあえず大人はビールでいいかしら？」

「ああそれで構わないよ」

「私も大丈夫です」

「私もビールでいいですよ」

「じゃあビール4つかな、総一君たちは何飲むの？」

「あ、俺はウーロン茶で
とりあえず最初はウーロンでいいや。

「私もウーロン茶でいいです」

「あ、私も～」

「優希ちゃんはなに飲む?
とかれん。

「ん～私はオレンジジュースにしていいかな～」

「じゃあ私もオレンジジュースで」

「えっと、総一君、咲実ちゃん、かりんちゃんがウーロン茶でかれ
んちゃんと優希ちゃんはオレンジジュースでいいかしら?..」

「はい、オッケーです」

「じゃ頼むわね」

店員「い」注文お決まりになりましたでしそうか?」

「生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ・・・・・
は?・ウーロン2つ・・・・・?」

「それとウーロンハイ1つ
はあ?・・・ウーロンハイ!?

「ちよ、ちよっと待ってください」文香さん!・ウーロンハイなんて頼

「向こう、どうせお酒後で飲むつもりだったんでしょ？」

「ぐつ・・・・・」
言ひ返せない俺。

店員「生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ、ええと・・・・・

「ウーロンハイでいいわよ」

店員「は、はいわかりました。ではご注文繰り返しますね。生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ、ウーロンハイ1つでよろしいでしょうか?」

「ええ、いいわよ」

総一を見る店員。

「ええ・・・・・それでいいです」

店員「ええと、すぐにお持ちしますね。あはっ！」

笑顔で言つ店員。

「あ・・・・・」笑顔に見惚れる総一。

可愛い・・・・・・・・・・はっ？！

視線を感じた総一。

「ジ———」

ジト田で咲実。

「ええと……咲実……さん?」

「なんですか? 御剣さん」

(あ、呼び方が変わってる。なんつーかデジャバ? 何回田? 誰か数えた奴いる?)

「いえ、ナンデモナイデス
このものは触れないでおいて、うん、それよりも……。

「さて、これで飲み物が来るまで待つだけね」

「文香さん……」
ジト田で見る総一。

「なあに? 総一君飲めないわけじゃないでしょ? といつか飲むつもりだったでしょ?」

「それは、そうですね?」

「じゃあいいじゃない。それに今のうち飲み慣れてたほうがいいわ
よ」

まあ一理あるな……。

「わかり……ました」渋々頷く総一。

「御剣さん大丈夫なんですか？」

心配そうにそして目が笑つていらない笑顔で咲実。

相変わらずの威圧感・・・・・」ええ・・・・・。

「い、一応何度も飲んだことあるから大丈夫」
だと思つ・・・・・。

「そうですか」

すぐに顔を逸らす咲実。

(相当機嫌悪いな、どうしようつ・・・・・)

- - - 数分後 - - -

そこに追い討ちを掛けるように笑顔という破壊兵器を持った店員が
やってきた。

店員「お待たせしましたー、あはつ！」
笑顔で言つ店員。

・・・・・やっぱ可愛い、これを可愛いと思うな、といつまうが無理
じゃないか? だって・・・・・人間だもの b y 総一。

「あ、ああ、ありがとう
て、何動搖してんのだ俺!?

「えっと君、名前なんていうの?」

て、馬鹿ああああああ何聞いてるんだ俺？！大丈夫か？！

「え? エット...」

ほら、女の子困つてるよ。

「と、わりい変な事聞いたまつたな忘れてくれ」

「青海衣更つていいます。あはつ・一・亥」

案外普通に答えてくれたな、たぶん今まで色んな客に聞かれたんだ
ううな俺みたいに。

「そ、そつか、青海衣更さん・・・・かいい名前だね」
誰か俺を止めてくれ・・・・。

「あはーーーおつがヒーリングか」

「その笑顔に俺は・・・・・はつ！？殺気が・・・！」

笑顔で咲実。

なんかドス黒いオーラが・・・・！

「は、はい・・・・」

「一旦外、出ましょうか」

笑顔を崩さず咲実。

「あ、ああ・・・・・」

わからぬから足の震えが止まらないんだが・・・・・。

外に出る一人。

「え～と、で、咲実さんお話といつのは・・・・・？」

恐る恐る総一。

「御剣さん、わからないんですか?」

ええ、わかりますとも。そしてこの後に待っている展開もね・・・・・！

「・・・・・わかりません」
わかると答えた時点で死亡確定だらう・・・・・?
まあ「わからない」と答えても死亡確定だらうけどね！
「そうですか、『わからない』ですか」

うわあ～こめかみピクピクしてゐる初めて見たー。って関心してゐる場合じやねーよ！

「じゃあわかるように教えてあげますね」

何処までも清清しい笑顔で咲実。

「ま、待て咲実ー話し合おうー話せばわかるはずだー」
必死に総一。

「何を言つてゐるんですか? 総一さん、話し合ひに決まつてゐるぢやないですか」

じゃあその手に持っている棒は何なんですか・・・・?

「じゃあ、その手にある棒はなんだ？！」

「これ、ですか？」

手に乗せて軽く振る咲実。

「これは・・・・・話し合いをスムーズに行うための魔法の棒です
よ

脅しかよ・・・・・！

ゆつくり総一に近づく咲実。

「総一さん、動かないでくださいね？動くと余計に酷い事になりますよ？」

「じゃあ御剣さん、ゆっくり話し合いましょうね？」
そういうて棒を上げる咲実。

チーン。

総一の声が静かな夜に響くのであつた。・・・。

「じゃあ先に乾杯しちゃいましょうか」

「え？ いいんですか？」

「いいの、いいの自業自得なんだし」

一
は
あ

いやあ改めてかんはああああああああし！」

卷之三

「んう、んう、んう、ふはあああああああああ。やつぱーる
はいこわねえ」

「文香さん、親父っぽいですよ？」

「別にいいじゃない。それに麗佳ちゃんも中々良い飲みっぷりだつたわよ」

「それは褒め言葉…………ですか？」

「ん~たぶん」

「はあ~」

ため息をついて麗佳。

「げそのからあげ、お待たせしましたー。」

「お、待ってましたー。」
「げそのからあげ美味しいのよね~」

自分で事のよつて衣更。

「あつがとうござります。あはつー。」

「わい、わいわい・・・・かな?
と文香。

「やうやうひて何がですか?」

「ん~衣更ちゃん、少しここにこればわかるわよ

「? わかりました
と、そのとき。

『総一さん、動かないでくださいね? 動くと余計に酷い事になりますよ?』

「え~と、今のつて確か咲実さん、でしたよね?」

「ええ、そうよ。今回ばかりはかなり本氣で怒ってるみたいねえ」「人事のように」（実際そうなんだが）文香。

「私のせい……ですか？」

申し訳なさそうに衣更。

「ん、原因はそうだけど悪いのは十中八九総一君ね」

「はあ・・・」

『じゃあ御剣さん、ゆつくり話し合いましょうね?』

「このまま放つておいていいんですか・・・・・?」心配そうに衣更。

「ん~大丈夫でしょう」

『ま、待て！咲実落ち着く、ぬぎやああああああああああああああ』

「ほ、本当に大丈夫・・・・なんでしょうか・・・・?」

「大丈夫、大丈夫。
心配ないわよ」
軽く流す文香。

「お待たせしました」

「え、ええ・・・・その、御剣は生きてる・・・・わよね?」

恐る恐る麗佳。

「何言ひてるんですか？麗佳さん。生きてるに決まつてるじゃないですか」

そういうながら総一を引きずりながら席に座る咲実。

「そ、総一大丈夫……？」

さすがのかりんも心配する。

「あ、ああ……たぶん……後は頼ん……だ」
バタッ。

「え！え？お、姉さん御剣さん倒れちゃったよー!?」
驚くかれん。

「わ、私に振らないでよかれん！」

「さて、死人は放つておいて」
軽くスルーする文香。

「無視、しないでくださいよ……」
起き上がる総一。

「あら？生きてたの？」

「生きてますよ……」

「総一さん、私の「ツブが空なんですか？」

「は、はーーすぐお注ぎしますー！」

「んー見事に尻に敷かれてるわねー自業自得だけぞ
笑いながら文香。

「笑い事じゃないですよ……」

「え、えっと……大丈夫……ですか？」

衣更が心配そうに。

「え、ええ大丈夫です……
やっぱ可愛い……」

「總一さん？」

笑顔で咲実。

「いえ！誓つて何もやましい事は考へません！」

「私、まだ何も言つてないですよ？」

「はいはい、咲実ちゃん。そろそろ許してあげて」

「はい……」

「ほら二人とも早く料理食べたら？」

「は、はい……」

「はふうはふう～やつぱりサンチエで巻いたハラミは最高です～
嬉しそうに済。

「はは、確かにおいしいね

と葉田。

周りを見渡す渚。

「ねえかれん、これおこしこよ」

「え? どなだけ?」

「久々のビールはほんとつまごわねえ~

「文香さん飲んでばかりですね」

「総一さん、あへん です。」

「ちゅうひー! リドか! ?」

「いや・・・なんですか?」

寂しそうな顔で咲実。

「い、いややうめいわけじや・・・」

なんだ? ... いつもハイフレイなのか! 恥ずかしそれも・・・!

「ん~やっぱり大勢のほうが楽しいですねえ~葉田さん

「はは、やうだね

「それとも、私じゃなくて衣更さんのほうが奥にいる事ですか?」

「ふええ? ...」

「ふつぶつビビンバ」の持つてきた衣更が驚く。

「あ、あの、その・・・・・」

顔を真っ赤にして衣更。

「い、いやそんなこと言つてないだー!・?・」

いや、まあやつてもらいたいか、と言わればやつてもらいたいけどなー

「す、すいません。私、彼氏いるんでそういうのはちょっと・・・・・・

」

「え、つー?・

驚く総一。

「総一さん? 何驚いているんですか?」

うん、相変わらず笑顔が怖い俺の嫁!逃げるか・・・・・。

「ど、ちよつトイレに・・・・・

ガシッ。腕を捉まれる総一。

「総一さん、何処に行くんですか?」

「え、いやだからトイレに、だな・・・・・・・・
やべえ・・・・・・冷や汗、出てきた。

「ふふ、総一さん、駄目ですよ? 疑問は晴いりたくないと

「いやあ、疑問も何もないわけでして……」「咲実、ここ来てから性格変わつてないか……？もしかして酔つてる……？」

「そうですか。総一さんになくても私にはあるんです」

「そ、そ、うか。じゃあトイレから戻ってきてか」

「連行です」

そう言つてまた、外に連れ出す咲実。

「ちよつ！？何処にこんな力が……！」

「ま、待て咲実！話し合おうー。」

「どうかなんだその繩とムチみたいなものー？」

「うふふ、なんでしそうね？」

そう言つてゆづくら近づく咲実。

「う、うわああああああああああああああ
総一の声が木靈する。

「二人とも仲、いいですねえ。羨ましいですう～
羨ましそうに渚。

「あの声を聞いて羨ましいって……」「
とかりん。

「咲実さん怒ると怖いですね・・・」
そういうながら飲み物を手に取るかれん。

「お姉ちゃんさあ」二怒りした。「…………」「と優希。

「咲実ちゃん、相当怒ってるわね～。面白いわ～」

「面白くはないと思しますけど……さすがの麗佳も心配そうに呟つ。

「まあ」れで総一君浮氣しないでしょ」「

「確かに、それはそうかも」
笑いながら同意するかりん。

「お兄ちゃんには良い薬だよね~」

「あ、優希ちゃんねすがにそれはひどいんじゃ……？」

同意する優希

「ふふ、もうね。でも、たまにはいいやつのもいこんじゃないかしら？」

「麗佳君の言つ通りかな。いつか事せば若こひで行けりしか出来ないか

らね

「そうですよ。あれも、一人の愛情表現なんですよ」

「うん、そうかもねつてちょっと待つてかれん！？それは飲んじゃ
だめええええええええええええ」

「え？」

時既に遅くその飲み物を飲んでいた。

「か、かれん・・・・・大丈夫？」

かれんが飲んだのは日本酒だった。

「らいじょうぶつてらにがあー？あれれえー姉さんが一人いるうー
ふらふら揺れるかれん。

「か、かれん・・・・
心配そうにかりん。

「うーなんかグーヤグーヤしてるうー

バタン。

かれんが倒れる音。

「か、かれん！？」

「ンンンン」

寝息を立てるかれん。

「寝ちゃつた・・・・」

「んーたぶん大丈夫でしょ

「せうだといいんですけど……」
心配するかりん。

- - - 数十分後 - - -

「うへ、頭痛いよ~」

「はい、かれん、氷
氷を渡すかりん。

「ありがとう、姉さん……」

「かれん、大丈夫かい?」

心配する葉月。

「うん、なんとか……もつお酒は飲まない」とするが、

「わへいじりつつ、とこつたよつすでかれん。

「せうね、かれんちやんはお酒にかなり弱いみたいだし
同意する文香。

「これから氣をつけなさいよ」

「うん……心配掛けないめんね。姉さん」

「ううん、気にしなくていいよ」

「うん、ありがと、姉さん」

その頃総一は・・・・・

「・・・・・はーっ！」

「あ、総一さん。田、覚めましたか？」

「あ、ああ・・・・・」

周りを見渡す総一。

「俺・・・・・どうしてたんだ？」

「お酒飲んでいたときに横に飾つてある棒？が落ちてきたんですよ

「そ、そりが・・・・・。
何か違うような・・・・・。

「?どうしたんですか？総一さん」

「いや、なんか変な夢を見たんだが・・・・・

「夢・・・・・ですか？」

「ああ・・・・・咲実に棒で殴られたり、縄で縛られて鞭で叩かれた
りだな・・・・・」

「なんですかその夢、私がそんな事するわけないじゃないですか」
怒った顔で咲実。

「ああ、悪い。咲実がそんな事するわけないよな。『ごめん』
謝る総一。

でも妙にリアルだったような・・・・。それになんか縄で縛られた
ような感覚が・・・・。

「本当に大丈夫・・・・ですか？」

「たぶん、大丈夫」
飲みすぎて混乱、してるのである。

「あ、総一君起きたんだ」
と文香。

「あ、はい、ご迷惑掛けました」

「いいわよ。それより・・・・」

そう言つて文香はドンペリを出した。

「総一君これ、飲んで見ない？」

「それって・・・・」

驚く総一。

「?御剣何そんなに驚いてるの?」
とかりん。

「なんでって、これドンペリだぞ？」

「えへへ、ペコーへ、ペコーへ、ペコーへ、」

「あのう、アレ、今、佩里もつしかないだろ……」「

「まあ一応種類はあるけどね」

補足説明を入れる文書

ג' ד' א' ע' ט'.

「さすがにそれは・・・・」

「そう、これ飲んだら某デパートの商品券1万円分を景品に追加しようと思つたのだけれど・・・」

残念モノ文體

「ああ後これも・・・・・ね」

そう言つて何かの券?を手渡つかせる文喬。そこには

『ホテル無料券』と書いてあつた。

ラブホ無料券・・・・!

「全力で飲ませていただきます！」

「ふふ、それでこそ總一君ね！」

「うしてドンペリ飲み大会?が始まった。

「ふふ、3杯目終」――

余裕の表情で文香。

「ふ、文香さん、」れってこんな飲み方するお酒でしたっけ・・・・?

苦しそうに総一。

「どうしたの? 総一君、まさかもう終わり?」

「何、言つてるんですか。まだまだこれからですか・・・・・」

「総一さん、もうやめてください! 無茶です!」

叫ぶ咲実。

「咲実、男にはやらないといけない時があるんだ!」

「総一さんあああああああああああああああん

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「総一さん大丈夫・・・・ですか?」
心配そうに咲実。

「あ、ああなんとかな・・・・・」

結果は、俺の負けだつた。

「にしても文香さん。どれだけ肝臓丈夫なんだ・・・・・。勝負の後、普通に日本酒飲んでたし・・・・・。」

「どうりで文香さんは?」

「えつと今店長の漆山さんと話します」

「やうか、えつと店長つて『あの』漆山さんと顔見知りなんだっけ?」

「はい、なんでも昔の常連客で同姓同名といつ事で一応仲はよかつたみたいです。ただ・・・・・」

「ただ・・・・・?」

「なんでも女性客に変な事して・・・・・それ以来店に来ないでくれつて追い出したみたいなんです」

「なるほど・・・・・」

ちなみに向で店長の名前を知っているかといつと、ここに来る前に文香さんが教えてくれたからだ。

「店長と何話してんだろ?」

「わあ・・・・・仲良いみたいですし、世間話か何かじゃないですか?」

「それもそろか・・・・・」

何か嫌な予感がするんだが・・・・・思い過ごしだといいな・・・・・

「ふう・・・・・さすがにもう食えない・・・・・」

苦しそうに総一。

「私も、もう・・・・・」

同じく苦しそうに咲実。

「大丈夫かい? 一人とも
心配そうに葉月。

「ええ、大丈夫です。それにしてもこの料理おいしい・・・・・」

「ああ、そうだね。お酒もおいしいしね
そういうながら日本酒を煽る葉月。

と、そこに新たな客2名がやつてきた。

一人はチャラチャラした、いかにも不良という感じの若者。
もう一人はスポーツマンの様な体つきの男。

「高山のおっさん、本当に、こここの酒と料理がうまいのか? 見た目、
普通の居酒屋に見えるんだが」

疑る客人。

「手塚、見た目で判断するのは感心しないな。そんななんじや戦場で
すぐ殺されるぞ?」

高山と呼ばれた人が答える。

「へいへい、相変わらず高山のおっさんは厳しいねえ～」

その声が氣になつて振り返る総一。

「なつ？！手塚！？」

大声で叫ぶ総一。

「ああ？」

その声で振り向く手塚。

「お前は・・・御剣！？」

「『なんでお前がここにいるんだー』」「同時に言つ總一と手塚。

「え、嘘、手塚・・・？」
とかりん。

「本当に、手塚君・・・なのね」と渚。

「あ、あの時助けてくれた人！」
と優希。

「偶然にしては・・・出来すぎだね
さすがの葉月も動搖する。

「ツチ、高山のおっさん、悪いけど俺は出るが

「なんでだ？」

「なんでだ？って俺は御剣みたいな奴が嫌いなんでな」

「あらあ～手塚君、何処に行くのかしら？」
店長と話してた文香が振り向き、言ひ。

「……あなたもいたのか」

「まあ、私はここの常連だからね」

「常連、ねえ……まあビードモいいけどな」

「じゃ、悪いな、高山のおっさん。俺は失礼させてもいい

「待つてくれ、手塚……」
叫ぶ総一。

「ああ？てめえと話すことなんてねえよ。後な、俺はてめえみたい

な奴が大嫌いなんだ、話かけるんじゃねえ」

そう言つて店を出ようとする手塚。

「待て、手塚」

そう言つて出て行くとする手塚を止める高山。

「どうやら事情があるようだ」

「…………たく」

ため息を吐きながら振り向く手塚。

「手短に話せ、ぐだらない話だつたらシバくぞ」

「あ、ああ」

そう言ひて高山を見る総一。

「高山さん、ありがとうございます」

頭を軽く下げる総一。

「ああ、それよりも手塚に話があるんだろう？」

「あ、いえ高山さんにも関係ある」とです
そいつ言ひて一人を見る総一。

「手塚さん、高山さん、あの時は助けてくださいてありがとうございました」

頭を深々と下げる総一。

「ちょ、ちょつと総一！何言ひてるのー？その二人私たちを殺そう
としたんだよー！」

叫ぶかりん。

「最初はそうかもしけない、でも最終的には一人には助けてもらつ
た」

「かりんちゃん、落ち着いてください
なだめる様に咲実。

「で、でも……」

脇に落ちない様子のかりん。

「御剣、お前ふざけてるのか？」
睨む手塚。

「何もふざけてませんよ」

「お前、馬鹿か！？お前らを殺そうとしたんだぞ！」

「でも、最後は助けてくれました」
真つ直ぐ手塚を見る総一。

「ツチ、お前、どんなだけお人好しなんだよ」
呆れた顔の手塚。

「自分でもそう思います」
そつ言つて笑みを浮かべる総一。

「話はそれだけか？」

「え？」

「話はそれだけか、って聞いてんだ！」

「あ、はい」

「つたぐ、これだから俺は、お前の事が大嫌いなんだ。じゃあな」

「手塚さん、一緒に飲みませんか？」

「はあ！？だからお前の事嫌いだ、って言つてるだろ？がー！」

「手塚、」の酒と料理のつまみは俺が保障する

「いや、俺はここと飲みたくないだけでだな」

「ん？俺は御剣達と飲むとは一言も言つてないが

「ぐ・・・・・わあつたー！」で飲めばいいんだろー。」

「どうやら手塚君は高山さんには勝てないみたいだね」「一人を見てこう葉月。

「なるほどあ～手塚君はシンデレなんですね～」

「なつ・・・・・なんでそつなるんだー！」

「だつてえ～、嫌といいながら結局飲むんじやないですかあ

「誰もお前たちと飲むとは言つてない・・・・・。」

「本当にこれが『あの』手塚・・・・・なのか？」

咲実に尋ねる総一。

「こ、いえ私に聞かれても・・・・・。」

「むー・・・・・。」

「どうした？かりん」

「いや、私も総一と同じで本当に手塚なのかなーと思つて」

「おこー！めざら聞いとるわー。」

「ひこつー。」

怖がるかれん。

「手塚君、かれんちゃん怖がってるわよ。」

「ヤニヤ笑う文香。」

「つせえ、ガキも嫌いなんだ」

「あ、あの席の方、カウンターでいいですか……？ようしければ文香さん達の隣に座れるようになりますが……？」
怯えながら衣更。

「あー！？んな必要ねえよー！カウンターだ、カウンターー。」

「は、はこつー」

「手塚、もう少し落ち着いたらどうだ」

「この状況で落ち着けるわけねえだろ……ビニツモビニツモ俺を馬鹿にしやがって……。」

そうこうついつ落ち着きを取り戻す手塚。

「で、高円のねつとんどの酒がつまいんだ？」

「あ、おやじ、あれ頼む」

「ぬいよー。」

「ねえ、姉さん」

「どうしたの？ かれん」

「やつは姉さんが言つた『殺されやうになつた』に違ひぬつて。」

「あ・・・」

しまつた。・・・・・。ジンシヨウ

總一を見るかりん。

「ああ、実はな・・・・・」

「へえ、じゃあ良い人なんだ」
傭兵の二人に助けてもらつたが、やり方が強引で自分たちも殺され
そうになつたから、かりんがそう言つていると伝えた。

「へえ、じやあ良い人なんだ」

「まあ、そうかな」
無理に笑うかりん。

ごめんね・・・かれん、本当の事はいつか必ず・・・。

心に誓うかりんであつた。

「わい・・・・衣更けやん、ひょっこいがしりへ。」

「？ 店長ここですか？」

「ああ、文香わやんから話は聞いてるかい」

「あ、はーー。」

文香わん、青海さんと随分仲いいんだな。まあ、常連だし当たり前
か。

「で、衣更ちやんに提案・・・とこつかお願いがあるのよ

「お願い・・・ですか？」

「ええ、えつとね・・・・・」

ここからじゅまく聞き取れないな・・・・・って何で俺盗み聞きして
るんだ！？

俺、どうしちゃったんだね？・・・・・。

「え？ 祐樹先輩と・・・・・ですか？」

「やうなのよ、どうかしら？」

「え、え～と・・・・・先輩に聞いてみないとなんとも・・・・・

なんか話が進んでるな、文香さんのお願い？なんだろ？

「じゃ、これ」

そつとメモのようなものを渡す文香。

「もしよかつたらお願ひね」

「あ、はいー」

「あ、わざわざ後ね・・・・・」

「えー本当にですか？」

「ええ、だからね・・・・・」

「は、はいーわかりましたーあはっー。」

戻つてくる文香。

「お帰りなさい文香さん。青海さんと何話してたんですか？」
と咲実。

「んーちよつとした世間話・・・・・かな」

あまり話たくない、て感じか、無理に聞く必要もないか。

「陸島さん。隣、いいか？」

モード高音をやがてへる。

「ええ、いいわよ」

居を語る文部

「すまない」

「で、どうして高山さんがここに？手塚君と飲むんじゃないの？」

何、似たような職業がてら興味が沸いてな

文香の眼が鋭くなる

「知つてたの？」

「ああ、あの時からな

「ふうくん。まああいつらは殲滅したから今はしがない〇」だけどね

「組織はもうなくなつたのか?」

「ん、どうかしら。案外まだ続いてるかもしねないわね」

「どうしてやめたんだ？」

「あえて詮のなり・・・・・ 総一船達に出来た・・・・からかしらね」

「ふむ、つまり口常が恋しくなつたと」

「せうとうでもうつて構わないわ」

「高山さんが傭兵を続ける理由は？」

「やうだな……日常に飽きた……といえばわかりやすいか？」

「その割にはいつも日本に戻ってきてるみたいだけど？」

「ヤニヤしながら文香。

「ああ、たまに日本が恋しくなる。俺も人、という事だな」

そう言って酒を煽る高山。

「おい、手塚一人で飲んでないでこいつち来たらどうだ？」

「そいつらと仲良く飲むつもりはねえ」

「やうか……ヒロで陸島さん」

「なにかしら？」

「あのときのメンバー全員で集まっているところは何かやつて
いたのか？」

「ええ、それはね……」

ボウリングの事を伝える文香。

「なるほど、それに俺たちも参加させてもうえないか？」

ブツ――――――――。

酒を吹く手塚。

「高山のおひやんー何言つてやがるー。」

「別にいいだろー、どうせ明後日まで暇なんだからな」

「確かに暇だが、どうして御剣達と遊ばなきゃなんねーんだつー。」

「面白そりだから・・・・・じゃダメか?」

「駄目に決まつてんだろー。」

「さうか、手塚は御剣に負けるのが怖いのか・・・・あからさまに呆れる高山。」

「なん・・・・・だと?」

「俺が御剣なんかに負けるわけ無いだろー。」

「じやあこいにじやないか」

「へへ・・・・・わかった・・・・・」

「五ひやんよー。」

「ふふ、それでひやん手塚君ね」

楽しそうに文番。

「おこ、御剣!お前だけには負けねーからなー。」

「俺も負ける気はありませんよ」

「ふん、なんだかんだ言ってやるのが手塚だからな」

「高山さん、随分手塚の扱いがうまいわね」

「ふつ、さすがに1年も見ていいればな」

「なるほどねえ・・・・・」

なんか文香さんと高田わん、楽しそうに話てるな・・・・」

「……………すね」

「俺で殴り合ってみたよ。」

「私もです」

そう言って肩を寄せる咲実。

「咁實……」

「總一・・・・ちゃん」

顔を近づける二人。

「あー！お兄ちゃんとお姉ちゃんキスしようとしてるー！」

叫ぶ優希。

「ナニ？」

「や、優希ちゃん！？」

「總一君」

「なんですか？文香さん・・・・？」

「うんなどうろでイチャつくなんて良い度胸してるわねえ！」

うわありなんか最近理不尽に怒られてないか?

へー！御劍、お前も中々やるじやねえか

何をたよ！？

「咲実！逃げるぞ！」

「え？え？逃げるんですか？」

戸惑う咲実。

「逃がさないわよー！」

「ちよつ！？なんで追つてくるんですか？！」

「そんなの逃げるからに決まってるでしょー！」

۱۷۶

笑う總一。

「総一さん、なんで笑ってるんですか？ふふ」
そう言いながら咲実も笑う。

「ああ、こんな状況でも笑っている自分がおかしくてな」

「そうですね、私も同じ気持ちです」

「十一」

「二人とも待ちなさああああああい」

「
」

激闘の末、束の間の休息 前編（後書き）

おまたせしました！ついに来た麗佳編！ 疲れた・・・

今回はかなり長いので前後で分けたいと思います（たぶん前後になるかと・・・）

これからもシークレットゲーム アナザーストーリーをよろしくお願ひします。

激闘の末、束の間の休息 後編（前書き）

文香さんに追われていたが、なんとか切り抜け戻るとすでに手塚と高山の姿は無かつた。

もういい時間といつゝのでそのまま解散になり、総一は咲実と一緒に帰らうとするが……。

激闘の末、束の間の休息 後編

ガラガラガラ。

「あ、3人共お帰り～」
笑顔で迎えるかりん。

「ああ、ただいま」

「えっと……文香さん大丈夫ですか？」
心配そうにかれん。

「ええ、まつたく一人とも私よりちよおおおおおおと若いだけで勝
ち誇つて……！」

「別に勝ち誇つてませんよ……」

「あれ？」

手塚と高山の姿を探すが見当たらない。

「手塚さんと高山さんは？」

「あの一人ならつこわつも、出て行つたよ

もつちよつと話たかつたな……」

「はあ……」

息をつきながら席に着く文香。

「ねじさん、いつものお願い」

「あこよー。」

「まだお酒、飲むんですか？」
心配そうに麗佳。

「ん？ 違うわよ」

「お待たせしましたー、あはっ！」「

オレンジ色の液体が入ったコップを持ってきた衣更。

「ん、ありがと」

「それは……野菜ジュース、ですか？」

「そうよ」

「文香さんは締めにいつも野菜ジュースを飲むんです
補足説明を入れる衣更。

「変わつてますね。お酒の後はラーメンとか言つそ�うですね」

「私そんなに大食いじゃないわよ？」

「ふふ、『めんなさい』

「さて……時間的にそれなりお開き、かしこり
時計を見て言う文香。

時計の針は2時を少し過ぎたところを指していた。

「まだ電車だから、これからも終電で合ひな
かつた。じゃ、しゃれになれないしね」

「ねえですね」

「でもそれでいいかしら？」

「ええ

「依存は無こわ」

「ちよつと寂しい気もしますが……」

「かれん、別に明後日も余れるんだから」

「やうだよ、かれん。それからも一晩一緒になんだから」

「うふ……」

「うふふ、まだ翌日があるよ~」

「盛さんと一緒にいるのも乐しこですからねえ~

「おじやー、私たちほこれで失礼するわ

「ねいめー、今一番やんまた、こつでも飲みここで

「青海さんも、またね」

「それじゃあ、また
手を振つて出て行く。」

「はこつー。ありがとうございました。あはつー。」

その笑顔に俺は……無心でこられるスキルを発動した。

「渚さんはどうなの?..」

「私はあー駅でタクシー拾つて帰りますう~」

「葉月さん達はまだあるんですか?」

「ああ、今日、明日は娘の家に泊めてもいいことにしている

「あー娘さんはどこでこりのね

「麗佳さんは県内だから電車……かしら?..」

「ええ、そつとは駅が違いますからこゝで、ではまた明後日」
手を振る麗佳。

「ええ、また明日」

「僕たちも麗佳さんと同じ方面だからこゝで

「渚さん、文香さん、咲実さん、総一、またね
手を振るかりんとかれん。」

「わー……」
振り返る文香。

「総一君はともかく咲実ちゃんはいいあるの、今からじや危ないでしょ？」

咲実が今住んでる住む所は少し離れにあるからついに泊まるさだよな。
まあもうすぐ同棲だけどなー（親公認の）

「あ、私は総一さんの家に泊めてもいいつもつですけど……」

ふむ、背後から感じる威圧感は氣のせいだね。

「じゃあ帰らうか、咲実」
氣にしたら負けだ、氣にしたら……。

「は、はい……」

さすがの咲実も氣になるか。

ガシッ。

肩を捉まれる音。

ズサァー。

引き摺られる音。

「総一くん？ 何処に行くのかなあ～？」

「何處って、家に決まってるじゃないですか」

笑顔で答える俺。

「うそ、やうだねえーでもお、その前に氣になら」とがあるのよー

「なんですか？」

普通に接すんだ、俺！

まあそり思いつつも冷や汗が出てこるわけだが。

「咲実ちゃんが～、総一君の～家に泊まりに行へって聞けたのは
氣のせい、かなあ？」

「？ 気のせいじゃないですよ」

「そつかあ～」

何處までも笑顔で渚。

「文香さん」

「ええ、渚さん。まかせて」

「何をまかせるんだ……？」

「総一君」

静かの声で文香。

「なんですか？」

「咲実ちゃんを家に泊めるつじうひー。」

「えい、事も何も……言葉通りの意味ですか？」

「若い男女が一つ屋根の下つて何ー 総一君絶対やるわよねー？」

「つーー？」

ボンッ！

真っ赤になる咲実。

「ちょっとー！？ や、やつませんー よ？」

「じゃあなんで疑問系のかなあ～」

すかさず突つ込む渚。

「それは.....まあ状況によりけりといつか.....」

「「「はあ～」」

ため息をつく3人。

「なんで咲実までため息をつくー？」

「咲実ちゃん、苦労してるんじゃない？」

「ええ、苦労します.....」

「総一君に変な要求されてない？」

変な要求ってなんだよ.....。

「もしされたら私が渚さんに連絡しなさい」

あなた達が何をする気ですか！

「は、はい……」

「総一君、もし変な事したら……どうなるかわかつてゐわよね？」
笑顔で文香。

なんで俺の周りに集まる女性は笑顔が怖いんだろうか？

「わかつてますよ」

「よひしー。じゃあ、帰るわよ

「ええ

「はい」

「帰りましょお～」

俺達は駅で別れてちょうど来た電車に乗った。

さすがにこの時間は空いてるな。

席に座る一人。

「ふう～」

疲れた様子の咲実。

「大丈夫か？ 咲実」

「ちょっと、疲れました」

「そっか、駅に着くまで寝ててもいいよ」

「はー……」

そう言って肩に寄りかかる咲実。

・・・・・やばいな、文香さんが余計なこと言つからう・・・・・。
咲実はかなり疲れてるし今日は我慢しないとな・・・・・出来る
のか・・・・? 僕。

「…………」

暇だ、暇すぎる……。

「スウー、スウー」

静かに寝息を立てる咲実。

「寝顔、可愛いよな……優希もこんな寝顔だったつけ
懐かしむ總一。

「あの時は、優希に怒られたんだよな……」

-----約1年半前-----

「もうー…しつんじられないーーー！」

優希の声が響く。

「わ、悪かった。とりあえず落ち着いてくれ
必死に宥めよつとする。

「ひ、人のね、寝顔を観察するなんて…」
顔を真っ赤にする優希。

「か、観察つて……ちょっと可愛になつて思つて見てただけだろ?」

「それが観察つていうのよー。」

「とかお前だつて人の寝顔よくみてるだろ」「う

そ、それとこれとは話が別よ」

なにがどう違うんだ……。」

「うう~」

「べ、別に恋人同士なんだしいいだろ?」

「う~、……しんだもん……」

「ん? 何か言つたか?」

「つ! は、恥ずかしいって言つたのー。」

優希が顔を赤らめる。

「?? なんで恥ずかしいんだ?」

そりやあ恥ずかしいけどそこまでのものか……?」

「だ、だつて寝ながら笑つてたり、涎が垂れてたりして嫌われたら
つて思うと……」

優希が顔を俯ける。

「なんだそんな事か」

「そ、そんな事じゃない！　じ、重要な事よー。」

「そ、そつなのか……」

まあ寝顔見られて恥ずかしそうのはわかるがそこまでなのか。

「その、悪かった」
頭を下げ、謝る。

「！」、今度見るとさは事前に言つてよねー。」

事前について、見られるのが嫌なんじゃなかつたのか……？　まあいか。

「わかつた」

「よろしい」

満足げに首を振る優希。

「つとつと」

優希が何かを思い出だす。

「と」「ひで総一、あなたの誕生日なんだけど……」

俺が思い返していると不意にアナウンスが流れれる。

「次は～上田～上田」

「お、もうすぐか……」

咲実に皿をやる。

「～」の寝顔をもつと見ておきたいってのはあるけど起いちゃかな

「咲実、起きる。もうすぐ着くぞ」

「んう～」

寝ぼけた顔で咲実。

「もうすぐ着くぞ」

「あ、は～……」

しかし咲実は動じないしな。

「どうした？」

「あの、もう少し、～のままでいいですか？」
上田遣いで総一を見つめる。

「あ、ああ……」

神よ……なぜ私にこの様な試練をお『え』になるのですか……。

一人は駅につくまでそうしていた。

駅に着き、その後自転車で15分ほどかけて家に到着する。

「ふう……」

風呂を準備した後息をつきながら俺はソファーに座る。

さすがに疲れたかな……。

「お疲れ様です、総一さん」

麦茶を総一の前へ置く。

「ああ、ありがと」

それを一気に飲み干す。

「ふふ、生き返った」

「ふふ、よかったです」

「咲実、先に風呂入つてきたらどうだ?」

「え? 総一さんが疲れてるんですから先に入つてください」

「俺は後でいいよ。少し休みたい」

「はあ、わかりました・・・・・・・あ!」

何か思いついたように叫ぶ。

「な、なんだ？」

びっくりした……。

「そ、総一さん！　い、一緒に入りません……か？」

顔を真っ赤にする咲実。

「なつ！？」

魅力的な発案に驚く。

そ、そういうえば一緒に入ったことなかつたな。だ、だがそれは……。

俺は葛藤する。

入りたい、ものすごく入りたいが……耐えられるわけが無い。
もしそうなつたら……。

少し妄想する。

- - - - 妄想中 - - -

「咲実……」

「んつ、はあ……」

「ああ……」

「そ、そんなに気持ちいいのか……？」

「は、はい……ああんつ」

「さ、咲実……」

「いいか?」

「はい……」

少し赤みがかつた顔でうなずく咲実。

「全年齢なので見せられません!」

妄想が現実となり、お風呂でハッスル（死語）した後自分の部屋へ行き、同じベットに入る。

……結局してしまった。俺の意志弱いな……それにこの状態でも結構やばいんだけどな！

「総一さん」

顔を向けてくる。

顔近い。まあ当たり前なんだが。

「なんだ?」

「その、まだ、足りないんですか……?」
顔を赤くする咲実。

「つー?」

俺の心を読んだ……だと…？ 咲実、恐るべし……。Iijiは正直に
答えるか。

「ええっと……あ、ああ」

「そ、そうですか」

顔を背ける咲実。

「そ、その……いい、ですよ……？」

咲実の奴耳まで真っ赤じやねえか・・・・。

「どうしたんだ？ 今日はやけに積極的じやないか

「その……文香さんの言葉が……」

ああ、それでか。

「別に無理しなくてもいいんだぞ？」

「あ、いえ、それはただのきつかけで、その……」
顔を赤らめ俯きながら咲実。

「わ、私がその、したい、といつか……その……」

「咲実ー。」

咲実に抱きつく総一。

「ふええ、そ、総一さんー？」

突然の出来事で驚く咲実。

「咲実、もう我慢できない。」

—以下省略—

- - - 次の日 - - -

「二十九日

声が聴こえる・・・誰だ?

「総一さん」

「んっ?」

眠い眼を擦りながら眼を開ける。

「四、覚めましたか? 総一さん」

「あ、ああ……」

俺は体を起す。

「二十九日

「はい、おはようございます」

顔を近づけ咲実にキスをする。

「ん……」

「総一さん、朝御飯出来てるんで早く降りて来てくださいね」

「ああ、わかった」

俺は棚の上にある優希の写真を見る。

「優希、おはよ」

優希に挨拶をしてから着替え始める。

「今日はどうするかな」

まあ、デートって事は決まってるけどな。

リビングに行くと咲実が席について待っていた。

「お待たせ」

そう言って俺は咲実の正面に座り、テーブルに並んだ料理を見る。

白米、味噌汁、田玉焼き、少し焦げた焼き魚。
なんだ？ 焼き魚はこれがデフォなのか？

「あ、咲実……」

「え、ええっと……」

目を泳がせる咲実。

「総一さんの寝顔を見てたら……」

申し訳なさそうに咲実。

「そ、そっか」

優希が怒ったのがなんとなくわかつたかも……意外と恥ずかしい……

「まあ、やつらの事もあるわ」

「はー……」

2人して食べ始める。

「ところで咲実、今日何処行く?」

「ええと……」

思案顔をする咲実。

「総一さんと一緒に何処でもいいです」

出た、一番困る答え。とりあえず街に行くか。

「せついわれてもなあー、とりあえず街に行くか?」

「はい」

咲実が笑顔で返事をする。

朝食を食べ終え、少ししてから街へ行く事にした。

「で、街に着いたわけだが……どうする？」

「ええとどうしましょっ?」

咲実が聞き返す。

「うーん」

何か無いかな?。

辺りを見渡す。

お、映画館か、最近見てないしちょうどいいか。

「咲実、映画とかどうだ?」

俺は映画館を指で指しながら聞く。

「映画、ですか? 私今何やってるかわからないです……」

「大丈夫、俺もだ」

なんか面白そうなのやってないかな……おつ。

新・恐怖の館

恐怖の館……か、確かに大分前にベストセラーになった小説だよな。新つて事はリメイクかな?よし!。

「咲実あれ、見ない か?」

俺はその広告看板を指差す。

「え?」

咲実が総一が指差したほうを見る。

「さ、恐怖の館……ですか?」

少し顔を青ざめ、震えた声で聞き返す。

「ああ」

そういえば咲実の奴ホラー苦手だったな。

上田遣いで見つめてくる。

「えと、その……」

そんな田で見ても無駄だ! 怖がる咲実を見れるなんてほとんどない
からな! -

「じゃ、行こう」

そういって俺は歩きだす。

「ま、待ってください。総一さん!」

慌てる咲実。

「ん? なんだ咲実?」

「あの、この映画はやめません……か?」

咲実が服の裾を揃んで上田遣いで見つめる。

思わずその表情に決意が搖らぎたくなる。

いや、こんな事で揺らしていいはずない。貫き通すんだー。

「え、なんで？ 面白いんだよ？」

俺はわざととぼける。

「総一さん、私がホラー苦手なの知っていますよ……ね？」

今にも泣き出しそうな顔で咲実が見つめてくる。

「うん、でも俺に任せるとじゅ？」

俺はそれでも曲げない。

「や、それは……」

言葉を詰まらせる咲実。

「これが見たいんだけどなー、でも咲実が嫌だつていうならじょうがないかあー」

俺はあからさまに残念がる。

「うう……わかりました」

咲実が泣々頷く。

見る映画も決まりチケット売り場へ向かう。

「『J』は確か2000円だったかな？」

記憶を探つてみる。

「総一さん、学割があるので1800円ですよ？」

「おお、そういえば」

「これは2枚で3600円か……。」

俺は自分の財布を確認する。

ちよつと厳しいけど、自分で言に出したことだからな……よしー。

「こらっしゃいませ~」

店員が挨拶をする。

「えつと、恐怖の館 学生2枚で
やつぱり俺は4000円を出す。」

「あ、總一さん」

財布を取り出さうとする咲実。

俺はそれを手で制する。

「いいよ、俺が言に出したことだから俺が出すよ」

「で、でも……」

納得いかない様子の咲実。

「いいから

無理やり会計を済ませる。

「4000円お預かりします」

苦笑しながらお金を受け取る店員。

「400円のお返しです。」

「すみません、総一さん……」
申し訳なさそうに咲実。

「いいよ、俺が咲実と観たかつただけだから」

「は、はい。ありがとうございます」

少し顔を赤らめる咲実。

俺たちは指定された部屋に向かう。

運よく席は一番後ろの通路側を取る事が出来た。

「さすが有名な奴だけあって人が多いな。カップルばっかりだし」

映画が始まる頃にはほぼ満席状態で6割近くがカップルのようだ。

「そり……ですね……」

元気がなさそうに咲実。

「咲実、大丈夫か?」

さすがに心配だな……。

「た、たぶん……大丈夫、です……」

全然大丈夫そうに見えないんだが……。

「咲実、手繫こづか?」
手を差し伸べる。

「は、はい……」

総一の手を握る。

ちよつとその時館内の証明が落ちる。

お、始まるか……。

『新・恐怖の館』

いかにもホラーです。という感じの音楽と一緒にタイトルが出る。

女性A『ね、ねえ本当にここに入るの……？』

男性A『なんだゆり、お前もついで来てるのか？』

佐友里『だ、だつていかにも出そうだし……』

女性B『相変わらず佐友里は怖がりね』

佐友里『だ、だつてえ……祐美ちゃんは怖くないの……？』

祐美『別に、好奇心の方があるわね。智也君もさうよね？』

智也『そうだな、正直さつきからワクテカが止まらないな』

男性B『怖ければここで待つているか？』

佐友里『そつちの方が怖いよ！ 康介君一緒に残ってくれる……？』

康介『いや、悪いが俺も興味があるからな。一度入つたら生きて帰

つてこれるのは男女一人ずつだけ……そんな噂を聞いたら俺たち二三人研が行かないでどうする』

佐友里 ううへ

『智也、何で、ゆりはどうするんだ？』『行くのか？ 待ってるのか？』

佐友里
い、
行くよ！
一人で待てるのも怖いし……』

康介・しゃあ入るセ

#111111

ふむ、始まりは普通だな。
ここからの展開が楽しみだな。
それより
も……。

咲実に目をやる。

「咲実、何やつてるんだ？」

۱۰۷

咲実が目を瞑りながら俺の右腕にしがみ付いて震えていた。

「まだ怖いシーンないぞ…………？」

「こゝまで苦手だつたとは……知つてたけど。ちよつとやりすぎたかな……。

「ほら、咲実ちょっと見てみろって」

咲実の頭を撫でる。

安堵したのか恐る恐る目を開ける。

あ、まずい。ちょうど血塗られた女性（首ポロリ）が2階から落ちてきた。

時既に遅く。

『うきやああああああああああああああああああああああ』

おお、劇中のセリフとかぶつたすげえ。

上映中、咲実が2度とスクリーンを見ることは無かつた。

「大丈夫か？」
咲実

わすがにひよりとやつすせたな。

卷之三

恨めしそうに真っ赤になつた目で俺を睨む。

「そ、そんなに怒るなよ。あれはたまたまだって……」

「ふんっー」

ソッポを向く咲実。

うーんどうじたものか……。

その時咲実の方から「グゥ～」といつ音が聴こえてきた。

咲実の顔が赤くなっていた。

「そ、ついえればもう昼時か……まあ2時間ちょっととずっとしげみついて震えてれば気疲れして腹も減るわな……。」

「咲実、なにか食べたいのあるか?」

「ええっと……な、なんでも……いえ、喫茶店がいいです」

お、咲実の奴學習したな。まああんなことになつたから当然か。

「喫茶店か……」

「この辺にあつたかな?。

あ、そうえいば……。

記憶を呼び起しす。

- - - - 1年半程前 - - - -

「で、優希が行つてみたかつた喫茶店つて何処だ?」

「ええつと確かこの辺なんだけど……」

そこで携帯の地図を見ながら周りを確認する優希

「あ、あつた。」

指を指す優希

看板に目をやる。

喫茶ブランチ

「喫茶ブランチ？」

優希に聞く

「そうそう、大分前に雑誌で載つてたからいつか総一と一緒に行きたいと思つてたのよ」

卷之三

優希の奴、すごい楽しそうだな・・・。

「何がおいしいんだ？」

「えつとね、それはね……」

あれはおいしかったなあ～よし。

「じゃあ行こうか」

咲実の手を取り歩き出す。

「え？ 総一さん喫茶店、何処にあるか知ってるんですか？」

「ああ美味しいとこ知ってるから」

喫茶ブランチに向かう。

「いらっしゃいませ～。 お客様何名様ですか？」

「2名です」

「2名様ですね、禁煙席と喫煙席どちらにされますか？」

「禁煙席で」

「禁煙席ですね。 2名様禁煙席入りまーす」

「どうぞ」

奥の席に案内される。

「アーネスト・ヘミングウェイの小説研究」

店員が去つていいく。

「すぐに座れてよかつたですね」
周りを見て言う咲実。

ちょうど俺達たちで満席になつた。

「そうだな」

相変わらずの人気なんだな。

「所で総一さん。なんでこんなお店知ってるんですか?」

うーん今一瞬目が鋭くなつたのが見間違ひだといいなあ。

「ああ、1年半ぐらー前に憂希が教えてくれたんだ。こここの店が美味

俺は懐かしそうに遠くを見る。

「お」

咲実が申し訳なさそうな顔をする。

「ん?
どうした咲実?」

「いえ、なんでもないです」

「？ ならいいけど」

「と、所で総一さんこいつて何が美味しいんですか？」
咲実が無理やり話を変えてきた。

「あ、ああ昔と変わつてなければオムライスが美味しいよ」

「オムライス……ですか……じゃあ私はそれで

「ん、じゃあ注文するか。すいませーん」

店員を呼ぶ。

「お待たせしました。ご注文は何でしょうか」

「特製オムライス2つで」

「特製オムライス2つですね。お飲み物はいかがなさいますか?」

「あ、俺はコーヒーで」

「私もそれで

「かしこまりました。特製オムライスドリンクは2つ共コーヒーですね。ドリンクのほうは最初にお持ちしましょうか?」

「はい」

「では、失礼します」

店員が去っていく。

「まさかドリンクが付くとは思いませんでした」

「ああ、俺もすっかり忘れてた」

「それにしても……」

辺りを見渡す咲実。

「人が減る様子が全然ありませんね」

「やうだな。ホントすぐに入れてよかつたよ」

「こんなに混むなんてお料理楽しみです」
ワクワクしながら咲実が喋る。

「期待は裏切られないからな。楽しみにしていろといよ」

そこに店員がやってくる。

「お待たせしました。コーヒーになります」
一人の前にコーヒーを置く。

「いわづくつづくわ～」

「いのコーヒー……」

コーヒーを見つめる咲実。

「インスタントじゃなくてちゃんと豆から淹れでますね」

「ああ、いのはいわづくつづくリンクとかサイドメニューも美味しいからな」

「特に人気があるのがこのコーヒーとオムライスだな」

「やうなんですか。んつおいしい……」

「一 ハード口をつけた咲実。

「うん、変わつてないな。美味しいー」

- - - 数分後 - - -

「お待たせしましたー。特製オムライスになります」

「い)注文は以上でよろここでじょうか?」

「はー」

「では、い)ゆくつビーフ&チーズ

「えつと・・・い)の卵真ん中で切ればいいんですね?...ね?」

「ああ、い)ひやつて切るんだ」

俺は咲実に実演してみせる。

「うわぁ~中、とろとろですかね」

「い)のうまこ具合に半熟になってるのが美味しいんだ

「じゃあ私も.....」

卵を切る咲実。

「か)へおこしあります」

「いただきます」
手を合わせる咲実。

口にオムライスを運ぶ。

「！？ んう／＼＼＼＼＼

急に咲ぐが唸りだす。

「ど、どひした。咲実？」

「す」「いです！」「れす」「く美味しいです！」「のとんかとした卵」と程よく味付けライスが絶妙なハーモニーを生み出してですね・・・

・
笑顔で美味しいさを語りだす咲実。

「そ、そつか・・・・・そんなにか」
咲実の予想外の反応に俺は戸惑う。

「はい」

咲実が笑顔で答える。

喜んでるみたいだし、まあいいか。

「ん、相変わらずの美味しいだな」
一口食べる。

「あ、あの総一さん。」「これ……」
総一の前にスプーンを差し出す咲実。

「これは……」。

「あ、あーんです」

恥ずかしそうに顔を赤らめる咲実。

や、やつぱりかー！ というか咲実の奴恥ずかしいならやうなればいいのに……。

「ええっと……恥ずかしくないのか？」

「は、恥ずかしいに決まってるじゃないですか！ だ、だから早く食べてください！」

恥ずかしいならやめればいいのに……とは言えないよなあ。食べるか。

差し出されたオムライスを食べる。

「ど、どひですか？」

まだ恥ずかしいのか顔を赤くしたまま聞く咲実。

「美味しいよ」

俺は咲実に笑顔で返す。

「そ、そうですか。よかつたあ～

安堵する咲実。

……俺まで恥ずかしくなつてきたぞ……。

「えと、総一さんも……」

「え？！俺もやるのか？」

「は、はー……」

恥ずかしさついに咲実。

「あ、それは……」

ふと周りを見る。

……なんでもどこつもこつもやつてゐるんだ……！

驚くことにほとんどのカツプル客がやつていた。

「…………わかった」

そう言つてスプーンでオムライスをすくい咲実の前に差し出す。

「あ、あーん……」

くそつ！ やられるのもやるのも恥ずかしくなるじやないか！ 自分で顔が赤くなつていいくのがわかる……。

咲実がそれを食べる。

「ど、どうだ？」

「美味しいです」

笑顔で咲実。

「あ、せつか……」

お互に顔を赤くし、しばりべの間無言になつ黙々と食べ始める。

「ありがとうございました～」

「ふう～。とっても美味しかったです」
満足そうに咲実。

「そつか、それはよかったです」

咲実の奴、あんなに嬉しそうに……またくるかな。

「で、次は何処に行く？」

「ええっとじゃあ……」

喫茶店で昼食を取った後、デパートでウィンドウショッピングをした
り、ゲームセンターに行ったりして楽しんだ。

気が付けば大分夕が傾いていた。

「ふう〜。結構遊んだな……」

俺は公園のベンチに座り夕を見つめる。

「そうですね……」

つられて咲実も夕を見ながら肩を寄せる。

二人して無言になる。

何分、何十分そうしていたかわからないが、そろそろいい時間だな
……。

「そろそろ帰るか……」

「そう……ですね」

名残惜しそうに頷く咲実。

「何度も来れるんだからそんな悲しそうな顔するなよ

「はい」

笑顔で答える咲実。

二人が同時にベンチから離れ、歩き出す。

「明日はボウリングだし今日は早めに寝るか〜。なんせあの2人も参戦だからな……」

「そうですね。でも、総一さんなら大丈夫ですよ」

笑顔で咲実。

「うしー咲実にそう言われたら勝てる気がしてきたぞー！」

「頑張つてくださいね」

笑顔で咲実。

「おー! まかせとけ!」

ボウリング当田の朝

「咲実、まだかあ？」

俺は出かける準備し終わつて咲実を呼ぶ。

「もう少しだ～す

洗面所の方から咲実の声が聞こえる。

いよいよ今日、か……。最初は麗佳さんとのタイマンだと思つたけど、まさかあの二人が参戦するとはなあ。

。俺はあの三人に勝てるんだろうか？

総一に一抹の不安がよぎる。

いや、勝てるかどうかじゃない勝つんだ！

それでも不安は完全には消えなかつた。

「お待たせしました～」

ちゅうじの時咲実が来た。俺はその咲実の手を握る。

そうするとなぜか不安が和らいだ。

「？ 総一さんどうかしましたか？」

「いや、ただなんとなく

「？？？ なんとなく……ですか？」

「ああ」

自分を安心させたかつた。なんて恥ずかしくて言えない……。

「……不安、なんですか？」

「つ？…」

咲実の奴相変わらず鋭い……。

「大丈夫ですよ。総一さんならきっと
そう言って俺の手を両手で包む。

「ああ、やうだな」

不思議と自分の中にある不安が消えていく。

そうだな。俺には咲実がついてる。何も怖がる事はない。

「ありがとう、咲実」

「はい」

「よしー。」

俺は氣合を入れる。

「京都旅行を取りに行くぞー！」

「はいー！」

今俺は自信に満ちていた。なぜなら咲実がそばに居る、それだけで俺の力になるから。

だから俺は思わず。

「すうー」

大きく息を吸い込む。

「？ 総一さん？」

「待つてろよ。京都つよー」——「ー。」

俺は大空に向けて叫ぶ。

「そ、総一さん。近所迷惑ですよ」

咲実がオドオドする。

「あ、だから早く行こう。

そつと歩いて俺は歩き出す。

「ち、ち、ち……」

呆ながらも楽しそうに笑つ咲実。

待つてろよ！ 絶対に勝ち取つてもー

つづく

激闘の末、束の間の休息 後編（後書き）

やっと1話書き終わりました。す、ぐく……長いです。

次からはいよいよ本命のボウリングに入るわけですが（現在執筆中）、テンポがかなり速いです。もうすでに第3フレームまで入っています。

「ボウリング大会」みたいにダラダラ延ばしてもしょうがないで…。

そんな感じですが、これからも「シーケレットゲーム アナザーストーリー」をよろしくお願ひします。

12/7 追記

後書きの誤字修正

ボウリング大会第2回戦開幕（前書き）

麗佳とのタイマン勝負の予定だったが、手塚と高山が参加する事に

……。

ここに今、新たな火蓋が切って落とされる。

ボウリング大会第2回戦開幕

- - - ボウリング場 - - -

二回連続待ち合わせに遅れるところはさすがにまずいことこの事で早めに家を出た俺達だったが…………。
なぜか正座させられている俺。

「あの…………なんで俺は正座をせらりているんだじょつか…………？」
「そりやあ持ち合わせに遅れたからでしょ」

「それは…………まあ…………」

いつもより家を早く出たはいいが電車が止まつていて結局待ち合わせに遅れる羽田…………。

「でも連絡はしましたよね？」

「ええ、確かに」

「じゃあなぜ…………？」

「んー、何となく？」

「なんですかその理由？！」

「まあいいわ。許してあげる」

「文香さん、本当は何がしたかったんですか…………？」

「総一君が朝からやつて電車に乗り遅れたんじゃないかと思つて」
「この人そんな事考えてたのか！」

「そんな事するわけないじゃないですか…………」

「あー『めん』『めん』、本当に電車遅れてるみたいだし」

そう言って携帯を閉じる文香さん。

「まつたく……」

俺は立ち上がる。

「お疲れ様です。総一さん」

「ああ、まつたくだよ……」

始まる前から何でこんなに疲れるんだ……。

「あれ？ 手塚と高山さんね？」

手塚と高山さんの姿を探すが見つからない。

その時……。

「待たせたな」

「つけ、来てやったぜ」

その声を聞き、振り返る。

「高山さん、手塚……さん」

「おこ、御剣なんで俺だけそんな間があるんだ？」

「あ、いえ、すみません。ずっと呼び捨てだったんで……」

「……好きに呼べ」

「え？」

「好きに呼べって言ひたんだ！ 呼び捨てでもなん付けでもいい

でもいい！」

「ええっとじやあ……手塚さんで」

「……好きにしな」

「とうとう手塚君が『アレましたねえ～』

ずっと会話を聞いていた渚さんが参加してくれる。

「なつ？！」

渚の発言に驚く手塚。

「てめえ、なんでそつなるんだ！」

「だつてえ～手塚君は～シンデレなんですよね～？」

「てんめえ……殺されてえのかー！」

「いいけど私に勝てるのかしら？」

突如渚さんの雰囲気が変わる。

「くつ……」

「手塚、それくらいにしておけ。今のお前じや渚さんと同等かそれ以下だ。それと今日は息抜きに来たんだ。たまには肩の力を抜け」

「…………高山のおつさんがあいつなら…………」

高山の言葉に渋々頷く。

「手塚さん、少し丸くなつたわね」

と麗佳。

「言われてみればそうかも……口が悪いのは変わらないけどそれに同意するかりん。

「おい、お前ら聞いてるべー。」

手塚が怒鳴る。

「ひい！」

近くにいたかれんが驚く。

「ツチ、いきなり怒鳴つたりして悪かつたな」

「い、いえ……ちょっとびっくりしただけですから……」

「へえ～意外ねえ～あの、手塚君が謝るなんて」「つむせえな！ ただちょっと氣になつただけだ！」

「相変わらず素直じやないな」

高山が「やれやれ」と手を振る。

「やつてられねえーな！」

そつ言つてそつぽを向く。

「はいはい、手塚君のシンティレはいいからボウリング始めましょうか」

「だから誰が……！」

抗議の声を上げる手塚。

「で、投げる順番なんだけビ……」

「…………チツ」

手塚が諦める。

「手塚君、総一君、麗佳ちゃん、高山さん、の順番でいいかしら？」「いいぜ」

「問題ないです」

「ええ」

「ああ」

「じゃあボウリング大会優勝決定戦……スタートー！」

-----第1フレーム-----

「じゃあさっそく行くぜ」

そう言つて素早くボウルを取り投げようとする。

「はあー。」

『ロロ、ロロ、ロロ。』

手塚が投げたボールは的確にポケットを狙つ。

ガシャーン！

「まあ余裕だな」

手塚：ストライク

いきなり、か。文香さんといい手塚さんといい既つまこな……。だけど！

「總一さん……」

そつ言つて咲実が俺の手を握る

「ああ、まかせろ」

俺はボウルを手に持ち、構える。

「はあー。」

『ロロ、ロロ、ロロ。』

俺が投げたボールは手塚と同じく的確にポケットを狙つ。

ガシャーン！

総一・ストライク

「よし！」

思わずガツツポーズをする。

「へつ、やるじゃねえか」

「え？ あ、ありがとう」「やれこます」

「ああ？ なんだその間は」

「あ、いえ、まさか褒められるとは思ってなかつたので……すみま

せん」

「てめえ……人を何だと」

手塚さんが切れそうになる。

「お兄ちゃんすー」「ーー！」

それを優希が遮る。

「……チツ」

「ああ、ありがと」

「総一さん」

咲実が見つめてくる。

「ああ、大丈夫だ。いける」
俺はそれを笑顔で返す。

「はい」

咲実が笑顔で返してくる。

「次は私ですね」

麗佳さんがボールを手にする。

「麗佳さん頑張って～」

「麗佳さん、頑張つてくだわ～い」

かりんとかれんが応援する。

「ええ」

手を振り答える。

「はあ！」

「ロロ、ロロ、ロロ。

麗佳の投げたボールがガーターへ向かう。

「ああ～」

かれんが残念そうな顔をする。その時。

ガーターに落ちると思われたボールがカーブを描いてポケットに向かう。

「ー。」

さすがの手塚もこれには驚く。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「まあ、こんなとこいかしちゃ～。」

余裕の表情で麗佳。

「すう～い……」

咲実が驚きの声を上げる。

「さすが麗佳ちゃん、やるじゃなー」

「麗佳ちゃん、さすがです～」

文香さんと渚さんが関心の声を上げる。

「次は俺か。さすがに3人連続でストライクとは油断できないな……」

「だが」

そつ言いながらボールを手にし、すぐに投げる。

「ロロロロロ。

ガシャーン！

高山：ストライク

「俺もボウリングは得意なほうだ

「す、すごい……」

かりんが驚きの声を上げる。

「皆レベル高いよ……」

「さすが、ね」

「うう～私も参加したくなりましたあ～」

「ほんと、皆すごいね。さすが、若いだけの事はあるよ」

「皆さん、すごいです……」

それぞれが感想を述べる。

- - - - 第2フレーム - - - -

「ここでは負けられないな」

「はーーー！」

「ローローロー。」

ガシャーン！

手塚：ストライク

「悪いが本気で行かせてもらひませ」

やつ宣言する手塚。

す”い……技術的には文香さんや麗佳さんが上だけど正攻法で確実に攻めてる……。だけど負けるわけにはいかない！

「総一～手塚なんかに負けるなー」
かりんの声が聞こえて来る。

「総一さん頑張れ～」

かれんちゃんも応援してくれる。
「総一さん頑張ってください」
咲実も応援してくれる。

「ああー！」

俺はそれに答え、ボールを手にする。

「はーーー！」

先ほどと同じくポケットを狙う。

「ロ、ロ、ロ。

ガシャーン！

総一・ストライク

「総一君もやるわね」

「そうですねえ～」

「やるわね。総一」

麗佳さんが褒めてくれる。

「あっがとうござります」

「でも……」

そつと表情を変え、すぐに投げる。

「ロ、ロ、ロ。

今度はカーブではなく、的確にポケットを狙う。

自分のボールの行方を最後まで見ずに振り返る

ガシャーン！

「私も負けないわよ」

麗佳・ストライク

「…………」

俺はつい黙り込む。

手塚さん、麗佳さん、高山さん……どれも油断ならないな……。

「「れは……す」」こね

葉月が驚く。

「まつたく、余計にハードルを上げてくれたもん……だ！」

『ローローロ』

ガシャーン！

高山・ストライク

「まあ負ける気はないがな」

- - - 第3フレーム - - -

「か、かつこいい~」

かれんが田を輝かせる。

「た、高山さんす」いです！」

田をキラキラさせながら言つたれん。

「ん？ ああ、ありがと~」

「はあ~」

かれんがうつとつした顔をする。

かれんはああいうのが好みなのか……。

「ふふ、かれんちゃん完璧に高山さん」惚れたわね」「もひ、かれんつたら……」

「姉としてはやつぱり複雑?」

「うへんよくわかんないかな。ただ、ちょっと羨ましいかも」

「ふへん」

文香がニヤニヤする。

「な、なんですか? 文香わん」

「別に」

「は、はあ……」

「はあ!」

手塚が1投目を投げる。

ガシャーン。

手塚：ストライク

「久々のボウリングも悪くはねえな」

「うつ……手塚さんはターキー……か。さすがにきついな。

「どうした? 御剣、そんな難しそうな顔をして、俺の実力に怯えてるか?」「

手塚が「クク」と笑う。

「そんな事あるわけ無いじゃないですか」

「俺は悟られないように強がる。」

「へ、そうかい。じゃあ頑張れよ」

「総一さん、大丈夫ですよ。落ち着いてください」

「ああ！」

何を弱気になつてゐるんだ御剣総一！　咲実と一緒に京都旅行行くんだろ！

「つし！」

俺は自分に活を入れる。

「はあ！」

「ガロガロガロ。」

ガシャーン！

総一：ストライク

「おし！」

「ツチ、やるじゅねえか」

バチバチバチバチ。

火花を散らす。

「す、すごい戦い……」

「お兄ちゃん頑張れ！」

「ふふ、いい感じにあの二人打ち解けてるわね」

「なるほど、文香君は初めからそれが目的だったんだね」「ふふ、それはどうかしら？」

「私は皆が楽しめればそれでいいと思ってるだけだから」「そういうのにしておこう。さて、次は麗佳君か」「これは……私も負けてられないわね」「はあ！」

「プロ、プロ、プロ。

ガシャーン！

麗佳・ストライク

「…………」「えーっと……これってプロの大会……？」

優希がそんな事を聞く。

「まあ、確かにす」いけど……」「総一君が、思つたよりやるようだね」「これは面白い事になりそうね」「ふむ。全員ターキーか……面白」「高山さんが「フツ」と笑みを浮かべる。

「「高山さんが笑つた……！」」

今、この場の全員の意見が一致する。ただ1人を除いて。

「キヤー！ 高山さん格好いいです～！」「かれんちゃん、本当に高山さんに惚れちゃったみたいね」「はは、親としては複雑だね」「もう、かれんつたら……」「悪いが3人共、今回は勝たせてもらおう」

高田さんがそつ、宣言しボールを投げる。

「プロ、プロ、プロ。

ガシャーン！

高山・ストライク

わわざわざわざわ。

辺りを見渡すといつの間にかギャラリーがいた。

女性「なに？ これなんかの大会？」

男性「大会をやるって話は聞いてないけど……」

男子「わあーお兄ちゃん達すげー！」

女子「すげー！」

「はは」

俺は苦笑する。

「おい！ 前らー見世物じゃねーぞ！」

手塚さんが大声で叫ぶ。

子供達「ひいっ！」

子供達が泣きそうな顔で後ずさる。

「ちょっと手塚君、別に怖がらせなくていいでしょ」

「ツチ、悪かつたな」

男子「つうん、僕たちの方が騒いでめんなさい」

そう言って男子と女子が頭を下げる。

「……俺の方も怒鳴つたりして悪かつたな」
手塚がそっぽを向いて言ひつ。

「 「…………」」

「で、なんでお前らは黙つて俺を見るんだ?」

「ええつと、それは……」

なんて答へよつ……。

「だつて、ねえ?」

文香が首に振る。

「えー? えとその…………」

かりんが戸惑つ。

「私はあ～手塚君が丸くなつたなあ～と思いました～」

「…………チツ。ぐだらね一事言つてないでボウリング再開するぞ
!」

- - - 第4フレーム - - -

「全員ターキーか、面白みがねえな。……よし
何か思いついたのか手塚さんがこっちを見る。

「おい、御剣」
「なんですか?」
「お前右利き、だよな?」
「はい、そうですねけど……」

なんだ？

「IJのままやつても見るほつもやるほつも飽きるだろ？ だつたら
いつそつ左手で投げねえか？」

「左手……ですか？」

「ああ」

確かにIJのままやつてもやる方も見るほつも飽きるだり。だけど
俺には京都旅行が……。

俺は葛藤する。

「…………わかりました。その提案、飲みます」

「総一さん！」

「大丈夫だよ。絶対に負けないから」「で、でも……」

不安なのか上田遣いで見つめてくる。

「俺の事、信用できない？」

「……出来ません」

「え……？」

は？ 今なんて？

「IJ、ごめん。今、なんて言つた？」

「だから、出来ません」と……」

なぜー？ 僕つてそんな信用無いのかー？

「な、ど、びうして？」

「冗談です。ちゃんと信用してますよ

笑顔でそつと囁く咲実。

「そ、そつか……」

咲実の奴どもしたんだ……？

「面白そうね、私もそれに乗らつかしら？」

「ふむ、その話便乗させてもらおう」

不意に麗佳と高丘さんが会話に参加してくれる。

「クク、やつぱりじゅうじゅうねえと面白くねえ」

手塚さんがニヤニヤ笑い出す。

「じゅあせつやくべば」

手塚さんが左手にボールを持ち前へ出る。

「おひー。」

手塚さんの投げたボールがやや左にそれる。

「ロロロロロ。

ガシャーン！

「チッ」

手塚 1投目…5本

「やつぱり利き腕じゃないといつまくいかねえか

「オラアー！」

「ロロロロロ。

ガシャーン！

手塚 2投目・4本

「クソツ」

手塚・9本

「次は俺ですね」「やつぱり右よりボールが重く感じる……。これは軽い物に変えたほうがいいかな。

「すみません、ちょっとボール変えてきます」
俺は急いでボールを変えに行く。

「……よし！ これだな」

問題はボールが軽いせいで弾かれる事か。まあその辺はなんとかなるだろ？……たぶん。

「お待たせしましたー」

「ツチ、やつと帰つてきたか。さあと投げやがれ」

「あ、はい」

左手に持ち替えたから左の方から狙つたまうがいいかな……コントロールがうまくいくかわからないし。

「はあ！」

俺の投げたボールは三番ピン、左側に向かっていく。

ガシャーン！

「6本、か……」

思つたより難しいかも。

「總一」

「?
なんですか?
麗佳さん」

「やつぱり左手は難しいかしら？」

「そう……ですね。軽めのボールにしたんでコントロールはそこそこ出来るんですが、やっぱり軽い分ピンに弾かれますね」

「そう、ありがとう。それよりも……」

「なんかすごい見

「みたいですね」

咲実の奴どうしたんだ？

「一朝向かひしたの？」

「え！ いや、別に何も……」

なしよ。な?

「」

麗佳さんが思案顔を浮かべる。

一
ねえ、
総
一

そう言って麗佳さんかいきなり手を握ってくる

「え？」

「新編」のからかい

新編和漢書

麗佳さん、何かしたいんだ……？

「うへへへへへへ

そう思つた時、後ろから唸り声が聞こえてきた。

後ろを振り返ると煩めしそうな顔で咲実がこっちをみていた。

「え、えっと……咲実？」

その時、麗佳さんが握っていた俺の手を離して距離を置いている事に気が付かなかつた。

「総一さん、麗佳さんと手を繋いで随分嬉しそうですね」「いつ俺が嬉しそうな顔をした……？まあ、内心ドキッとしたけどね。

「いや、別にそんな事は」

「ちょっとここに来て下さい」

そう言つてものすごい力で俺を引っ張つていく。

「お、おい咲実！じゃない、咲実さん一体何処へ！」

「大丈夫です、すぐに終わりますから」

咲実がお馴染みの目が笑つていない笑顔で答える。

「ま、また咲実。まずは落ち着いて、冷静になつて周りを見るんだ

」

そう言つ自分が一番冷静じゃないけどな！

「私はいたつて普通ですよ？ ただ……」

そう言つて自分のカバンから縄（ムチ？）を取り出す。

なんでカバンの中にそんな物が！？ というかこの間も持つてたよな……。

「総一さんが大人しくしていれば、ですけれど」

まさか同じ体験をこんな短期間にする事にならうとは……。これからは気をつけよう。俺はそう心に誓った。

- - - - -
数分後
- - - - -

「ただいまです……」

今、俺の顔はかなりやつれているだろう。

「お待たせしました」

俺とは対照的に笑顔を振りまく咲実。

「お、おかれり……総一、咲実さん」

「お兄ちゃん大丈夫？」

「あ、ああなんとか……」

「つたぐ、てめえ遅すぎるんだよ。もう皆お前の番を飛ばして第5フレームまでやつちまつたぞ」

「すみません！」

手塚： 1投目 5本 2投目 4本 ≪ 9本

総一： 1投目 6本

麗佳： 1投目 3本 2投目 4本 ≪ 7本

高山： 1投目 6本 2投目 4本 ≪ スペア

第5フレーム

手塚： 1投目 8本 2投目 2本 ≪ スペア

麗佳： 1投目 8本 2投目 1本 ≈ 9本

高山： 1投目 8本 2投目 1本 ≈ 9本

全員利き腕じゃないはずなのにつましい……。これは頑張らないとな。

「ふう……よし！」

俺は気合を入れる。

「総一さん、頑張つてください

咲実が先程とは別人のように笑顔で応援してくれる。

「ああ！ まかせる」

コントロールはいいんだ、だつたら普通にポケットを狙つてやるー。

「はあー！」

『ローローローロ』。

俺の投げたボールがポケットに吸い込まれていく。そして

ガシャーン！

「つし！」

俺は思わずガツツポーズをする。

「やつた！」

咲実がまるで自分の事のよつて喜ぶ。

「ツチ。おい御剣、お前本当は左利きって事はないだろ?」

手塚さんが俺を疑いの眼差しで見てくる。

「え? 自分右利きですよ?」

「…………ツチ」

手塚さんが不機嫌そうにそっぽを向く。

「手塚君はあ～総一君に～負けて悔しいんですね～」

「あははは、そうかも」

「なんとなく、総一に負けるのが悔しいのがわかるかも」

「もう、姉さんそんな事言つたら駄目だよ」

「お兄ちゃん人気者だね～」

「はは、これも総一君の魅力だね」

「つだとめえら!」

「手塚」

高山さんが手塚さんを制止する。

「……チツ。御剣! 絶対負けねえからな!」

「俺も負けませんよ」

バチバチバチバチ。

2度目の火花が散る。

「2人とも仲良しんですねえ」

「まあ、元々手塚君がツンデレだつただけだし、意外と馬が合うのかもね」

「2人とも、火花を散らすのはいいのだけれど私たちがいるのも忘れないでね」

そう言って麗佳さんが割つて入つてくる。

「そうだな。2人だけの勝負じゃないからな」

高山さんもそれに続く

「そう、ですね」

「悪かつたな。まあ勝つのは俺だけだ。ククッ」

手塚さんが面白そうに笑い出す。

「いいえ、悪いけど私が勝たせてもらつわ」

「悪いな2人とも、2人がどれだけ頑張ろうと最後に笑うのは俺だ

「何を言つてるんですか？」

俺は5フレーム1投目を投げて振り向く。

「ゴロ、ゴロ、ゴロ。

「勝つのは俺ですよ」

ガシャーン！

総一・ストライク

ヘルヒ

ボウリング大会第2回戦開幕（後書き）

お待たせしました。麗佳編2話になります。
少しお詫びを スコアシートなのですが実はまだ用意出来てません。
申し訳ない。今週中には作るのでしばらくお待ちください。

突然の知らせ、激戦の末に（前書き）

手塚・高山の参加によりさらに熾烈さを増すボウリング大会、だがそんな時高山の所に一本の電話に入る。

突然の知らせ、激戦の末に

「やるじゃねえか御剣……」

「ふむ、思ったよりやるようだな」

「中々ね……」

「総一、あんたす”こよー”

「お兄ちゃんす”こよー”！」

「総一さん、さすがです」

「総一君いつの間にこここまで腕を上げたの？」

「総一君がんばってますねえ～」

「御剣さん、結構やりますね……」

「さすが、総一君だな」

皆からそれぞれ褒め？ うれる。

「ええと、ありがと」

さすがに皆から褒められると照れるな。

トウルルルル、トウルルルル。

そんな時何処からともなく電話の着信音が聞こえる。

「ん？ 電話？」

「ああ、悪い俺だ」

そう言つて高山さんが携帯電話を手に少し離れていく。

「俺だ、ああ、何？ それは本当か？ ああ

「高山さん何話してるんだりつ？」

「仕事の話じゃないからら？」

「高山のおっさんの様子からするとただ事じゃなさそだがなんだから嫌な予感がする……ただ、なんとなくそんな感じがした。

「ああ、わかった。手塚？　ああ、一緒にいる。ああ、わかった。
じゃあ、『』武運を」

「高山のおっさんなんかあったのか？」
珍しく真剣な顔で高山さんを見つめる手塚さん。

「ああ、手塚準備しろ。すぐに出るぞ」

「何？　なんかあつたのか？」

「ああ、相手の武力派が強行突破してきたらしー」

「強行突破？　それくらいの奴らなら余裕で蹴散らせるんじや

ないのか？」

「普通ならな。残念なことだが内部に内通者が居たらしー。それで
もつとも主力が抜けている時期を狙って攻めてきたらしい」

「ツチ、小賢しい奴らだな」

なんか難しい話をしてるな。なんか物騒な内容が結構あるけど……。

「だが一番効果的もある」

「わかつた。悪いな御剣、といつ」と俺たちの休暇はここまでだ」

「陸島さん、せつかく誘つてもらつとして悪いが……」

「仕事じゃあ仕方ないわよ。本当は最後まで楽しんでもらひたかつ
たけどね」

「ああ、久々に充実した休暇だった。もし、また機会があれば誘つ
てもらえないか？」

「ええ、わかつたわ」

「高山さん……」

かれんちゃんが寂しそうに高山さんを見つめている。
かれんちゃん、高山さんの事好きなんだらうな……。

「かれん、といったか？」

「はい……」

「かりんの妹だつたな。君はお姉ちゃんと一緒に元気があるな。今まで病気だったのが本当かどうかと疑つぱどにだ」

「あ、ありがとうございます」

「だから君は将来美しい女性になるだろ？。そして……」

高山さんがかれんちゃんを見つめる。

「必ず俺なんかヨリいい男が君のそばにくるだら」

「あ……」

かれんちゃんがショックを受けてその場にしつづくまる。
かれんちゃん本当に高山さんの事好きだつたんだな……。

「御剣」

突然手塚さんが話しかけてきた？

「手塚さん……」

「悪いな。出来れば最後までお前と勝負をしたかったがこつちは仕事だからな」

「はい、俺も楽しかつたです」

「ああ、俺も楽しかつたぜ」

そう言って手塚さんが手を前に出してきた。

「はー」

俺はその手を握る。

「またやりましょ？」

「ああ、機会があればな」

俺は手塚さんと強く握手をした。

「よつやく手塚君が完璧にデレましたねえ～」

渚さんが急にそんな事を言い出す。

「へんめえ……」

手塚さんが渚ちゃんを睨みつける。

な、渚さん……せつかくいに感じに終わつやつだつたの……。

「でもお～それが手塚君ですよねえ～。もひゅうと素直になつたら
うじうじですかあ～？」

「つかえなあ！ 余計なお世話だー！ 高山のおひさん、早く行くぞ
！」

そう言つて手塚さんは先に言つてしまつた。

「まつたく、素直じゃないな……とまあ相方があんな感じだからそ
ろそろ行くとするか

「もし、機会があればそのときせ頼む」

「ええ、待つてるわ

「お仕事頑張つてくださいね」

「た、高山さん！ わ、私……！」

「じゃあな

かれんちゃんの言葉を最後まで聞かずにして高山さんは去つていった。

「ま、まつ……」

呼び止めようと声を出すがつまべ出せなかつた。

「かれんちゃん」

俺はそんなかれんちゃんに優しく声を掛ける。

「な、なんですか？ 御剣さん

少し田元に涙を浮かべながらうつ聞いてきた。

「えーっと……」

やばい。声掛けたのは「……」けどなんて言おうか考えてなかつた……。
俺が悩んでいると渚さんが割つて入つてきてくれた。

その田は「私に任せなさいー」と黙つてここのよつと見えた。

「かれんちやん」

渚さんがかれんちやんを優しく包み込む。

「な、渚……さん？」

「我慢しなくていいこのよつとお姉さんがひやーっと吸はてるからあ

」
「あ……うく……ひくう……う……」

渚さんの言葉でかれんちやんが嗚咽を漏らす。

「うわあああああああああん」

そのままかれんちやんは大声で泣き出した。
かれんちやん、よつぱんじ圖山の事好きだったんだな……。

「かれん……」

心配そうに妹を見つめるかりん。

「あの子なら大丈夫だよ」

葉円さんがかりんの肩に手をやる。

「うそ……」

それから数分後

やつと落ち着いたのかれんちやんが顔上げて頭に謝り出した。

「『』みんなさい。急に泣き出しちゃひつて……」

「いいわよ、それくらい。泣きたい気持ちもわかるしね」

「そうですよ～」

「そうね」

「かれん、元気出して！」

「女の子なんですからそれくらい当然ですよ。ね？」

「なぜ俺に振る！？」

黙つて見守つていると咲実がいきなり振つてきた。

「総一さんならわかると思つて」

咲実が笑顔でそう答える。

「まあわからんでもないが……」

でもやつぱりそういうのは女子同士の方がわかると思つんだがな。
口には出れないけど。

「……そうだな。まあ、そのなんだ……かれんちゃん可愛いから大丈夫だよ」

「え？　あ、はい。ありがとうございます……」

急にかれんちゃんが俯き始めた。
ん？　俺何か変な事言つたか？

「「総一君……」」

「総一……」

なんだら？……3人から負のオーラといつか危険なオーラが出ている
気がする……。

でもなぜかそれ以外の恐怖が俺の隣から感じる。気が付くと冷や汗
が流れ、服が肌に張り付く。

「さ、咲実さん？」

俺は恐る恐る咲実の方に手をやる。

「なんですか？ 御剣さん」
「うーん相當怒つてゐるな……。」

「い、いえどうして怒つてゐるのかなつと思いまして……」
知らず知らずのうちに敬語になる。

「それは……」

「御剣さんがジゴロだからです！」

咲実が大声で突然そんな事を言い出す。

「ちょっと…？ ジゴロつておまつ！？」

男の子「ねえパパ～、ジゴロつて何～？」

女の子「なに～？」

男性「子供はそんな事気にしなくていいから。ほら、戻るよ」

女性「さあ、いきましょ」

そうしてずっと見物していた親子が去つていった。
うわあ……なんつーかこれは……。

「総一……まさかあんた初めからそんな理由でかれんに……！」
「ま、待てかりん！ それは違つ！ というかなんでそういう考え
に辿り着くんだ！？」

「総一君大変ね～」

文香さんがニヤニヤしながら楽しそうにみていく。

「文香さん何笑つてゐんですか！ 全然笑える状況じゃないですかよ

ね！？」

「え～だつてねえ？」

「そりでねえ～。最近はあ～咲実ちゃんの嫉妬も面白くなつてきましたあ～」

渚さん結構ひどい事言つてないか？ てかなんだよ面白いつて。でも嫉妬か。そうだな……。

「咲実、何嫉妬してるんだ？」

「し、嫉妬なんかしてません！……よ～」

咲実が真っ直ぐ俺を見てそう答える。
じやあなんで最後疑問系なんだよ。喉から出掛けた言葉を飲み込む。

そしてある指摘をする。

「田をまず左上にやる」

「つ～？」

驚いた様子で俺を黙つて俺を見る。

「その後右下に少し動かすそぶりをして結局相手を真っ直ぐ見つめる。それが咲実の嘘を付く時の癖だ」

「あう……総一さん、よくわかりましたね」

「何言つてるんだ。そんなの当たり前だろ？ 彼女の事がわからなくて彼氏なんてやつてられないよ」

「総一さん……」

咲実が少し恥かしそうに顔を赤らめる。

「はいはい、ご馳走様。そういうのは家でやってね～」

「そうですよお～ちよつとはこっちの身になつてみろお～ですよ～

「もう……」

「御剣さんって結構大胆ですよね」

「御剣らしいわね」

女性陣からそんな声が上がった。

「……悪かつたな」

恥かしくなりそっぽを向く。

「氣まぎー」……話を変えるか。

「や、それよりも、これからどうします？」

俺は文香さんに聞いてみる。

そう言つた時文香さんに「話逸らしたわね」と言われた気がしたのはきっと氣のせいだらう。

「まあいいわ。さうね、2人が抜けた穴を埋めてもいいんだけど……元々総一君と麗佳ちゃんのタイムマンだつた訳だし、このまま進めてもいいんじゃないかな？　て思つてるのよ。総一君はどうちがい？」

「やう、ですね……」

確かに開いた穴を埋めるのはいいこと悪いけど文香さんの言つ通り元々タイムマンだつたわけだからこのまま続けるのがいいかな……本音を言つと麗佳さんと本気で勝負したいんだけどな。それでいいか。

「タイムマンがいいです」

俺は文香さんにまつときつとやうへ、伝えた。

「麗佳ちゃんは？」

「私も御剣の意見に賛成です」

「そう、2人がそういうならタイムンで行きましょ」

「御剣、利き腕なしのルールはどうするの？」

「それはもちろんなしですよ。本気でやりたいんで」

「わかったわ。じゃあ行かせて貰うわね」

ボールを手にする麗佳さん。

「はあ！」

麗佳さんが投げたボールが右のガーターに寄つていいく、これは落ちるだろ？と思つたところでカーブが掛かり、ポケットに吸い込まれる。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「御剣が本氣で攻めてくるみたいだから今から本当の本氣で行くわよ」

「…………」

第6フレーム

総一：ストライク

麗佳：ストライク

「ちょっと序盤で張り切りすぎたかな……」

「まづいな……第3フレームでちょっと捻つた様な感じがあつたけどやつぱりか、ボールを少し軽いのに変えるかな。

「大丈夫ですか？ 総一さん」

「ああ、大丈夫。麗佳さん、ちょっとボール変えてきていいですか？」

「ええ、いいわよ」

さて、ボールを変えるのはいいがどれくらい落とそうか。今使つてるのが12ポンド、あまり軽くし過ぎるとピンに弾かれる。かといって今と余り変わらない重さだとコントロールが難しくなる。どうしたものか……

……軽いものにしておけ。俺は10ポンドを選んだ。

「お持たせしました」

「随分長かったわね。逃げたのかと思ったわ」
麗佳さんが冗談っぽく言つてきた。

「すみません、ちょっと自分が勝つイメージをしていました」

「随分自身があるみたいね」

「ええ」

「じゃあその力、改めて見せて貰おうかしら？」

- - - 第7フレーム - - -

10ポンドにして正解だったかな、やつぱりちょっと腕がだるい。

「はあ！」

俺の投げたボールがポケットに向かうが、やや右に反れる。

ガシャーン！

総一投目：4本

「…………」

やつぱりちょっときついな。

「御剣、大分疲れてるみたいね」

麗佳さんがすかさずそう言つてきた。

俺はその言葉を無視して一投目を投げる。

投げたボールは曲がらず、そのまま一番ピンのやや左よりに吸い込まれる。

ガシャーン！

「クッ……！」

総一2投目：5本

投げたボールは7番ピンを残し落ちていった。

「御剣、それ本当に疲れかしら？」

「！？」

うーんやつぱりわかるものなんだな……まあ意地でも否定するけど。

「いえ、本当に疲れただけですよ」

「そう、ならいいけど」

その言葉を最後に麗佳さんはそれ以上聞いてこなかつた。

「じゃあ行くわよ……はあ！」

麗佳さんの投げたボールは吸い込まれるようにポケットに向かう。やつぱり麗佳さんコントロールがいいな……。その軌道だけでストライクだと分かるほどだ。

ガシャーン！

麗佳・ストライク

「私は相手の状態で手を抜くほどお人好しじゃないわ。絶対に追い
つくわよ」
「……！ だが負けるわけにはいかないんだ！」

- - - 第8フレーム - - -

大丈夫だ……まだ、勝つてゐ、このまま逃げ切れば……いや、絶対
に逃げ切るんだ！

「はあ！ くつ
ボールを投げる瞬間に無視出来る程度の、しかしこの状況ではかな
り気になる痛みが走る。

俺はそのまま気合で投げる。が、ボールは検討違いの方へ転がる。

ガシャーン！

総一投目：5本

「総一さん……」

咲実が心配そうに見つめる。

「大丈夫だ、ちょっと痺れただけだから
咲実に心配させまいと笑顔で答える。

「はい……」

「…………」

麗佳さんがじつとうちからを見つめてくる。

「どうかしましたか？」

「……なんでもないわ」

そう言つてすぐに俺から視線をはずす。

うーん、今のでバレたかな……。まあいい、ちょっと失敗したけどまだ取り返せる、けどまた同じ痛みが来そうだな。気をつけよう。

俺はいつもと同じように投げる。いつもと違つところはやつぱり投げるときに氣になる痛みがあるぐらいだ。まあ別に少し捻つただけで大事ではないんだが、勝負所ではやはつきつい、コントロールが特に……。

ガシャーン！

総一2投目：2本

「どうしたの御剣？ そんなんじゃ追いつくわよ？」
すぐにボール投球フォームに入る。

「はあ！」

ガシャーン！

麗佳1投目：9本

「ちょっとズレたわね、でも……私のコントロールをなめないで…」

ガシャーン！

麗佳 2投目：1本

「くつ……！」

まづい、確実に追いつかれる……！

「これでもう追いついたも同然ね、降参かしら？」
麗佳さんが余裕の表情でそう言つてきた。

「まだですよ、本番はこれからです」
そうだ、本番はこれからだ！

- - - 第9フレーム - - -

「総一君、右手首捻つてるのかしら？」
後ろから文香さんの声が聞こえて来る。

「あ、やつぱり文香さんもそいつ思つ？ なんか総一投げるとき少しお顔をしかめてるから」「総一さん大丈夫なの？」
「お兄ちゃん大丈夫かな？」
「総一君は結構無理するからね」「総一君ならたぶん、大丈夫ですよ」
それに続いて皆の心配する声が聞こえて来る。

「別にそんな心配しなくても……全然問題ないですよ」

「総一さんがそう言つなら……総一さん、信じてますからね」

「おう！」

咲実に心配させてるんだ、絶対勝つんだ！

「麗佳さん、このまま逃げ切らさせてもらいます！ はあ！」

俺は慎重に、けれど指先に力を込めてボールを『手首を動かさずに』投げる。

この投げ方なら痛みはない！ 用は投げるときに手首を動かさなければいい、難しいけどやってやる！

俺の投げたボールはいい軌道を描き、ポケットに吸い込まれる。

ガシャーン！

総一・ストライク

「うしつー！」

俺は思わずガツツポーズをする。

「へえ～まだ諦めてないのね」

「当たり前ですよ！ なんせ京都旅行が掛かってるんですから！」

「そう、そんなに行きたいのね。それじゃ…………意地でも負ける訳には行かないわね、友達のためにも！」

麗佳さんが投げたボールは俺と同じような軌道を描き

ガシャーン！

麗佳・ストライク

「はいはい、二人共いいかしら～？」

⑨フレーム目が終わつた直後に文香さんが俺と麗佳さんに声を掛け

てきた。

「なんですか？ 文香さん」

「なにかしら？」

「ここからなんだけじゃなくておおおおおおおおおおと普通にやせんとつま
らないから、最後は交互に投げてね」

「交互……ですか？」

「どうしてだ？」

「そいつ、たとえば総一君がストライクを取った場合普通なら総一君
が続けて投げられるけど、順番を麗佳ちゃんに変えるのよ」

「あの文香さん、どうしてそんな面倒臭い事をするんですか？」

麗佳さんがもつともな意見を語る。

そうだよな…… そうする理由がわからない。

「それはもちろん…………」

「見ている方はそっちのほうが楽しいからよー」

言い切った！ この人言い切ったよ！？ まあ確かにずっと見てい
るだけだからなあ…… それくらいの楽しみがあつても良いかもしれ
ない。

「俺はそれでもいいですよ」

「そうね……私もそれに賛成です。そっちの方が面白うなので」

「2人ならわかってくれると思ったわ。じゃあよろしくね」

「ふふ、交互投げといつのも面白いけど、第8フレームのスコアは同じになつたというのも面白いわね」

「そうですね、それよりも投げる前に言つた言葉が気になるんですけど……」

「投げる前？『意地でも負ける訳には行かない』かしら？」

「いえ、その後の『友達のためにも』です」

「ええ、確かに言つたわね」

「麗佳さん友達のために頑張つてるんですか？」

「そうよ、私の友達で付き合つてる子がいるんだけど中々休日に2人つきりになる事が少ないのよね。だからそれを後押ししてあげようかなと思って」

「…………」

友達のために、か……出来れば譲つてあげたいけど……。

「御剣、あなたまさか、降参するとか言わないでしょ？うね？」

「そうですね……出来れば譲つてあげたいですけど……」「……」

ボールを取り、すぐに投げる。

ガシャーン！

「それでも負けるわけには行きません」

総一・ストライク

「わつ……その言葉を聞いて安心したわ。ひとつちの訳で手を抜かれても困るしね」

「プロ、プロ、プロ。」

ガシャーン！

麗佳・ストライク

総一、麗佳ともに1投目ストライク

ダブルか……今のところ麗佳さんの最高はターキー……フォースはまずないと見て問題ない。となると、ミスさえしなければ勝てる！

「何を計算しているのかしら？」

そんなことを考えていると不意に麗佳さんが話しかけてきた。

「京都に行つたら何処を回るか考えていたんですよ」

「呆れた……自分が勝てるでしょ？」

「ええ、勝てますよ。こんな風に！」

「ロロ、ロロ、ロロ。

ガシャーン！

総一・ストライク

「うしづー！」

大丈夫だ、この投げ方なら手首に掛かる負担が最小だ、いける！

「御剣、あなたとこんな燃える勝負が出来るなんて最高よー！」

「ロロ、ロロ、ロロ。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

総一、麗佳2投目ストライク

「うーん、操作するのも面倒臭いから私が連続で行つてもいいかしら？」

麗佳さんがそんな提案をする。

「連投ですか？ 別に俺はいいですけど……麗佳さんが不利になりますよ？」

「ええ、良いわよ。総一の絶望する顔が見られるから」

「やけに自信ありますね」

「それはお互い様でしょ！」

今まで一番綺麗なフォームでボールを投げる、そのボールは右のガーターへ向かっていった。

「そのコースは……」

間違いない、カーブだ……こんな土壇場でカーブを使うなんて！

ガーターに向かっていたボールがギリギリのところで弧を描き出し、綺麗にポケットを狙う。

くそっ！ 残れ……残れええええ！

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「あつ……」

俺は足元から崩れ落ちる。

「ふふ、私の実力がわかつたかしら？ これではあなたはストライクを取るしかなくなつた。この状況の中あなたは何処まで冷静に投げられるかしら？」

くそっ！ 何を怯えている御剣総一！ お前はこんな事で諦める奴なのか！ 咲実と一緒に京都旅行に行くんだろ！」

「…………まだです。ここで俺がストライクを取れば同点になります。勝つことは出来なくなりましたが、負けません！」

「そう、じゃあその意気みせて貰うわ」
俺はすぐにボールを手に取る。

「総一さん……」

咲実が心配そうに見つめる。

この顔は何回見ただろうか？ 俺は咲実の心配そうな顔をあまりみたくない、そう思つていてもいつも心配をせてしまつ。だから俺はいつも……。

「大丈夫、絶対に負けないから」

笑顔でそう答える。咲実の不安がなくなるように、いつも。

「はい！」

俺のその言葉に咲実もまた、笑顔で答える。

「じゃあ行きます！！ はあっ！－！」

ストライクを絶対に取るんだ！

俺の投げたボールは真っ直ぐに……そして確実にポケットに向かって転がっていく……。

「総さん！ 総さん！ 早く行こよしょー！」

咲実が坂の上から俺を呼ぶ。

「ああ！ といふか咲実、少し落ち着け。三年坂で転んで残念坂になつたらどうするんだ？」

「ふふ、総一さん、そんなお約束の駄洒落を言つてもつまらないですよ?」

「いや、お約束だからいいんだろ」

咲実が止まつてゐる間にその距離を縮める。

卷之三

俺と話していく油断したのか石段で足を躊躇咲美。

「危ない！」

俺は咄嗟に咲実に抱き抱える形で支えに入る。

「あ……ありがとうございます」「うわー」

「ああ、気をつけるよな」

「はい……ありがとうございます」

咲実の顔が若干赤く染まっているのが見える。やばい俺まで恥かしくなってきた……。

「あの、総一さん、もつ……」

「あ、ああ、そうだな」

若干寂しい思いもあるが咲実から離れる。

「えと、さ、清水寺に行きましょー!」

「そうだな」

まだ少しぎこちない空気が流れるがそれは無視することにする。

「それにしても……京都旅行、これてよかつたな」

「はい、そうですね。『麗佳さん』に感謝しないといけませんね」

「ああ、そうだな……」

あのボウリング大会熾烈を極め、最後には9フレーム時点でのスコアがほぼ同点という事が起きた。

そして最後は

俺が9本ピンを倒すという形で勝負はついた。合計スコアの差は僅か1本で俺の負け、最後の最後で倒せなかつた。正直、かなり悔しかつた。今でも悔しい。自分の手で京都旅行が手に入らなかつたのが……。じゃあなんで今ここにいるのか? ということになるが実は麗佳さんが欲しかつたのは旅行の券ではなく、テレビだつた。麗佳さんが景品を手に入れた後に聞いたんだが、麗佳さんが嘘をついたのは勝負を盛り上げるためだつたらしい。見事に騙されてしまつたというわけだ。

そこで麗佳さんが『私、彼氏いないから旅行券あなたに譲るわ』と言つて譲り受けた。それで今ここにいるわけだ。

「総一さん！ 早く行きますよー。」
「わかってるって！」

今回のボウリング大会では負けてしまったが……もし、また次があるのなら……。

絶対に勝つ！
そう心に決めた。

Fin

> i 1 8 5 5 4 — 1 7 4 8 <

突然の知らせ、激戦の末に（後書き）

終わりましたあああああああああああああ！

はい、終わつてしましました。麗佳編は何だが短く感じますね。
まあ1話の文字数が多いのでそう思うだけで『ボウリング大会の』
半分ほどはあるんですが……。

なんだかこれで終わりだと思うと寂しい感じがしますが！「こじで
止まる暇はないです、なんせオリジナル小説が残っていますから。
シークレットゲーム After Story は終わつてしまいま
したが、これからもよろしくお願ひしま

????「ちょっと待て、何勝手に終わらうとしてるんだ？」

トペルカ「あなたは……！」

????「修平？」修平何処行つたの～？」

修平「琴美、ここだ」

琴美「あ、居た居た。もう、急に居なくならないでよ」

修平「悪い、こいつが俺たちの事話さずに終わらうとしてたからな」

琴美「そなんだ」

トペルカ「あーえーとそれは……まだ内緒にしておきたかったとい

うか……その……」

修平「言い訳はいい、それより俺たちの事説明してくれ。どうせこ
れでバレたんだからな」

トペルカ「わかりましたよ……」

トペルカ「主人公に言わされたので頷く事しか出来ないわけでは
い、シークレットゲームは終わつてしましましたが、まだ『シーク
レットゲーム CODE : Revise』があります。そのタイト
ルとは……」

トペルカ「です。これ以上は言いません詳細情報は一切なしです。公開は4月を予定しています。シークレットゲームはまだまだ続くんですよしくお願ひします」

トペルカ「これでいいですか?」

修平「ああ、それでいい。じゃあ琴美行」「つか」

琴美「うん!」

トペルカ「はあ～まさか宣伝を強要されるとは……」

「？？？」「じゃあ俺達の宣伝もしてもらおうかな」

「？？？」「そうね、発表は私たちの方が先だったのに先に宣伝されちゃつたし」

トペルカ「今日はよく人が来る日ですね……」荒木さんに森下さん

荒木「ああ、他のやつに宣伝されたからな俺達が出てきた」

トペルカ「いや、でも宣伝も何も、もう去年発表してるじゃないですか」

森下「でも結局投稿延期してるよね?」

トペルカ「そ、それは……」

荒木「だな、いい加減投稿日は決まってるよな?」

トペルカ「……決まってます」

荒木「じゃあ言つてくれ」

トペルカ「オリジナル小説公開は4月になります! 絶対です、変更はしません!」

森下「今日までずっとオリジナル小説って言つてるけどタイトルは決まってないの?」

トペルカ「もちろん決まっていますよ。そのタイトルとは

学園物語……ガクモノ……」

トペルカ「です」

荒木・森下「…………」「」

トペルカ「あの、なんか反応薄くないですか?」

荒木「いや、だつてなあ?」

森下「うん……なんかありきたりといつかテキトーっていうか……」

トペルカ「失礼な! こんなタイトルのものを見たことありませんよ! それに真剣に考えた結果ですよ!~?」

荒木「あーまあ、いいや。じゃ美冬、戻るうぜ」

森下「うん」

トペルカ「え? あ、ちょ! ? それだけ! ?」

トペルカ「…………えと、シークレットゲームとガクモノ! ! を
よろしくお願いします!」

追記：現在シークレットゲーム IHFは諸事情に凍結しております。
す。申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6314m/>

シークレットゲーム After Story

2011年5月20日13時02分発行